
Fate/stay night **神様の力を得た少年IF**

秋風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/stay night 神様の力を得た少年IF

【Nコード】

N4106N

【作者名】

秋風

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのは、神様の力を得た少年のIFストーリー！もしあの時ネギま！ではなく、迅がFate/stay nightの世界に転移してサヴァントになったら？そんなIFストーリー！実は作者はゲームやったことないです。漫画と他の先生の作品が頼み綱で描きます。しかもあるサヴァントは登場しません。それが迅のポジションになるからです。今回はがちでウイキや他の作品だよりです。不快だと思った方はすぐにまわれ右。もしくは右上のx印をクリックしてください。そして迅お得意の原作崩壊が待

ってますので、それでも見てやるよコンチクショーという方は閲覧
してください。ちなみにEFとコメントしてますけど、最後の最後でな
のはたちは出す予定です。お楽しみにwそれではどうぞw

この小説を読む前に（前書き）

とりあえずやっつけてしまいました。新作です

現在スランプ中で、療養の作品だと考えてください。で、とりあえずFateを題材ですが、神様シリーズが中心となります。長い作品ですが、療養具合によって濃くないようになるので、よろしくお願ひします

この小説を読む前に

この作品は魔法少女リリカルなのは〜神様の力を得た少年〜のIFストーリーとなります。リリカルなのはを知らない、もしくはこの作品を知らない方は見ることをお勧めしません。

さらに作者の私は漫画と他の作品から原作を読みとり、書いています。ゲームを知らない私の作品は駄文になる可能性が十分考えられます。なのでゲームを純粹に愛したりしている方は見ることをお勧めしません。

そしてこの作品を知っている方はわかると思いますが、当然のごとく原作破壊です。Fate/stay nightが大好きだという方は見るのをご遠慮いただきたい。抗議をいただきましたくないので。

これだけ私が注意しても見る！という方は、どうぞ第一話をご覧ください。私の暴走小説、とくにご覧あれ・・・

この小説を読む前に（後書き）

次回より本編です

第一話「たどり着いた世界、出会った少女」(前書き)

とりあえず第一話です。療養するはずが手の込んだ作品になりました。とりあえず少しずつ回復に向けて頑張ります。

第一話「たどり着いた世界、出会った少女」

アテナside

「……………まったく、あの子ときたら」

まさか自分を犠牲にしてあれを使うなんて……

「はっはっは！なかなか良い若者じゃないか！」

「ゼウス様、洒落になってません。でもまあ、彼はどこか違う覇気を感じますね」

「うむ、だからこそ……彼にまだ死んでもらっては困るわけじゃ」

「そうですね、未来の選ばれ者……そのためにも」

「ええ、別世界に送りました。後は彼が自力で何とかするでしょう。帰り方や何やらは」

正直心配といえば心配だけど、まあいいか。

「では私はこれで」

「うむ、下界の漫画やアニメにふけるでないぞ？」

「……………はい」

さあ見せて頂戴？神に選ばれた、真の転生者の次の物語を……

迅side

………ここはどこだ？

「いてて……いったい、何だっというんだ」

思いつきりテーブルに叩きつけられたのか、テーブルやら家具がポロポロになっていた。どこかの部屋か……？なんだかアンティークなものだらけだけど……

「ゼロ？」

『はい、マスター』

「よかった……あれ？リインフォースは？」

『あなたが巻き込まれる直前で転移させたので、大丈夫です』

そっか……よかった。

「で、ここどこ？」

『それは……』

ドンドンドンドン……

「？」

ああもう、いったい全体、なんだっていうのよ！

ん？ドアの向こうから声がするぞ？この声は・・・

ドオン！

そこには黒髪でツインテールの少女が立ってた。あの子、まさか・・・

「・・・で？あんたが私のサーヴァントってことで間違いない？」

「・・・は？」

ここ、もしかして『Fate/stay night』の世界？

凜side

聖杯の探求・・・それはこの遠坂家において魔術の血とともに代々受け継がれてきた宿願である。私の父は前回の聖杯戦争で帰らぬ人となった。それ以来私も聖杯戦争へ参加するため準備を重ねて来たのだ。

「さて・・・準備は万端、体調はよし！」

私は着替えを終え、自分の体調を確認する。

「うん、我ながら絶好調！これならサーヴァントの召喚もバッチリね」

その日、朝から私の気分は高揚していた。10年来の目標だった聖杯戦争が今まさに始まるうとしている。今日はその参加条件となるサーヴァントの召喚を行おうことにしていたのだ。

Das material ist aus Silber Eisen.

素に銀と鉄

Der Grundstein ist aus Stein und der Grundhorzog des Vertreg.

礎に石と契約の大公

私は呪文を唱えながら父の最後の言葉を思い出す。

『凜、聖杯はいずれ現れる。あれを手に入れるのは遠坂の義務であり、魔術師であるならば避けては通れない道だ』

Der Ahnist meiner grosser Meister Schweinorg.

祖には我が大師シュバインオーグ

Schutz gegen einen hcfziger Wind.

降り立つ風には壁を

Schlies alles Tor, Geh aus de

r K r o n e .

四方の門は閉じ王冠より出で

Zirkulier die Gabelung nach de
m Konig .

王国に至る三叉路は循環せよ

それが父の最後の言葉

F u l l , F u l l , F u l l , F u l l , F u l l .

閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ閉じよ

E s w i n d f u n f m a l w i e d e r h o l t . N u
r i s t e s d i e v o l l e Z e i t g e b r o c
h e n .

繰り返すつどに五度 ただ満たされる刻を破却する

最後の最後で、あの人は父親ではなく魔術の師として言葉を残したのだ。

A n f a n g

S a t z .

告げる

ならば私は魔術師として生きよう。そして見事、聖杯をこの手にしてみせる

Du uberlastest alles mir, Meins
chicksal uberlastest alles seine
m Schwert.

汝の身は我が下に わが運命は汝の剣に

Das basiert auf dem Gral, antw
ort wenn du diesem Wille und d
iesem Vernunftgrund folgt.

聖杯の寄るべに従い この意この理に従うならば応えよ

Liegedes Gelubde hier.

誓いを此処に

Ich bin die Gute der ganze Wel
t.

我は常世総ての善と成る者

Ich bin das Bose der ganze Wel
t.

我は常世総ての悪を敷く者

Du bist der Himmel mit drei Wo
rtseelen.

汝三大主 言霊を纏う者

Komm, aus dem Kreis der Unterdr
uckung

抑止の輪より来たれ

der Schutzgeist

天秤の

der Balkenwaage !
守り手よ

(よおおっし、手ごたえは最高!!これはもうこれ以上ないって言うカードを引き当てた・・・ッ!)

そう思いながら私は目を開けた。でも、私が敷いた魔法陣の光は消えていた。そして何も起こっていない。私は思わず声を上げた。

「・・・ちょっと、なんで何も起きないのよ!」

そんな・・・もしかして・・・

「まさか、失敗・・・・・・・・?そんな!儀式は完璧だったはず!!」

私が!あれだけ魔術の勉強を続けた私が!失敗なんて!そんな・・・

ドオン!

「何!?居間の方から・・・!!」

突然の爆発。私は急いで階段を駆け上がり、走る。

「ちょっと、ちょっと・・・!!」

ドアを開けようとするけど、あかない。

「ええいもう！　いったいぜんたい、何だったのよー！」

私は冷静さを失い、力任せにドアを蹴破った。後の修理のことなどまったく考えず。するとそこには、私と同じくらいの男の子が私のことをキョトンとした顔で見ている。

迅side

おいおいおい・・・聞いてねえよ。これってもしかしてサーヴァントとして召喚されたのか？

『（らしいですね、しかもアーチャー・・・英霊エミヤの代わりっぽいですよ）』

まじか・・・

「で？　あんたが私のサーヴァントってことで間違いない？」

「・・・（この場合、どう答えよう）」

『（そうですね、マスターの場合サーヴァントというより次元漂流者ですし・・・え？）』

「（どうした？）」

『（マスター、貴方の体・・・）』

「（体？）」

体を見ると、微妙に成長していた。しかもバリアジャケットを着た状態だ。ほう、高校生の俺ってこんぐらいだったっけ？

「（アテナと連絡取れればいいんだけどなあ……………）」

天界

「へっくしょん！」

「アテナ様、風邪ですか？」

「……………そうかも」

「こたつでおなか出して寝るからですよ」

なんて、アテナはくしゃみをしていた。

「ちょっと、いいから答えなさいよ。あなたがサーヴァントなんでしょ？」

「……………らしいな」

はあ……………俺は聖杯戦争に付き合うことになるのか……………不幸だ

「でも君が魔術師か？」

「令呪よ、文句ある？」

言いながら凜が俺に令呪を見せた。

「・・・なるほど、確かに本物だ・・・ま、俺がサーヴァントになる以上全力は尽くすけど、お願い聞いてくれるか？」

「お願い？」

怪訝そうな顔で、凜は首を傾げる。

「1つ、3食飯つける。2つ、戦いであんまり手出ししない。3つ、寝床と服をくれ。4つ、俺多分霊化できないからよろしく」

「・・・何それ、まるで人間じゃない。てか、霊化できないってどういこと!？」

ギクウ!

「ま、細かいことは気にするな」

「・・・それより、二つ目。戦いで手を出さないってどういこと
「よ

「俺の召喚が『これ』だからな、戦闘経験なんてないだろ。だつたらウロチヨロされても困るし、下手に人質に取られるのも困る」

というか、凜って確かキャスターとの戦いで人質に取られるからなあ・・・

「あ・・・」

「？」

「あつたま来たーっ！」

おおっ！？

「ちょっとアンタ何様のつもりよ！黙って聞いてりやズケズケズケズケとツ！」

「短気だな、これじゃあ戦いだと不安・・・」

『（マスター、それ以上言うのはまずいです）」

「（は？）」

「そこまで言うならやってやるっじゃない！アンタは誰に従うべきかってこと教えてやるわッ！」

・・・ん？このフレーズはまさか？

『（そのまさかだと思えますよ？マスター・・・）』

「ま、待て！令呪は使うな！それが貴重なものかくらい・・・！」

「うるさいうるさいうるさい！大人しく私の言うことを聞けー！」

令呪が光、部屋が光に包まれた。

数分後

「・・・馬鹿か、君は」

「うるさいわね、私だってこんなことに令呪使うなんて思ってなかったわよ」

「・・・まあ、一つだけ撤回しよう」

「え？」

「さっきの命令だけど、君に随分な力を感じた。2つ目の要求はなかったことにしてくれ」

俺が言っていると、凜は少し笑った。

「じゃあ、私をマスターと認めるのね？」

「ああ、よろしく頼むよ『マスター』」

凜 side

なんか、同い年の男の子のサーヴァントなんてびっくりね。いったいどんな英霊なのかも気になるわ。でもその前に・・・

「オーケー、じゃあ最初にあなたのクラスを教えてちょうだい」

私が言っていると、彼は少し困ったようだった。

「それが、俺にはクラスがないらしい」

「は？」

「能力的にはそれぞれの能力が使える。君が好きに呼ぶといい」

「………何それ、ありえない」

まったく、なんなのよこいつ

「だが名前は言える。神谷迅だ」

「神谷迅？そんな英雄いたかしら」

「気にするな。君のサーヴァントであることには変わらない」

なんかはぐらかされた気がするけど……何かしら、この違和感

「ねえ、あなた喋り方強制してるでしょ。普通でいいわよ」

「ん？そう？」

「その方が自然ね……そうそう、私は遠坂凛よ」

「凛か……良い名前だな」

名前を褒められたの初めてね……

「ま、ともかくよろしくね、迅」

「ああ、凛」

望んでいたものとはちょっと違うけど良しとしよう。だってこれで
全ての準備が整ったんだから。いよいよ私の聖杯戦争が始まるんだ

第一話「たどり着いた世界、出会った少女」（後書き）

秋風「はい、ということでIFです!」

迅「これはどういう経緯?」

秋風「もしも迅がネギま!じゃなく、Fate/stay nightの世界に行ったら?ということですよ」

迅「そうじゃない、なんでこれを書くことになった」

秋風「実は本編が全てスランプでな、俺が気分転換に書いたというものもあるが、友人からお前はFateを書かないのかと言われたので」

迅「読者が混乱するだろ」

秋風「大丈夫、俺はこの読者を信じてるから!」

迅「でもお前、Fate/stay nightの知識あんの?」

秋風「・・・コミックと赤夜叉先生の銀魂クロスで流れだけ」

迅「これってルートあんだぞ」

秋風「知ってるよ!だからイリアファンのためにもまずイリア死なせないし、桜暗黒化ないもん!」

迅「もんとか言うな気色悪い」

秋風「うるさいな・・・まあ、そういうことでセイバールト・・・
っぽいようななにか別の物体です」

迅「反吐が出ると思った読者は引き返せ、今のうちだ」

秋風「では次回どうご期待！」

迅「次回、第二話『邂逅』ではまた次回！」

第二話「邂逅」(前書き)

とりあえず書き下ろしました。相変わらず戦闘描写がダメな自分

ダメっていうか、スランプだとこんなになるんだ・・・ショックだ

第二話「邂逅」

その日の夜。俺と凜は学校の屋上へ訪れた。なんでも、凜が俺にこの街を見せ、地形を覚えさせたいらしい。

「わかる？ 迅・・・川の向こうが市街地の並ぶ新都。そしてこっち側の住宅街が私達のいる深山町よ」

「へえ・・・なかなか広い街だ。でも大きな力を使うのは場所が限られるな・・・例えばこの学校の校庭・・・そして橋・・・後はビルの上・・・力を制限されるのはこの入り組んだ市街地の道路・・・か」

さつき確認したけど、力はちゃんと使える。ネギまの詠唱呪文、奥義の一通り、そしてガンダムやガツシユの呪文、仮面ライダー・・・違っているところと言えば、身体能力が微妙に上がっている。理由は簡単、体が急激な成長を見せたからだ。本来の肉体は15歳だった。なのに今は17歳くらい。若干身長が伸びている。

「大きな力って・・・例えばどんな？」

「・・・そうだな、やるつもりはないが・・・町の半分が消えるくらいだ」

「何よそれ、超規格外じゃない」

「そうか？」

「もしあなたがセイバーだったら、どんなに凄い能力があったのか

しら」

ああ、そういえばこいつはセイバーが良かったんだっけ？

「なんだ？俺じゃ不服か？」

「そりゃあね、クラスのないサーヴァントじゃ・・・そうなるわよ」

「・・・確かにそうだろうが、凜。俺はセイバー以上の力を発揮する。そのうち俺に感謝するだろ」

「たく、俺は嫌々この戦いに巻き込まれたのに・・・」

凜 side

私がちよつとした意地悪を言うと、迅は少しだけ拗ねてしまった。

(こいつ、もしかして拗ねてる?)

なんだ、ちよつとは可愛い所あるじゃない。

「ええ、期待してるわ、迅」

そういえば、こいつにはまだ聞いてないことがあったわ・・・

「迅、貴方はなんの武器を？」

「主軸は剣と考えてくれていい。他にも武器は一通り、それに素手に魔法、魔術 etc... まあ、なんでもござれだ」

「ふーん・・・でも、魔術じゃなくて、魔法？」

「そうだ。魔力供給のラインを必要としない。万物に宿る魔力、そして己に宿る魔力を媒体に、それを撃ちだす。ま、才能がなくてもできるってことだ」

などと、迅は魔法について教えてくれる。なるほど・・・

「そういえば、剣って言ってたけど・・・あなたは霊化できないのにどこへ？」

「ああ、それを言わないのはあれだったな。これが俺の相棒さ」

そう言ってブレスレッドを見せる。特に変わったところのない、寶石がついているブレスレッドだけど・・・

『初めまして、凜』

「え!？」

私は驚いた。突然ブレスレッドが喋り出したのだ。

「こいつの名前はゼロ。見ての通りブレスレッドだが、俺の意思で剣にもなる」

『この世界にはない『デバイス』というものに当たります』

「デバイス？」

「ああ、俺はどつやら並行世界から召喚を受けたようだ」

並行世界・・・聞いたことがあるわ。パラレルワールドってことね。

「だから貴方にクラスがない？」

「そうかもしれないな」

ふーん・・・でも

「強いんでしょう？」

「ああ、最強と言ってもいいかな」

などと迅がにやりと笑う。ふふ、少し面白いわ

「ほーう、最強とは聞き捨てならねえなあ」

「!？」

突然聞こえた声には私は上を見た。そこには男がいた。

「そんならひとつ、手合わせ願おうか」

(敵!？しまった油断した!)

「ククク、ここらで怪しい気配がするってんで見に来たらとんだ拾いものだ・・・」

やばい、どっぴする・・・

「お前らが最強だってんなら……ちったあ楽しませてくれるんだよなあ!?!」

「槍　ランサー!」

(いけない!ここじゃ向こうの間合いだ……どこか迅に有利な場所へ……!)

そう思いながら下がると、フェンスにぶつかる。つく……!

「行くぞ!」

「凜!飛べ!」

「!」

それしかなさそうね……!

E s i s t g r o s s e s i s t k l e i n !
軽量 重圧!

「迅!着地任せた!」

私は屋上を飛び降りる。

「おう!」

迅が私を抱えて地面に降り立つ。

「よし、今のうちに・・・！」

「待て凜！」

「逃すか！」

上を見ると、上からランサーが槍を突き出していた。

ガキイン！

しかし、それは私には届かなかった。

「!？」

迅が、翡翠に光る剣を携えていたから。

迅side

まさか原作と同じことをするはめになるとは・・・

『マスター、あんまり余裕ないですよ？』

「わーってる」

「てめえ、何者だ？セイバー・・・か？」

「ああ、クラスか？俺にクラスはない」

「ふざけるな！クラスのないサーヴァントなど聞いたことが無いわ！」

言いながらランサーが俺に槍を向ける。速いな・・・だが！

「ふ、別にクラスなど関係ないだろ。戦いにおいてな！」

「ほざけ！クラス無し風情が・・・斬り合いでこの俺に勝てるのも思っただか！」

「・・・・・・・・写輪眼！」

俺は写輪眼でその攻撃を見切る。

「何!？」

「ゼロ！」

『ロードカートリッジ』

「チャージセイバー！」

ゼロを振り下ろす。すと思った以上にパワーがあつたのか、校庭が割れた。ランサーはとっさに引いたらしく、避けていた。

ランサー side

ふざけた奴だと思っていた。サーヴァントのくせにクラスがないな

どと……どこの雑魚に決まっていると思った。だが、今はどうだ？俺の攻撃を全て弾き、こんな強力な一撃を使ってきた。

（馬鹿な！攻めきれないというのか！最速のサーヴァントたるこの俺が！）

「うおおおおおおおっ！」

凜side

その時、私はただ立ち尽くすのみだった。クラスがないという彼は一本の剣でランサーと対等以上に渡り合っていた。そんな彼の予想外の強さに驚かされたのも確かだった。だが……何より私は見惚れていた。目の前で繰り広げられる戦いに。それはかつての英雄たちによる人知を超えた死闘であり、魔術師手でなくてもだれもが目を奪われる光景だった。

「あいつ……どんな英雄なのかしら」

ただ迅の強さに見惚れ、そう私は呟いた。その時だった。

パキッ！

「！」

あれは、衛宮君！？

迅side

そういえば士郎が来るんだったか・・・

「っち！」

「！待てランサー！」

しまったなあ・・・ランサーをもっと早く倒しておくべきだったか・・・

「凜！追うぞ！」

「え、ええ！」

こうして俺たちは建物の中へと飛び込んだ。だが時すでに遅し・・・廊下では士郎が血まみれだった。

「衛宮君・・・」

「知り合いか？」

「・・・まあね」

「・・・奴の気配を追う。お前はそいつを頼むぜ」

「ええ、わかったわ」

俺は再び校庭に出て、虚空瞬動で屋上へ上がったが、気配は消えていた。どうやら奴は逃げ足が随分速いようだ。

「……ん？」

校庭で何かが光る。これって凧のペンダントじゃん。土郎の制服に入るはずなのに……まいつか。俺はペンダントを持つと、校舎の中へ戻ることにした。

家へもどり、俺はペンダントを渡した。

「ほれ、お前のだろ」

「あ、私のペンダント……」

「凧も意外とおっちょこちよいだな」

「どつという意味？」

「そのままの意味……」

ん……とりあえずこんなもんだけど……ん？今日って確か……

「おい凧」

「何よ」

「お前確かあいつ助けたんだよな？」

「そつだけど……？」

・・・やっぱりおつちよこちよいだ

「ランサーはまたあいつのことを狙うんじゃないのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ポクポクポクポクポクポクポク・・・チーン

「い、急いで衛宮君の家に行くわよ！」

「つたく！しょうがねえマスターだな！」

俺と凜は急いで衛宮邸へと走ることにした。

衛宮邸

「はあ、はあ、はあ・・・」

「凜、大丈夫か？」

「ええ・・・まあね」

身体強化の魔法で飛ばしたんだ。そうとう体力持ってかれてるだろ。

「それより、衛宮君は・・・」

突然光が飛び散る。これは・・・

「そんな・・・7人目のサーヴァント!？」

「・・・なるほど、あれがセイバー」

金髪に蒼い鎧の女性、アーサー王ことセイバーがそこにいた。そしてランサーが敷地内から飛び出した。

「ランサー！」

「迅！前！」

「！」

見ると、セイバーが斬りかかってきていた。

「っくあ！」

「迅！」

「まったく、不意打ちとか卑怯だなコンチクショー」

俺が言うと、セイバーはそのまま剣を向けた。

「武器を取りなさい。私も今のは不意打ちとはいえ、武器を持たない相手とは戦えない」

「ああそう、ならやらせてもらっせー！」

俺はディケイドドライバーを手に、カードを取りだした。

「変身！」

KAMEN RIDER DECADE!

9つの影が集約し、ライドプレートが突き刺さる。そしてマゼンタの色がスーツについた。

「・・・!?!」

「何あれ・・・!」

凜も驚いている。そしてセイバーが口を開いた。

「あなた、何者です」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ!」

言いながらライドブッカーをソードモードにして斬りかかる。不可視の剣によってタイミングが合わせずらい。

「つく!騎士には剣士か!」

KAMEN RIDER BLADE

オリハルコンエレメントが展開され、俺を仮面ライダー剣へと変化させた。

「姿が変わった!?!」

「姿が変わろうと、関係はない!」

言いながらセイバーが斬りかかる。

「どっかな?」

ATTACK RIDE MACH!

ラウズカードが俺の体に展開され、超高速でセイバーを切りつける。

「速い!?!」

「はああああっ!」

超高速で斬りつけているにも関わらず、セイバーは間一髪のタイミングでそれを防ぐ。流石はアーサー王か……!

「だが!」

FINAL ATTACK RIDE BUBUBUBL
ADE!

「はあああああっ!」

ライトニングブラストと、セイバーの剣が激突する。そしてその衝撃でセイバーの剣が弾き飛ばされた。この勝負、俺の勝ちだな。

「おしまいっ」と

言いながら俺は変身を解除した。

「何故とどめをささない!?!」

「あ？もう勝負付いたんだしいいじゃん」

というか、ここで死なれても困る。

「騎士の私を愚弄するか！」

「してねえよ……オメーが喧嘩売ったから買った……そんなだけだ。それに……」

「……？」

「あんたの騎士道、立派じゃねえか。死んだら極められないだろ？」
言って、俺は凜に近づいた。

「凜、終わったぞ」

「………」

「え？」

いきなり胸倉を掴まれ、俺が宙に浮く。

「グエツ！？」

「説明しなさい！何！？なんなのあれは！」

ガクガクと俺の体を揺らす。身体強化でそんなことすんな！

「セイバー！」

「士郎！」

士郎が外に出て来た。

「あら、こんばんは衛宮君」

「遠坂！？」

「り……ん……ギ、ギブ……」

「きゃあ！？迅！？」

「こ、この人だれ？」

俺が最後に見たのはアタフタする凜と、驚きを隠せなかった士郎の姿だった。

第二話「邂逅」（後書き）

秋風「ということまでディケイド登場でした」

迅「強すぎじゃね？セイバー」

秋風「そうか？」

迅「普通見切るか？ブレイドのマツハ」

秋風「いや、なかなか強いからいいじゃん。これなら読者も仮面ライダーが絶対強いとは思わないだろ？」

迅「まあそうだけど・・・」

秋風「ちなみに、Wにはなれないぞ、リインフォースがいないからな」

迅「確かにな・・・なれても『ジョーカー』『アクセル』『スカル』か」

秋風「だな」

迅「後はランサー戦か」

秋風「ランサーは漫画とか小説だといいい所がないのでいい所をあげようかな・・・と」

迅「そうなのか？」

秋風「一応サーヴァントは活躍させたいじゃん。Fateだし」

迅「まーな」

秋風「リクエストもお待ちしてますよ！」

迅「次回、第三話『教会』それでは！」

第三話「教会」(前書き)

というわけで3話目です。一日で1000アクセス超えました

こんな駄文を見てくれる方、感謝です

第三話「教会」

目が覚めたのはあれから数分後のこと。

「ん……」

「あ、起きたわね」

「凜……お前、俺になんか言うことない？」

「わ、悪かったわよ……」

「つたく、思いっきり首絞めやがって……」

「んで？そこの奴が7人目……か？」

「そつよ」

「衛宮士郎です」

「セイバーです」

なるほど……この流れだと、後で教会に行くことになる……か

「……俺は神谷迅。クラスはねえ」

「クラスがない？そのようなことが……？」

少し驚きながらもセイバーが言う。

「俺は召喚が特殊だったからな・・・ま、細かいことは気にするな」
この後教会へ向かうことになり、歩いて行く。そこで凜が俺に小声で聞いてきた。

「・・・で？迅」

「なんだよ」

「あの姿、何？」

仮面ライダーのことね

「・・・仮面ライダーディケイド」

「仮面ライダー？あなたライダーなの？」

「クラスがそうじゃない。存在が・・・ということだ」

とりあえず並行世界にいくつか仮面ライダーが存在すること、11人のライダーが存在すること、仮面ライダーとは何かを簡単に説明した。

「並行世界の戦士ねえ・・・でもアンタがなんでなれるのよ」

「俺の能力さ・・・今度説明してやるよ」

そんなことを言っているうちに、あのマーボー大好き男の屋敷へとたどり着いた。

「マスター、私はここで周囲を警戒します」

「迅、あなたもお願いね」

「へいへい・・・」

こうしてセイバーと二人つきりなわけだが・・・先ほど殺し合ったくらいだ。非常に空気が重たい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

うーん、なんか話したほうがいいかな？それとも黙ってた方が・・・？

「あの・・・・・・・・」

セイバーが意外にも声をかけて来た。

「ん？」

「先ほどの戦い・・・貴方は何故私にあのようなことを？」

さっきの騎士道のことか・・・？

「別に、道を極めてる奴と戦うのが苦手だね・・・それだけさ」

「苦手？」

「その道を行ってれば、俺はその道を絶ってしまってもいいかもしれない。」

それがちよつとな」

俺が言うと、セイバーは少しだけ微笑んでいた。

「そういう貴方にも、立派な道があるように見えます」

「・・・どうだろう、道か」

なのはたちと離れて、俺の道はどこに行くんだろつな・・・

ガチャ

すると、凜と顔色が悪い士郎が出て来た。

「マスター！？どうしたのです、顔色が・・・」

「衛宮君!?!」

「大丈夫だ、ちよつと顔色が悪くなっただけだよ」

そう言つて歩き出す。このあとバーサーカーか・・・あいつ倒せるかな

『（マスターなら造作もない気がしますが？）』

「（どうだろうなあ・・・一流の攻撃しか通さないってところがどうにもな・・・）」

一流の攻撃・・・オメガの力・・・ガツシュの力・・・宝具・・・あるにはあるけど、大丈夫かな。

「ここで別れましょう衛宮君。わかっていると思っけど、これで貸し借り無し。次に会う時は敵同士よ」

「無論です。こちらも次は手加減しません」

「ほう、次は本気が見られるわけだ」

「ええ、もちろん」

なんて話をして、帰ることになるわけだが・・・凜が足を止めた。そこにいるのは小さな少女

「もう帰っちゃうの？夜はまだまだこれからだっていうのに」

「・・・」

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと言えば分かるかしら？」

「なんですって？」

「知ってるのか遠坂？」

「アインツベルン。聖杯の入手を宿願とする魔術師の家系。毎回この戦いにマスターを送り込んできている奴らよ」

面倒だな・・・

「え・・・それじゃマスターなのか！？あんな小さな子が？」

・・・士郎、お前構えないのかよ

「そうだよお兄ちゃん。だけどわたし、聖杯よりも楽しみにしていることがあるの。それはね、お兄ちゃんを殺すこと」

一瞬の殺気。それに士郎が押される。情けねえな・・・

「だからお兄ちゃんは念入りに殺してあげる！おいでバーサーカー
！」

そこに現れる巨人。バーサーカーこと、ヘラクレス・・・でかい

「いけバーサーカー！そいつらみんな叩きつぶしちゃえ！」

「
！」

「マスター下がって！」

「凜！下がれ！」

俺はZセイバー、セイバーが剣を持ってバーサーカーの一撃を受ける。お、重い！

「セイバー、お前の攻撃じゃ通らない。お前は士郎たちを」

「・・・分かりました。武運を」

「
ああ」

セイバーが下がり、バーサーカーと対峙する。

「お兄ちゃんもサーヴァント？」

「・・・ああ、俺の名は神谷迅・・・クラスなしのサーヴァントさ。どうか一つ、お手柔らかに」

「あはは！クラスがないなんて変なの！やっちゃえバーサーカー！」

「！」

「ゼロ！」

『オーライ、スタンバイレディ！』

ゼロのBJを纏い、Zセイバーを振るった。

「変なサーヴァント・・・でもお兄ちゃんは勝てないよ、バーサーカーはあの古代ギリシャの英雄ヘラクレスなんだから！」

「ヘラクレス・・・ね」

俺は攻撃を回避し、着地する。

「確かに強い・・・だが、これはどうかな？」

サギタ・マギカ
魔法の射手

セリエス・ルキス
連弾光の27矢！

爆発が起きる。

「ま、魔術ですって！？キャスターでもない癖にあんな高位の・・・」

「魔術？残念ながら今は『魔法』だ」

「！」

バーサーカーが怯んだ！今しかない！

「ゼロ！」

『オーライ、バインド』

バインドがバーサーカーを縛り付ける。これで動けまい！

「どうだ、君の自慢のバーサーカーも戦闘不能だが？」

「馬鹿にしないで！バーサーカー！」

「！」

「何！？」

バーサーカーがバインドを撃ち破った。んな馬鹿な！

『彼もさながら規格外ですね・・・1000あるバインドを力任せに破るとは・・・』

ホントはこのまま雷の暴風で決まりだったのに・・・！

「！」

「速い！」

「やっちゃえ！バーサーカー！」

ガッ！

「しまった！」

体を掴まれ、投げられる。

「がはっ！」

「迅！」

「そのまま止めよ！」

「させません！」

セイバーが俺への一撃を防ぐ。セイ、バー……

「迅、しっかりしなさいよ！」

「わ、悪い……」

俺は立ち上がり、セイバーを見る。やはり苦戦してるな……

「おい凜、士郎を連れて逃げろ。俺とセイバーでなんとかする」

「・・・わかったわ、士郎の家まで逃げてくれる？」

「もちろん、まだ凧の飯を食ってないからな・・・」

「上等、ちゃんと帰ってきたらごちそう作ってやるわよ」

凧が士郎を連れて撤退する。

「セイバー・・・ボソボソ」

「・・・今の貴方の体力で行けますか？」

「・・・この作戦は正直無謀でもある。だが一撃離脱^{ヒットアンドアウェイ}を想定したこの作戦なら逃げ勝ちは可能だ。

「やるしかないだろ」

「・・・わかりました、やりましょう」

「作戦は終わったの？」

「！」

「じゃあ、死んじゃえ！」

バーサーカーが再び襲いかかる。

「セイバー！」

「ええ！」

セイバーが一撃を受け止める。一瞬が稼げれば十分だ。

『バインド！プロテクト200！』

先ほどより100多いバインドで、バーサーカーを縛り付ける。

「マイマジック・スキル・マギステル！ウエニアント・スヒリテウヌエリアカルダムエシキヤス来たれ雷精 風の精雷を纏テイオーダレット・テンベスタアダストリーナいて吹きすさべ南洋の嵐！」

詠唱呪文を発動し、セイバーが下がる。

「くらえッ！」

ヨウチヌスダラダリエース
雷の暴風！！

0距離によって行われた雷の暴風をモロに受けたバーサーカーは吹き飛び、壁にぶつかり倒れる。脳震盪くらい起きてくれるだろう。

「バーサーカー！？」

「んじやな、イリヤちゃん！」

こうして俺とセイバーは離脱し、士郎の家まで逃げ切った。

衛宮家

「はい、おしまいー！」

「いつ！凜、もう少し優しくできないのか！」

「うっさいわね、傷はもうすぐ消えるわよ。ほんと、規格外なんだから」

「でもよかった、セイバーも神谷さんも無事で」

と、士郎が安堵のため息をついた。

「敵の心配までするのか？オメーは優しいな」

「うっ……」

「でもバーサーカーは倒したんでしょ？」

「あれくらいじゃくたばらねえだろ……」

いくら0距離でも、倒れて脳震盪くらいじゃなあ……

「ジンは凄まじい力を持っていましたね。私も驚きました」

「そうか？」

「はい、驚きました」

と、セイバーが言う。

「セイバー、それどんなのだった？」

「そうですね……風と雷を纏った砲撃を撃ち出していました」

「そんなバカな・・・」

と、士郎が信じられないという感じだ。

『映像をお見せしましょうか?』

「だ、誰だ?」

『ここです、ここ』

と、ゼロが点滅する。

「ぶ、ブレスレッドが喋った!?!」

『申し遅れました。神谷迅の専用デバイス、ゼロです』

「デバイス?」

『この世界にはない技術ですので知らないのは無理ありません。そうですね・・・魔法の杖ならぬ、魔法の剣とでも考えてください』

「はあ」

と、気の抜けた返事を返す士郎。

「それでゼロ?さっきの映像って?」

『そうですね、迅の力の一端といいますが、セイバーさんが見た映像を再生できます』

ゼロが映像を出す。それは先ほどのバーサーカーとの戦い。

『ゼロ!』

『バインド!プロテクト200!』

『マイマジック・スキル・マギステル!来たれ雷精ウエニアントスヒリテウヌエリアアルダムエンジマンキス 風の精雷を纏テイオーネレット・テンベスタアウストリーナいて吹きすさべ南洋の嵐!』

『くらえッ!』

ヨウチヌヌラタリネース
雷の暴風!!

映像を見てあんぐりと口を開ける二人。

「この瞬時の魔法詠唱、素晴らしいものですね」

「キャ、キャスター顔負けね・・・」

「な、なんつー威力・・・」

「別に・・・キャスターだったらもつとすごいだろっし、セイバーだつてもつとすごいだろ」

『マスター、とりあえず貴方も規格外なんですから・・・』

「そうか?」

まあ別にいいけど・・・さて

「凜、そろそろ帰るか？」

「・・・そうね、明日は学校だし」

「そっか、じゃあな遠坂」

「ええ、ホントこれが最後よ。次会った時は敵同士、いいわね？」

「こうして俺と凜は家に帰ることにした。」

第三話「教会」（後書き）

秋風「ということでバーサーカー編でした」

迅「まさかバインド力任せに引きちぎるとは・・・」

秋風「そうか？バーサーカーならやりそうだけど」

迅「そういうもんか？」

秋風「そして雷の暴風を0距離でも脳震盪程度という」

迅「怖いわ」

秋風「大丈夫×2お前結構この話で血まみれだから」

迅「さらっとひどいこと言っでない!?!」

秋風「気のせい気のせい」

迅「で？今回言うことあるんじゃないの？」

秋風「うん、感想ください」

迅「書いたのはいいけど全然来ないという」

秋風「指摘でもリクエストでもガンガン待ってます!」

迅「次回、第三話『学校』それでは!」

第四話「学校」(前書き)

とりあえず更新、もう寝ますw

第四話「学校」

次の日、心地の良い朝を迎えた。ベッドから降りて、俺は食堂へ降りた。

「あら、もう起きたの？」

「ああ、おはよう凜」

「朝食できるから、座ってて」

「ああ」

こうして朝食が完成し、それを食べる。

「……うまい」

「当然よ」

ふふんと威張る凜。正直、母さんの料理より旨いかも

「で？今日はどうするんだ？」

「ああ、なんでも授業が短いらしいわ」

「授業が短い？」

「例のガス漏れ事件よ」

「・・・本当にガス漏れだと思っただろうか？あれ」

ぶっちゃけ間桐の奴が魂喰らいしてるんだっただな・・・

「・・・聖杯戦争が絡んでる」

「だろうな『魂喰らい』か」

「でしょうね・・・生命力をギリギリまで吸う・・・外道のやることだわ」

・・・対策は考えないとな

「そういえば迅？あなた、私の護衛はどうするの？」

「・・・わーってるよ、学校の屋上でのんびりしてるぞ」

「大丈夫なの？それ・・・」

「そうだな、百聞は一見に如かず・・・全てを退く魔の衣よ・・・『バニツシュ』」

バニツシュによって、俺の体は消える。

「え！？」

「これなら霊化することなく、お前の近くにいられるぞ」

「なるほど・・・流石ね」

俺はバニッシュを解いて、飯を食べる。

「そう言えば気が付いたか？凜」

「え？」

「魂喰らいが発生しているのが、全部一定で人が集まる場所だったこと」

「ええ、確かにそうね・・・でも、そんな場所たくさんあるわ」

「・・・そうか、この時点じゃ凜は間桐やキャスターが犯人と知らないわけか。」

「そうだな」

「とりあえず現状でやるのはライダーとキャスターの問題か・・・ま、いいや」

「それじゃ、学校行くわよ」

「おう。全てを退く魔の衣よ・・・『バニッシュ』」

「ちなみに迅はパスを使えるの？」

「そうだな・・・使えるぞ」

「じゃあ何かあったら連絡するわ」

こうして、俺は凜と共に学校へ行くことにした。

基本的に俺は学校では暇だ。なので屋上で昼寝したりしている。今日は確か凜が芝居を打つ日か……

「(凜?)」

「(何よ)」

「(土郎は確かに抜けてるところがあるが、お前がやるつもりとしては恨まれ役だぞ)」

「(いいのよ、それで)」

「(あ、そ……)」

まあ、君たちが結ばれるのは俺も祈ってますので〜

「(もし何かあったら知らせてくれ)」

「(わかったわ)」

こうしてパスを切って屋上でねっ転がる。あー……暇だ

「……戦いの時に備えて、Wドライバーをどうしようか……」

Wにはリインフォースがいなければなれない。他でもエレナがいれば問題はないんだけど……

『確かに、ロストドライバーとアクセルドライバーがあっても、そ

れだけじゃこの先厳しいものがありますよね』

・・・アークルにトリプルフラッシュ、Vバツクルにファイズドライバー、ブレイドバツクル、変身音叉、カブトのライダーベルト、電王ベルト、キバツトバツト？世、デイケイドライダーそしてWドライバー・・・仮面ライダーとしての力はぬかりない。だが戦況に応じて戦い方法を変えて敵のリズムを狂わせるのは主軸としてデイケイドだけだ・・・Wがないと駄目だが・・・

「ないものねだりしてもしょうがないか・・・」

ググウ

そう言えばもう昼か・・・

「凜が弁当くれたっけ」

弁当を開けると、なかなか豪勢だ。

「うむ、旨い」

俺もある程度料理はできるけど、これは勝てない・・・

ガチャ

「!？」

誰か来た・・・って、あの子は

「あ・・・」

「む？」

「あ、すみません……」

「別に構わない、ここに来てもいいぞ？」

紫色の髪の少女……間桐桜だった。あっちやう、バニッシュユ解いたのは間違いだった。

「この生徒さんだね、驚かせたようだ」

「あ、いえ……あなたは？」

「地理学者だ……このあたりの地理を研究してる……」

「学者さん？私と同じくらいですけど……」

そうだった、BIGBOSSみたいに嘘つきのミスった。

「見習いさ。実はこの街の構造を見に来ていてね」

「そうなんですか……」

「おっと、申し遅れた。神谷迅だ」

「間桐桜です」

「桜さんか、いい名前だね」

「いえ……」

桜が顔を紅くする。これが黒くなるってルートを考えた人は恐ろしいな……

「君も昼食を？」

「はい……その、人となじめなくて」

「そうか……まあ、そう焦ることはないよ。人生は長いから信頼できる人を何人が作ればもうけものさ」

俺が言うと、桜はクスクスと笑っていた。

「神谷さんって、私とそう年齢が変わらないのに随分老けこんだことを言うんですね」

はい、実際君より倍くらい生きてます。

「何、私の経験談だ。気にしなくていい」

「ふふ、おもしろい人ですね」

「それは褒め言葉としてもらっておこう。そういえば君は何かスポーツをしているのか？」

「え？」

「手の甲……少し擦ってる」

「私、弓道部なんです」

そういえば最初いじめられてたんだっけ・・・

「なるほどね・・・確かここに・・・」

俺は包帯を取り出し、巻いてあげる。

「あ、そんな・・・」

「気にしないでくれ、俺の自己満足だ」

これでよじつと

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

キーン、コーン、カーン、コーン

「あ、予令・・・戻らないと」

「午後の授業か・・・頑張ってね」

「はい、それじゃあ」

こうして桜は立ち上がる。

「またね、桜さん」

「はい、迅さん」

さてと・・・後は放課後を待つか・・・

放課後

「（迅、行くわよ）」

「（へいへい・・・）」

凜が士郎と追いかけてっことをしている。楽しそうだな

『マスター、混ぜっちゃだめですよ』

「わーってるよ」

で、士郎が両手を抑えつけた。なるほど・・・もうすぐだな

「「!?!?」」

「迅!」

「ああ、強力な結界だな」

「どう? 気配は・・・」

「屋上だな」

多分・・・

「行くわよ迅！」

「待ってくれ遠坂！俺も戦う！」

「馬鹿！今のアンタに何ができるのよ！」

「行くわよ迅！」

「ああ」

こうして屋上に向かう俺達。だが、屋上には何も無い。

「……魔法陣！？」

「なるほど、罠か！」

となると、確か林だったか？

「凜、掴まれ！」

俺は凜を抱きかかえ、屋上を飛ぶ。

「きゃああああ！何すんのよあんた！」

「……さっきの屋上のは罠だ。そこから計算して、一番遠ざける位置……それは学校裏の林だ！」

間に合え！

士郎 side

セイバーが援護に来てくれた。助かった……だけど、そのセイバーも苦戦している。けど、追い込んだ！

「おお、勝負付きそうじゃん」

「馬鹿言ってるじゃないの」

「よう士郎、大丈夫か」

俺は士郎の傷を見る。浅いから大丈夫か

「隙あり！」

ライダーが俺に向けて鎖の付いた飛び道具を投げる。

「ゼロ」

『プロテクション』

魔法陣が展開し、それが弾け飛ぶ。

「何!？」

「サーヴァントか」

「我が名はライダー……あらゆる騎馬を乗りこなす戦場を駆け抜ける一陣の疾風」

「ほーう、奇遇だな。俺は神谷迅・・・クラスなしのサーヴァントだ」

「クラスなし？何を馬鹿な」

「やっぱり？」

「ま、それはともかく・・・ライダーにはライダーで相手してやる。凜、下がってる」

俺は電王ベルトを取り出し、腹部に巻きつける。

「変身！」

『SWORD FORM』

電子音が鳴り響き、赤いデン仮面が装備された。

「俺、参上！」

『か、体が勝手に・・・まさか』

「なんだなんだ、変なかつこの姉ちゃんが相手かあ？」

「じ、迅？」

「ああ、こいつか？ちょっと借りるぜ」

「はあ！？」

説明するのまた面倒だな・・・

『モモタロス！またお前か！』

「しょうがねーだろ、呼び出されちまつたら」

もしかしてディケイドとの接触で俺のベルトとモモタロスが繋がったのか？

『ま、よろしく頼むよ。相手が人っぽいからって手加減するなよ？
そいつ人じゃないから』

「任せろ、俺が倒してやらあ」

「何をごちゃごちゃと！」

「おおっと！」

モモタロスはそれをよけて、デンガツシャーを組み立てる。

「行くぜ行くぜ行くぜええ！」

ライダーに向かって剣を振るう。あまりに無茶苦茶な剣筋なので読めないのだ。

「ぐっ！このような剣筋で・・・！」

「おらあー！」

今度は蹴り飛ばされ、距離を取る。

「決めるぜ」

『FULL CHARGE』

パスを当てて投げ捨てる。そして剣を構える。

「必殺、俺の必殺技パート2」

剣先が伸びて、それを下に振り下ろす。

「でりゃー！うおりゃあー！」

さらに左右からの攻撃をするが、それをライダーが避ける。

「ぐっっ！」

「っち！外しちゃった！」

「……ここは引くとしましょう。おらば」

こうして、ライダーは去っていった。

『ありがとな、モモタロス』

「おう、もう呼ぶんじゃないぞ」

『どうだろーね』

言いながら俺は電王ベルトを外した。

「……ふう」

「迅、大丈夫？」

「え？」

無傷だけど……

「なんか一人でしゃべってて！」

あ、そつちですか……

「大丈夫だよ、それは後で説明する。それより……今後の方針を決めないとな」

こうして、俺たちの学校での戦いは終わった。

第四話「学校」（後書き）

秋風「はい、ということで4話目終了」

迅「3巻の後半まで来たか・・・速かったな」

秋風「だろ？」

迅「相変わらず他の小説は書いてないけど」

秋風「うっ！」

迅「なんとかするんだろ」

秋風「おう、主に明日な」

迅「大丈夫かよ・・・」

秋風「大丈夫だよ、多分・・・」

迅「不安でしょうがない」

秋風「そういうこと言うな！この企画すごいだろ！」

迅「・・・お前、明日死ぬんじゃないの？」

秋風「僕は死にましえ〜ん！」

迅「死ぬ、今すぐここで」

秋風「ぎゃあああ！」

迅「次回、第五話『共同戦線』ではまた」

第五話「共同戦線」(前書き)

感想欲しいです

力になります

第五話「共同戦線」

「どうした凜」

帰りに坂で立ち止まる凜に声をかける。すると、凜は街を見つめていた。

「私はね、迅。魔術師の名門、遠坂家の当主として10年を過ごしてきた。この冬木の街はその私が魔術協会から管理を任されている土地よ。この場所でもこの馬の骨とも知れない連中に好き勝手やらせるわけにはいかないのよ」

言いながら俺の方を見る。それは決意に満ちた目だった。

「あの結界を断固阻止する。これは遠坂家当主としての決定でもあるのよ」

「……なるほどな、凜が俺を呼んだのがわかった気がする」

「え……?」

俺も、凜と似てるな……

「俺もな、ある街で街のために……街に住む人たちの笑顔のために戦ってた。あいつらの笑顔が忘れられなくて……その顔を悲しくさせたくなくて、無我夢中で……」

「迅……」

「お前はマスターで俺はサーヴァントだ。お前の願いのため、戦うて行くよ」

「ありがとう、迅」

言いながら凜が歩き始める。

「さて、今日からさっそく動くわよ。そうだ、言峰にも連絡しておきましょう。仮にも魔術協会から派遣された監督役だもの、役目はしっかり果たしてもらわなくちゃ」

こうして、俺たちは家に戻ることにした。

家に戻ると、凜が何やらバッグに服などを入れ始める。

「どうした凜」

「共同戦線だからね、衛宮君の家に住むわ」

「あ、そういうこと・・・」

「あんたも早く荷物まとめなさい」

「りょーかい」

俺は荷物をまとめ、バッグに詰め込んだ。

「じゃ、行きましょうか」

こうして、俺と凜は衛宮家に向かった。

衛宮家

「あら衛宮君、そんな風に見てくれたとは光栄だわ」

「・・・嬉しいくせに」

「何か言った？」

「別に・・・」

まあそんな会話とは別に、士郎が俺たちに驚く。

「と、遠坂！？神谷さん！？」

「よう士郎、内緒話なら戸締りしてからにした方がいいぞ」

「お、おまえらどうして・・・？」

確かに、いきなり上がり込んだら驚くわな

「ごめんなさいね、呼んでも返事がないから勝手に上がらせてもらったわ」

「いやそうじゃなくて、なんで俺の家に！？」

「あら、おつき言ったでしょ？詳しくは後で話すって」

「いや、二人ともその荷物はいつたい？」

なんだ、まだ分からないのか？

「だからさっき言ったじゃない。これから色々面倒見てあげるって」

「今日から世話になるぜ、士郎」

こうして、勝手に居候になる俺と凜だった

凜が音速で荷物を置いた。早い・・・

「で、俺はどうすればいい？」

「あ、ああ・・・離れがもう一つ」

「悪いな、士郎」

「いえ・・・」

んなわけで荷物置いてと・・・

「飯食いたい・・・」

「ああ、もうできてますよ」

・・・

「なあ、士郎？」

「ほづ、なかなかうまい」

「そうか？」

「おう」「よし、これなら勝った」「おい凜」

「そりゃどついう意味だ」

「まあいいや・・・」

「んで、ライダーの場所を突き止めないといけないわけだけど・・・その後だな」

「強さはどんなもんだ？」

「基本的に高くはない。ライダーってほどだ。何かに乗ってないと能力は発揮されないだろう」

「ということは、問題は宝具ですね」

「宝具？」

士郎が首を傾げる。セイバーが説明して、士郎が納得した。

「宝具についてですが、ライダーの鮮血神殿・・・あれが宝具でしょうか？」

「でも鮮血神殿なんて宝具聞いたことないわ」

「ゼロ、あれは使えるかな」

『多分できますね、系統は同じですから』

ん、なら久しぶりにやろうかなあ・・・

「何よ迅、さっきからぼそぼそと」

「何、俺の能力でひとつ、その鮮血神殿について調べようかと」

「できるの?」

「見せてやろうか、士郎達にも」

俺は立ち上がる。

「ゼロ、3人の視覚化よろしく」

『イエス、マスター』

俺の魔力を3人に纏わせる。これで事実上できるはずだ。

「さあ、検索を始めよう」

地球の本棚と同じように、何十何百の本棚が白い空間に出現した。

「これは!」

「この空間は、いったい!」

「これが俺の固有の能力・・・いや、稀少技能『神の本棚』」

「神の、本棚・・・？」

3人が驚きながら立ち上がり、周囲を見る。

「あらゆる並行世界の歴史、技術、人の未来まで全てを、キーワードをうちこんで検索する。仮面ライダーの技術もここから検索した」

「すごい、これがサーバントの力なのか」

「まあね、さて、検索を開始しよう・・・検索するキーワードは『鮮血神殿』」

俺の言葉と共に本が動き出す。本は6割ほど絞られる。

「まだキーワードが足りないな・・・ならキーワード追加だ『聖杯戦争』『ライダー』『神話』『宝具』」

俺が言葉を言うごとに、本の数が減っていく。これはちゃんと検索されている証拠だ。そして、宝具の所で数冊までに絞られた。

「・・・最後のキーワードか」

「・・・ねえ迅もしかして『魂喰らい』じゃないかしら？」

「なるほど、ラストキーワード『魂喰らい』」

そして最後の一冊が絞られた。

「絞れた」

世界が変わり、元に戻る。

「まあ座れよ3人とも」

言いながら俺は本を開く。なるほど・・・

「鮮血神殿・・・確かにライダーの力、宝具として分類されている。能力的には『内部の人間を融解し魔力として使用者に還元する紅い結界を張る・・・』『対軍』の宝具』だ。さらに検索を絞ろうか？」

「というと？」

「このままなら、ライダーの正体も知れるぞ？」

「そう、お願いするわ・・・」

俺は再び神の本棚を展開した。

「キーワードは『ライダー』『鮮血神殿』『目隠し』『英雄』『サ
ーヴァント』」

鮮血神殿が効いたのか、すぐに答えが出た。って言っても俺は知っ
てるんだけどね。

「『ゴルゴン』という本が出た。彼女はゴルゴン三姉妹の末妹『メ
ドゥーサ』だ」

「メドゥーサって、あの相手を石にする？」

「そう、石化の魔眼『キュベレイ』を持つ、あのメドゥーサだ。マスターを突き止めようとしたが、どうやら鍵がかかっている」

「鍵？」

本は万能じゃない。単語がないと駄目なものもある。

「本にはキーワードを入れないと開かないことがある。それはより強力な想いが阻止している。明確かつ、確信を得るキーワードがないと明かないのさ」

ホントは桜だけどね。

「だけどこれで対策が打てますね」

「ああ、そう・・・だな」

やべ、力が抜ける。

「ちよつと、迅!？」

「わ、悪い、これ結構体力いるんだわ。座ってれば治るさ」

はあ・・・久しぶりに力を使うと疲れるもんだ。

「んで、後は誰だっけ・・・ランサーか・・・」

「ゲイボルグを持っていたところを見て『クーフリーン』で間違いないでしょう」

「アイルランドの光の御子か・・・」

この後ライダーに対する会議をして、俺と凜は外回りをすることになった。だが、セイバーが待ったをかけた。

「凜、相談したいことが」

「何？」

「迅は私と同じように霊化できないようですが、どうやって護衛を？」

そのことが・・・

「ああそれ？こいつ、魔法で透明になれるから、霊化の代わりね」

「なるほど・・・」

まあ確かに、実際のところ共に行動できないというのは辛い所だ。何か良い手は・・・

「なあ凜・・・」

「なによ？」

「俺とセイバーが堂々と学校に行ける事実を作れるんだが・・・」

「なによ」

「それはな………」

俺は作戦を話、凜と外へ行くことにした

外に行くと、ファミレスで人が倒れていた。どうやら魂喰らいをさせられたらしいのだが……

「ん？」

「どうしたの迅？」

「結界の式が違うな……これは……」

「じゃあ、別のサーヴァント？」

「そう考えていい、ともかく人が来る。脱出しよう」

「そうね」

脱出する前にと……

サギタ・マキカ
魔法の射手 ウナ・フラグリエンス
雷の一矢

「ギチ！」

「使い魔!？」

「のようだな……脱出するぞ」

こうして、ファミレスを後にした。

次の日、俺はスーツを着て、セイバーは制服を着て学校を歩く。

「ねえ迅、本当に大丈夫なんでしょうね・・・」

「ああ、細工は完璧、だからこそ土郎先に行かせたんだよ、びつくりするぞあいつ」

俺が笑うと、凜もにやりと笑う。

「それもそうね・・・あれは」

見ると、桜が慎二に殴られそうになる。どつやらっ巻のあの場面らしい。

「凜」

「お好きにどうぞ」

「了解マスター」

分かってくれたのか、俺は瞬間的に慎二の顔面を蹴り飛ばした。

「ぐがっ!?!」

「え!?!」

「おっと、顔にハエが！・・・やあ桜さん、おはよう」

「え、あ・・・じ、迅さん!？」

そして一同が思う。

『顔にハエは止まっても蹴りで潰さないだろ』

士郎が口をあぐり開けている。俺の姿以上に、セイバーの制服姿に驚いているのだろう。

「な、なんだお前!」

「ん？通りすがりの正義の味方？」

「ふざけるな!」

「ふざけてるのはどっちだ、女の子に手を上げるなんて人間の屑がやることだろ」

俺が言うと、慎二がキレる。

「うるさい！桜は僕の妹だ！躰をして何が悪い!」

「ほうほう、妹ねえ・・・なら余計駄目だろう屑」

「なっ!？」

「下の兄弟がいるならそいつは上が守る・・・それが普通だ。常識がなっていないなあ、屑」

「屑だど……」

「ああ、屑だな……それにこれ以上問題を起こすなら、君を『停学』や『退学』の処分をくだしてもいいんだぞ」

俺が言うと、士郎や桜が目丸くする。

「なんなんだよ！お前！」

「この度この学校に『教師』として赴任してきた神谷迅だ。桜さんはお前の妹であると同時にこの学校の生徒だ。この学校の校則上『学校内での暴力行為は禁ず』だ。君は完全なる校則違反だ。それでも君はこの公衆面前でこれ以上恥をかくかい？」

見ると、周囲で哀れみと侮蔑の目で慎二を見る多数の生徒がいた。

「つくー！」

こうして慎二は走り去った。

「大丈夫だったか？」

「は、はい……」

「ちょ、ちょっと迅！どうしてお前がここに！それにセイバーまで
「！」

「気にするな士郎、これが作戦だよ」

俺はここに教師として、セイバーは留学生としてここに通う。それが一番の得策だった。

「でも、お前って俺と同じ年だろ？」

「気にすんな、見た目状士郎でも見間違えただろ」

「そりゃそつだけど・・・」

さてと、校長室へ行くか・・・

この後校長室で手続きを取り、俺は『数学』と『科学』の教師となった。ミッドチルダとベルカの技術を知りつくし、さらには『答えを出す者』で完璧と化した俺に、解けない問題などもなかった。昼休み、俺は屋上へ行くために廊下を歩いていると、桜が近づいてきた。

「神谷先生」

「ん？桜・・・君か」

「まさか、先生とは驚きました」

「そうかい？まあ、君と歳が近いからね、驚くのも当然だ」

俺は15歳でアメリカの大学を出たという偽装の履歴を持っている。アメリカなら実力でなんでもできる。なのでこういうこともお手の物だ。

「それと、ありがとうございます」

「なに、俺も気が立っていたからね・・・そうだ、頬が腫れていたようだが・・・」

「大丈夫です、もう引きました」

「そっか・・・変わった入れ墨だね」

「あつ・・・」

ライダーとの契約した令呪か・・・

「ま、君が何をしているのかは知らないし、聞かない。だが見たところ、君にはもう信頼できる人がいるようだ・・・なら、その人たちを頼るのもいいと思うけどな」

「はい・・・ありがとうございます」

「気にするな・・・っと、人を待たせていたんだ。またな桜」

「はい、神谷先生」

「迅でいいよ」

俺は苦笑しながら、その場を後にした。

第五話「共同戦線」(後書き)

秋風「ということで、慎二君ボコしタイムでした」

迅「クロノの時より短いな」

秋風「大丈夫、もっと出番なるから」

迅「そうなのかよ」

秋風「ちなみに今回はめっちゃ書くから」

迅「知ったことが、溺死しろ」

秋風「ひどい!」

迅「次回、第六話『勇気』ではまた」

第六話「闇」（前書き）

だいぶ進みました。今は単行本で4巻目くらいですか・・・

サーヴァントの戦いも激化します。お楽しみに！

第六話「闇」

屋上に赴くと、既に3人ともいた。

「よっ」

「遅い！」

「わ、わりい」

3人ともすでに対策会議を始めていたようだ。

「んで？対策は？」

「とりあえず衛宮君の探知能力を活かすことにしたわ」

「なるほど……で、セイバー？学校どうだった？」

セイバーはさすがにここでアルトリアと名乗るわけにもいかない。なのでそこからとって『アルフォンヌ・E・ブランフォード』という名前を俺が作った。ちなみにEは衛宮のEだったりする。

「ええ、とても面白いです。士郎と同じクラスですし、護衛もしやすい」

「そりゃよかった」

「そう言えば迅も桜と知り合いだったんだな」

「ああ、この前ちょっとな」

さてと・・・これから忙しくなる。

「んじゃ、俺はこれから授業だ。遅れんなよ」

「俺は魔法陣探しに精を出すよ」

「セイバー、放課後お前が書かなきゃいけない手続きがいくつあるんだ、付き合ってくれ」

「わかりました」

こうして昼休みを終えた。

放課後、凜とセイバーと共に買い物を終えて家に戻った。そこにはすでに、大河と桜がいた。

「あら、遠坂さんにアルフォンヌちゃん、それに神谷先生じゃない」

「大河先生、こんばんは」

「くんばんは」

「どうも」

「士郎はまだ帰ってきてないけど・・・どうかした？」

凜はその持前の話術で大河と桜に言い訳を作った。

「そうなの、家が改修で・・・それにアルフォンヌちゃんも切嗣の知り合いで、神谷先生は家が手違いで取れなくて士郎が全部請け負ったと・・・」

「ええ、彼がここまでよくしてくれるとは思いませんでしたが・・・」

「ええ、彼がここまでよくしてくれるとは思いませんでしたが・・・」

「じゃあ、迅さんもここに住むんですね」

「まあね・・・さて、食材を買ってきたからあいつが帰ってくるまでに夕飯を作ろうか」

「あ、あたしが作るわ。士郎に勝っている所見せなきゃね」

「あ、そ・・・」

「こいつ、そんなに料理の腕に自信があるんだな。まあ、確かに凜の方が料理旨いけど」

「あ、じゃあ遠坂先輩、私も手伝います」

「あら、助かるわ」

「こうして料理を作る二人・・・普通にしてれば、仲のいい姉妹のはずなんだがなあ・・・」

「どうするか・・・」

桜の体の中にある虫・・・そして聖杯の欠片・・・その全てを排除しなければいけないし、何よりもあの男の野望を叩きつぶさなきゃいけない・・・魔を、毒を、闇を・・・その全てを排除する武器・・・それがあれば桜の中の虫を排除できるはず。

「はぁ・・・」

「どうしました、ジン」

「いや・・・別に」

まあ、当面の問題はライダーとキャスターを倒すことにある・・・かな

「そういえば神谷先生、歳いくつ？」

「17ですけど」

「うっ・・・その歳で教師なんて・・・」

「アメリカは実力の国・・・ですよ、藤村先生」

なんて会話をする俺と大河。

「その若さで大学卒だなんて、ほんと秀才ね」

「でも迅さん、地理学をしているんじゃない？」

「あ、あはは・・・一応そっちもやってるだけで、こっちが本職か

な

くそ、変な嘘つかなきゃよかった・・・

「あんた桜に何吹き込んだのよ」

「吹き込んだとか言うな、桜とは昼食と一緒に食べたただけだ」

「あ、そ・・・（あんたもしかして）」

「（うん、バニッシュといたら丁度・・・）」

「（馬鹿？）」

「（返す言葉もございません）」

こんな感じで時間が過ぎ、料理ができたころ。

「ただいまー」

「帰ってきた」

「もう、衛宮君は！」

あらら、凜のやつ怒ってら。まあ食事も冷めたらあれだしな。このあと凜が士郎に色々口裏を合わせていた。そんな中、桜が少しだけ表情が暗かった。

「ふう、旨かった」

「当然でしょ」

「シロウの料理もおいしいですが・・・」

ま、あれだ・・・今度勝負でもすればいいさ。

「そうね、今度勝負よ！衛宮君！」

「やってやるっじゃないか」

と、火花を散らす二人だった。このあと大河と桜が帰るので、桜を送ることにした。大河は問題ないとさっさと帰ってしまった。

「すみません迅さん、送っていただいて」

「何、気にすんな。この後外で用事もあったから」

「そうなんですか・・・」

後で見回りだし・・・凜とは街で合流しよう。

「そういえば桜、どうかしたのか？」

「はい？」

「なんだか、元気がなかったぞ」

「あ、いえ・・・」

「別に無理に言う必要もないけど、桜はどこか抱え込んでしまう傾

向があるな」

最後の最後まで桜は士郎に心配などをかけさせなかったからな・・・

「・・・実は、遠坂先輩が羨ましくて」

「え？」

ああ、なるほど・・・

「先輩はやっぱり遠坂先輩が好きみたいで・・・」

「なるほど、妬いてるわけだ」

俺が言うと、桜がうつむく。

「私、先輩に憧れて弓道部に入って・・・でも、振り向いてもらえなくて・・・やっぱり私じゃ、駄目なのかな・・・」

「・・・駄目だろうな」

「え・・・」

びっくりした顔で俺を見る。まあ、当然だけど

「今のままじゃ、凜には勝てない」

「迅さん・・・」

「最初から負ける気でやってたら駄目だ。強気に、本気で・・・相

手に挑まなくちゃ」

「本気……」

ま、この子は大人しい性格だしな……無理に、とは言わんが……

「頑張れよ桜、俺は応援してるぞ?」

「あ、ありがとうございます……」

「それと、あんまり無理はするなよ」

「あ……はい、じゃあ私はここで」

「じゃあ、またな桜」

「はい」

こうして俺は桜と別れ、凜達と合流するため、街へ向かった。

「凜……」

「迅、待ってたわ」

橋で合流し、俺はライダーのマスターが慎二であることを聞いた。

「ふうん、なるほど」

「でもおかしいのよ、間桐の血はとっくに……」

「ああ、魔力を感じなかった・・・ただ」

「ただ？」

「奴の体から、何か『淀み』のようなものを感じ取ったのは確かだ。

「淀み・・・」

偽臣の書だったっけ？あれ・・・

「何にしろ、あの男がまともとは思えん」

「そうね・・・」

「（天道総司の）おばあちゃんが言っていた、男には決してやってはいけないことが二つある。それは女を泣かせることと、飯を粗末にすることだ」

「随分立派なことを言うお婆さんね」

「だろ？」

なんて会話をしていると、魔力を感じ取った。

「シロウ！敵です！」

「凜、感じたか？」

「ええ、昨日と同じ感じね」

さてどうするか・・・

「街の中心か・・・」

「待つてくれ遠坂、そっぢゃないだろ？俺は向こうの方から何か感じるんだ」

二手に分かれるしかないな・・・

「わかった、二手に分かれよう」

「いい？衛宮君、何かあつたらすぐに逃げるのよ」

「一応俺も行こう」

「は？あたし置いてくわけ!？」

凜が起こる。そうじゃないって・・・

「影分身の術」

煙が立ち、俺が二人になる。

「セイバーたちには分身に任せる。行くぞ凜」

「あんだ、本当に規格外ね・・・」

こうして、俺たちは街の中心へと向かった。

「・・・そういえば」

「何よ」

「桜のこと、言わなくて良かったのか？」

「・・・」

実を言えば、俺はもうすっかりと令呪を確認している。

「本当のマスターはあの子だ・・・お前はそれを士郎とセイバーに隠している」

「わかってる・・・でも、あの子を傷つけない」

「まったく、君はとことんお人よしだ」

「・・・うるさいわね」

「だが、時が来ればわかることだ・・・話すかどうかは、君に任せ
る」

こうして、俺たちは竜牙兵と戦うことになる。

迅(分身) side

本体に凜を任せ、俺は士郎、そしてセイバーたちと共に空き地へと訪れた。そこはかつて士郎が災害を受けた街なのだという。

「それにしても、影分身って・・・忍者みたいだな」

「忍者も何も、これは忍術だ」

「忍術・・・」

「魔力に変わる、生命エネルギーと精神エネルギーを練り込み『チヤクラ』と呼ばれる力を作り印を結ぶ。それによって術が発動する。一種の魔術みたいなもんだ」

「へえ・・・」

そんな話をしていると、いつの間にか竜牙兵に囲まれていた。

「これは・・・!」

「囲まれています」

「仕方がない、全力とはいかんが、倒すしかない」

さて、俺（分身）でどこまでやれるかな・・・

「行くぞセイバー!」

「ええ、ジン!」

「「おおおおおおっ!」「」

たがいに剣を持って、敵に斬りかかる。俺はちょっとぐらいの傷で

消える。仕方がない……！

「トレース・オン
投影開始」

クラウドのバスターソードを投影し、斬る勢いで敵を吹き飛ばしていく。しかしながら、後から後から湧いて出てくるため、きりがない。

「きりがねえ………！」

魔力の砲撃が見える。

「セイバー！危ない！」

俺はセイバーを突き飛ばし、そのまま消えた。

迅 side

「……む」

「どうしたの、迅」

「分身がやられた……強大な魔力によって打ち倒されたらしい」

「大丈夫なの？」

「………セイバーはともかく、戦闘経験が少ない士郎は危険だな。」

「さつさと片付けて救援に行く……」

俺は死ぬ気丸を飲み、グローブをはめた。ハイパー死ぬ気モードとなり、構えを取った。

「行くぜっ!」

俺は瞬時に、その数十いた牙竜兵を打ち倒す。

「そこだっ!」

俺はすぐに炎の壁を作り、攻撃を防ぐ。

「出てこい……牙竜兵を作りし主……」

「あらあら……ばれてたの?」

そこに現れるのはフードをかぶった女性。そう、魔術に特化したサーヴァント『キャスター』

「我がクラスはキャスター……あなたは、さつきセイバー達のところにもいたわね。どういうからくりかしら?」

「自らの力を明かすほど馬鹿じゃない……」

「そう、セイバーも楽しめるけど、あなたもなかなかね……クラスを聞いておこうかしら」

「俺にクラスはない……だがあえて名乗ろう、俺の名は神谷迅……遠坂凜のサーヴァントだ」

「クラスがない・・・？今回の聖杯戦争には変な輩がいるものね・・・まあいいわ」

キャスターの手に魔力が宿る。

「凜、下がれ！」

「！」

「くらうがいいわ！」

砲撃が飛んでくる・・・ふん

死ぬ気の零地点突破初代エディションファースト

俺が使った死ぬ気の零地点突破によってその砲撃が凍りついた。

「なっ！？」

「こっちだ」

俺はキャスターの背後に回り込み、拳を繰り出した。しかし、当たったのは宝石だった。

「やはり実体ではなかったか・・・ん？」

この微妙な魔力の流れは・・・なるほど、ここも原作通りか

「凜、お前は士郎達を追え。俺に少し思い当たるふしがある」

「あ、ちょっと迅!」

こうして俺は、魔力が流れる霊気の流れを追った。

流れを追っていると途中から竜牙兵が何体かが襲いかかる。

「……こちらだと教えているようなものだな」

どうやら俺が『クラスがない』サーヴァントということまで、この程度で倒せると踏んでいたらしい。

「(迅、どう?)」

「(ああ、深山の街の外れだ……)」

「(確かその先には寺があるわ……なるほど、そこにキャスターがいるのね)」

「(どうする? 乗り込むか?)」

ここで倒すなら、アサシンがいるはずだ……

「(現段階では情報がなさすぎる。いったん引いて頂戴)」

「(……了解した)」

こうして俺は凜達の所へ戻ることになるのだが……

「ん？」

どこかで感じた嫌な風が、俺の体に当たった。

「………気のせい、か？」

Side out

「ククク……ヤハリコノセカイニイタノカ……カミヤジン……」

そこは柳洞寺。守護者であるサーヴァント、アサシンも気がつかぬ土の中だ。

「アノトキノカリハ、カナラズカエス……コノチカラヲツカッテ……ソシテ、セイハイニアルアイツヲ……クク、ククククク……」

迅が、そして凜達が巻き込まれるシナリオにない物語が描かれようとしていた。

第六話「闇」（後書き）

秋風「ということでキャスター登場です」

迅「最後のは何？」

秋風「それ言ったら面白くないでしょ」

迅「読者の9割は大体わかってるかもよ？」

秋風「さあ、なんのことやら」

迅「・・・ネタ切れか」

秋風「そういうこと言うな」

迅「事実じゃん」

秋風「別にすぐじゃないよ。出てくるのは超終盤」

迅「終盤ねえ・・・」

秋風「んじゃ、俺はもう寝る」

迅「次回、第七話『剣』ではまた」

第七話「選択肢」(前書き)

最近タイトルと予告が変わってしまいました。すいません

第七話「選択肢」

士郎の家に戻ってきてから、セイバーの様子がおかしかった。先ほどの口論で反対されたのが原因だろう。セイバーが庭で騎士甲冑を纏っていた。

「……どこへ行く気だ、セイバー」

「ジン……!?!」

「まったくお前は……マスター指示を無視する気か?」

「……確かに、命に背くなど、サーヴァントとしてあるまじき行為……しかし、いずれ貴方も敵となり、そして殺し合う。シロウの今の考えでは生き残れない」

「……なるほど、シロウのためかだが……」

「それは、シロウを信じていないということか?セイバー」

「違います!私はシロウに理想を貫いてもらいたい!だからこそ、私が彼に勝利を……」

「馬鹿か、オメーは」

俺は思いつきりセイバーにげんこつをくらわせる。セイバーはうずくまり、涙目で俺を見る。

「っ……!?!」

「シロウの理想は確かに立派だ・・・でもセイバー・・・お前はそれでいいのか？君のことだ。戦いにおいての自分の経過を離さない気だろう」

こいつはたしか、キャスターとの戦いでも自分を犠牲にしようとした。そんなことをさせたくはない。

「・・・それは」

「お前は心のどこかで士郎を信頼していない、心の現れだ。」

「・・・」

「少し言いすぎだな・・・別に今から行くのを止めはしない。だが・・・俺も行く」

「なっ・・・」

「一人より二人だ。キャスターが何をたくらんでいるかわからないしな」

実際の所、風王結界を解かれるのもまずいし・・・

「わかりました、共に闘ってください」

「ああ、もちろんだ」

こうして、俺はセイバーとともに柳洞寺へと向かった。

柳洞寺

「……………」

「………」

「結界か……正面突破じゃねーと無理だな」

さて、どうしたものか……

「ならば行きましょう」

「よし、行くぞ……！」

俺たちは階段を駆け上る。

「そこを往くのはサーヴァントか？」

「……」

お出ましか……

「何者だ！」

「任によって山門の守護にあたっている者だ。素直に立ち去るならばそれでよし、だがどうしても進むというのならば、まずは私と立ち会ってもらおう。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎！」

「アサシンだと……！？」

さて、どうするか

1、セイバーに任せる

2、俺がやる

3、二人同時

4、戦略的撤退

・・・どう考えても4はありえないな

「二人ともサーヴァントか・・・来るがよい」

「セイバー・・・下がってる」

「ジン!？」

「もしやるなら、キャスターとの戦いのことを考える」

まあ、士郎と凜が気づいてここに来るだろうしな。

「ほう、貴公一人か」

「ああ、その方がいいだろ？」

「ふっ、おもしろい・・・佐々木小次郎、いざ参る！」

「神谷迅、全力を持って相手をする・・・」

俺は斬月を出現させ、剣を構える。

「ほう、巨大な剣だな・・・鏢も柄もないとは・・・」

「見た目で判断されても困るぜ」

「そうだな・・・行くぞ！」

互いに駆け出し、剣がぶつかって火花が散る。さすがは伝説の剣豪か・・・！

セイバー side

私はもとも一人で戦はずだったのだが、ジンが代わりに戦ってくれている。今は協定を作っているとはいえ、彼が何故共に闘うのか、それがわからなかった。ライダーを倒せば、私達は敵同士だ。本来なら私とアサシンが共倒れをすることを望んでもいいはずなのに・・・

「やるな、クラス無きサーヴァント」

「あんたもな、佐々木小次郎」

「しかし解せんな・・・何故お前はセイバーに味方するのだ？」

「仲間の味方して悪いか？」

「そうではない、何かの協定上で成り立っているのならば、私との

同志討ちを望むだろうに」

そうだ・・・佐々木小次郎も同じ考えか・・・

「確かにこの聖杯戦争はそういうルールだ・・・けどな」

言いながらジンは小次郎に剣を向ける。

「主のために一生懸命な奴を応援して何が悪い！」

・・・！！

「セイバーは確かに強い。だが主人のために頑張ろうとしている。

そんな奴に、同志討ちを望もうとは思わない。俺は正々堂々、こいつと戦う」

「その覚悟、立派なものだ・・・よかろう、ならば私の秘剣を出す
としよう」

「秘剣・・・ねえ、燕返し？」

「なっ・・・まさか知っついていようとは・・・」

「いや、俺日本人だし」

なんと・・・ジンは小次郎の秘剣を知っていたのか。

「まあ、実際には文献を見ただけ・・・見せてもらおうか、燕返し」

「よかろう・・・行くぞ！」

な、なんと鋭い殺気だ・・・奴め、宝具を出す気か！

「・・・・・・・・来い」

「構えよ神谷・・・さもなければ死ぬぞ。秘剣・・・燕返し！」

「ぐおっ！」

ジンが飛び、それを避けた。避けたのだが・・・

「・・・・・・・・」

「なるほど、流石だな」

「つく！」

ジンの腕に傷が・・・まさか、今のは？

「なるほど、さすがだな・・・」

「おまこそ、そろそろ本気を出してはどうだ？」

「・・・・・・・・何のことかな？」

本気・・・ジンはまだ本気でなかった！？

「その剣より発する力・・・・・・・・魔力・・・尋常ではないな」

「流石は佐々木小次郎・・・見抜いていたか」

ジンが剣を前に出し、その持つ手を逆の手で押さえる。すると、ジンの回りに恐ろしいほどの魔力が渦巻いていた。

「……………アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。いいだろう、見せてやる。斬月の力を！」

「これは……………！」

なんとという魔力！

「卍……………解！」

「……………！」

黒い魔力が、ジンを包み込んだ！？

「……………天鎖斬月！」

長い包丁のような刀は、刀身から柄まで黒い刀となった。

「ほう……………なんとという殺気、これが貴公の本気か」

「……………佐々木小次郎、忠告しておく。上手く避けるよ」

「!?」

「月牙……………天衝！」

凄まじい魔力の塊が刃となって小次郎に襲いかかる。

「ぬづっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

これが、ジンの力・・・

迅side

「よく避けたな、流石は佐々木小次郎」

「なるほど・・・これはなかなか・・・」

とりあえず階段だけ避けた。寺はまずいと思ったので強制的に消したけど・・・やっぱりここじゃ駄目だな。

「・・・佐々木小次郎、先ほどの一撃はその足場では完璧に放てなかった。違うか？」

「よく見抜いた、その通りだ」

「なら我々は引く。次は邪魔の入らぬ場所でやりたい」

言いながら、俺は斬月を投げつける。そこにいたのはオルフェノクだった。

「ギ・・・ガ・・・」

「消えろ、屑め」

オルフェノクは爆発し、砂になって消えた。

「今の化け物はなんだ……」

「……………いずれ話そう、それに連れがここに来る。今日は引き上げよう」

「そうだな、どうやら見張られているようだ」

「セイバー、行くぞ」

「しかし……………」

まったくこいつは……………

「まだ分からないか？ 士郎がこっちに来る。それに、ここにいるのは危険だ」

「……………わかりました」

こうして、俺とセイバーは引き上げ、士郎と合流して家に戻った。

「それなら俺がお前の代わりに戦う！ どうだ、文句あるか！」

「「は？」」

ただいま士郎とセイバーが喧嘩中。平和だねえ……………

「凜、俺もつ寝る」

「はいはい、あんたって本当にマイペースね」

「痴話喧嘩なんかにつき合ってられるか」

「どうやら士郎はセイバーの代わりに戦いたいなどと思っているらしい。それじゃあサーヴァントとマスターの関係意味ないじゃん。

「まったく、馬鹿かあいつは」

「・・・修行、か」

「ゼロ、お前はどっと思っ？」

『オルフェノクの出現は確かに予想外でした。何故出たかには二つあります』

「言ってみる」

『一つ目、オルフェノクがこの世界で元々存在するケース』

「・・・なるほど、パラレルワールドだからこそ考えられる可能性か」

でもそれだったら俺が気づくはずだが・・・

『二つ目は・・・我々がこの世界に引き込んだという可能性です』

「・・・闇の書の防衛プログラムか」

あの時次元犯罪者が持っていた欠片がこっちに一緒に来てこの世界の闇に増長したのか・・・？確かに、聖杯の欠片に反応したなら、あるいは・・・

「ジン、起きていますか？」

「おうセイバー、入れ」

セイバーが入ってきた。

「今日の件ですが・・・」

「化け物のことか？」

「はい、貴方は知っているようでしたが・・・」

「・・・今は言えない。だが、いずれ話すつもりではいるから、安心してくれ」

「そうですか・・・では二つ目、士郎のことです」

士郎のことねえ・・・

「士郎の『代わりに戦う』か？」

「はい、私はどうするべきか、少し悩んでいます。未熟な士郎ではいずれ命を落とす。私はそうならないためにキャスターの撃退に向かったのですが・・・」

「確かにあいつは未熟だし、理想論しか言わない・・・さらに言えば甘ちゃんだな」

「そうです、だからこそ私が頑張らねばと・・・」

「セイバーさ、一ついいか？」

「はい」

セイバーがキョトンとした顔になる。

「オメーは確かに立派な騎士だ。それ故に一人で走る。間違っではないんだが・・・」

「間違っではないが、なんですか？」

「士郎と一緒に道を歩くっていう選択肢を入れてみたらどうだ？」

「!？」

セイバーのやつ驚きすぎ。

「確かにあいつは未熟だ。だがだからこそ、あいつを支えればいい。サーヴァントはマスターを支えてなんぼだ・・・お前はあいつと自分が納得のいくやり方を考えればいいだろ」

「・・・」

「俺は答えを出せん、俺はお前じゃないからな。最終的にお前が決めればいい。この先の戦いのためにな」

「……ありがとっ迅、少しだけ答えが見えた気がします」

「そっか、頑張れよ」

「はい、ありがとっございます。おやすみなさい」

「おう、お休み」

こうしてセイバーは部屋に戻っていった。

「ふう、答えは自分で……か」

自分で言っておいてなんだが、俺自身はどうなんだろうな……

『どうしましたマスター？』

「……もしライダーたちと戦い終われば、セイバーとは敵同士だ。俺はセイバーと戦えるのかな……」

『それを決めるのもマスター、貴方です』

「そっだな、その時に決めよう」

こうして、俺は眠りにつくことにした。

第七話「選択肢」(後書き)

秋風「最近寝てないです」

迅「馬鹿だからな」

秋風「お前に言われたくないわ」

迅「それにしても、今回はフラグが立たないのか？」

秋風「何？立って欲しいの？」

迅「んなこと言っただろ」

秋風「まあね、読者の方もそうだろうけど、もうちょい先になる」

迅「あ、そ……」

秋風「それと、オルフェノクが出たけど、また別のも出てくるよ」

迅「そうなのか」

秋風「んじゃ、また次回」

迅「次回、第八話『動き出す歯車』ではまた」

第八話「動き出す歯車」(前書き)

だんだん道なりがそれてきました。お願いだから石は投げないよう
にお願いします

第八話「動き出す歯車」

次の日、士郎は学校を休みセイバーと猛特訓を始めた。

「どう思う？迅」

「いいんじゃないの？別に」

「どうでもよさそうね」

「そうでもないさ……この先足手まといになられても困るからなあいつが強くなるならばん万歳だ。」

「で、どう思う？キャスターについては」

「そうだな……そういえば柳洞といえば、生徒にそんな苗字の人間がいたな……」

「ええ、彼のことね。あら？」

「柳洞君「げつ遠坂」!?」……………」

「おはよう柳洞」

「神谷先生まで……おはようございます」

と、自転車を引きながら挨拶する柳洞。

「相変わらず失礼ねアナタ・・・そういえば聞きたいんだけど、最近柳洞寺で何か変わったことはない？新入りのお坊さんが入ったとか」

・・・それって結構ストレートに聞いてないか？

「そうだな、葛木先生が家に下宿していることは知っているか？」

「葛木って、うちの担任でしょ？」

・・・ああ、あの殺気めっちゃ放ってる先生か。確か仮のマスターだったな。

「先生は近々結婚することになってな。その奥さんも一緒にうちで暮らし始めたのだ」

「（奥さんってまさか!?!）」

「（・・・だろうな）」

「あ、葛木先生」

「「!」」

「柳洞、今年の予算配分のことと話がある。職員室へ来てくれ。それと神谷先生、もうじき職員会議です」

「わかりました」

「ええ、わかっています」

さてと、行きますか・・・

「んじゃ、後でな凜」

「ええ、わかったわ」

こうして学校の一日が始まる。

昼休みには凜が屋上で会議するというので、屋上を訪れた。いくつか魔法陣を見つけたので破壊はしておいたが・・・

「どうだった？」

「随分増えている・・・破壊したが士郎に探してもらった方がいい」

「私は最初から慎二の言葉なんて信じてないわよ」

・・・それはいいんだが

「問題は彼女・・・桜だ」

「・・・分かってるわ」

彼女が令呪を持つなら彼女を叩けばいいが肉親にそんなことをできる凜じゃない。ましてや彼女も被害者だ。

「今はライダーを倒すことを優先するわ」

「確かに、彼女を救うことに繋がるからな・・・」

真に戦わなければいけない敵は、間桐家の爺だな・・・

「とにかく、これで全てのサーヴァントが出そろったわけね」

「ランサーとアサシンだけマスターは不明だが、大丈夫か？」

「ランサーは正体割れてるし、アサシンとキャスターは組んでるみたいね」

・・・この先超不安だな。原作知らなかったら。

「あと危険なのはイリヤスフィールよ」

「イリヤか・・・イリヤは普通にすればかわいい女の子なんだが・・・」

「あの子も何考えてるか知らないけど、あなどるんじゃないわよ？」

「わーってるよ」

こうして昼休みが終わり、俺たちは家に帰ることにした。

「んで？これどういう状況？」

目の前にはセイバーが竹刀を構えている。

「一本、よろしく願います」

帰って来てから士郎に連れてこられ、参考にしたいとか言いだした。さらに大河と桜も見ている。

「はぁ……わーっ たよ」

構えて、セイバーを見る。隙がない、騎士道を極める女性であり、民を守る王……さすがだな。

「行くぜセイバー」

「ええ、ジン」

互いに駆け出し、剣を交える。流石だな……速い！

「はっ！」

神鳴流奥義 百烈桜花斬！

「ぐぐっ！？」

「どンドン行くぞー！」

神鳴流奥義 斬岩剣！

「っく！」

「お、よくしのいだな……」

「さすがですね……これだけの剣とは……」

斬岩剣防いでおいてよく言っわ

「おらおら！行くぜ！」

「負けません！」

凜side

・・・相変わらず規格外ね。先生と桜は現実逃避して夕食作りに行っちゃったし。士郎は士郎で驚いてるだけだし。

「ふう・・・もう疲れた」

「私もです」

いつの間にか戦いを終えた二人。サーヴァント同士で模擬戦闘なんてそりゃそうでしょ

「ふう・・・士郎、参考になった？」

「・・・無理だ」

士郎がornになってる。まあ無理もないか・・・

「んじゃ、私も夕食作りに行ってくるわ」

「ああ、頼んだ」

「セイバー、俺先風呂入ってくる」

「わかりました」

まったく、こいつものんきね

迅side

ううゝ・・・久しぶりに戦ってあれだけど、やっぱりセイバー強いわ

「・・・ゼロ？」

『どうしましたマスター』

「あれは出せる？」

『ええもちろん。私の中に保管されてますから』

よし、じゃああれを出して士郎に修業させよう。俺は土蔵へと向かった。

夕食を終えて桜達が帰った後、俺は3人を集めた。

「・・・単刀直入に聞くぞ士郎」

「な、なんだ？」

「お前、強くなりたいか？」

「・・・そりゃなりたいたさ。セイバーと戦えるくらい」

「・・・ま、いつか」

「なら約束しろ、その剣を振るう時は何故それを振るのか・・・と」

「わかった」

「んじゃ、ついてこい」

こうしてみんなで土蔵に入っていった。そこにはいつも使用するあの『別荘』が置かれていた。

「これは何？」

「俺の宝具みたいなもんだ・・・さ、行くぜ」

指を鳴らし魔法陣を展開。俺たちは転移した。転移してからそこにつくと、3人が目を丸くしていた。

「な・・・なななななななな・・・何よこれー！」

「俺の別荘だ」

こうして俺たちはソファアに座る。

「で、ここどこなの・・・どこかに転移でもする魔法なの？」

「いや？ここはさっきのミニチュアの中だ」

「はあ！？」

「先ほど宝具とおっしゃっていましたが・・・」

と、冷静なセイバー

「ダイオラマ球って言ってな。特殊空間を形成する場所だ」

「へえ・・・でも、どうしてここで？確かに際限なく修業はできるけど」

「ここでの一日は、外の時間では一時間になるんだ」

「は？」

「日本の昔話に浦島太郎があるだろ。3日いたら3000年経ってたつて。これはその逆。ここでの一日は『一時間』になるんだ。だから今日みたいに士郎が一日学校休まなくても修行ができるってことだ」

驚く3人。ま、後は任せよう。

「んじゃ士郎、修行頑張れよ。ここなら走り込みから何からなんでもできる」

「あ、ああ・・・」

「俺はちよつと書庫に行くから」

「あ、あたしも行くわ」

こうして士郎とセイバーは修行。俺と凜は書庫へと向かった。

「す、凄い・・・これ、全部文献なの!？」

「魔術の資料だけじゃない。魔法や世界の文献もある」

「で、あんた何を調べたいわけ？」

「今後の対策」

とりあえずライダーとの戦いは問題ないだろう。問題はその後『キヤスター』と『バーサーカー』だ。さらに言えば『ギルガメッシュ』もだけど・・・

「・・・ん？あれ？凜？」

いつの間にか凜が消えていた。どこかに遊びに行ってしまったらしい。迷子にならないといいが・・・

「・・・・・・ホムンクルス」

鋼の錬金術師では賢者の石を核に作り出される人間だが、この世界では違う。あの子・・・イリアは、ホムンクルスだ。神の本棚だけでは不足なので調べてはみたが、それをどうにかしないと・・・

「はぁ・・・」

別に人としての力を極限にまで使えばなんとかなるだろう。後は聖杯の欠片の破壊・・・随分手間が多いがなんとかかな。俺は本を数冊持ち出し、士郎たちの所へ戻る。

「・・・・・・・・イリアを人にするのは難しい。ならばいつそ・・・」

いつそのこと賢者の石を作り出してしまおうか？人の命を使わなくてもこの別荘の『万物』のエネルギーを媒体にすればそれは容易い。限度はあるが人として過ごす一生ならば十分なほどに延命ができる。

「うおおおっ！」

「甘いです士郎」

「うがっ！」

・・・いまだに一本も取れない士郎。凜があきれる理由がわかった気がする。

「迅、見て見て！」

「ん・・・！？」

そこには水着になった凜がいた。

「お前何してんの！？」

「奥にあったのよ、似合っ？」

多分はやてやアリシアのだな？あいつら持ちこんでやがったのか・

「・・・海に行くの面倒ならそっちにプールがあるぞ」

「少し息抜きしましょ、セイバーもほら！」

「え、あ・・・凜？」

こうしてプールへ行く凜とセイバーだった。

「・・・」

置いてかれた土郎。俺はため息をつく。

「オメーも休憩して来い」

「お、おう！」

俺は水着を取り出し、土郎に渡す。土郎もプールへと走っていった。平和だねえ

「迅！あんたも入りなさいよ！」

「俺はいいよ・・・それよりジュース持ってきたぞ」

キッチンはここ近いからな。トロピカルジュースくらいなら簡単だ。

「すっごいわねここ・・・至りつくせりじゃない！」

「確かに、私も幾分調子がいいです」

「そりゃそうだ、ここは魔力が充満してるからな」

サーヴァントのセイバーもやっぱり調子が良くなるようだ。

「冬でも夏の気分が味わえるなんて最高ね！」

「・・・別にいいけど知らんぞ？ここにすぎるとそれこそ浦島太郎だ」

「うっ！」

「でも迅、ここって誰も住んでないのか？」

あたりめーだろうが

「これは元々ゼロの中に収納されてたんだ。人はいないから安心して暴れていい」

「ふーん」

こうして凜たちはリゾートを満喫すると同時にセイバーたちは修行にも励んでいた。もうすぐライダーとの戦いが始まる。

第八話「動き出す歯車」(後書き)

秋風「今回は連続投稿です」

迅「次回、第九話『現れた男』」

第九話「現れた男」(前書き)

・・・今回はうん、ギャグがあります。シリアスな空気が全部ぶち壊れます。セイバーもちよっと可愛いです。でも気にしません、そして後悔などしていません！

狙うならねえ！俺の心臓はここだあ！

迅「・・・刺し穿つ死棘の槍」
ゲイボルグ

秋風「ぐはっ！」

第九話「現れた男」

次の日、いつも通り俺たちは結界を潰していく。

「これでほとんど潰したな」

「後はライダーを倒すだけね」

この後はなんだっけ・・・あの野郎が確か弓道部で騒ぎを起こすんだっけか？行ってみよう。

「凜、俺は仕事があるから先に戻れ」

「わかったわ」

凜と別れ、弓道場を見る。おお、修羅場だ

「どうした」

「あ、神谷先生」

「騒ぎ声が聞こえたが？」

生徒が泣いていた。生徒をなだめるよう他の部員に頼むと、俺は美綴を見る。

「美綴部長、何があった？」

「・・・ええ、実は」

慎二が俺を睨みつけている。少し余裕の表情だ。見るからに恐らく俺のことをここから出したいらしいな。

「神谷先生、これは弓道部の問題だ。あんたが出る幕じゃないじゃないか？新米教師のあんたがここにいる必要もない」

「確かに、残念ながら俺は弓道部顧問じゃないがそれ以前に教師だ。それに藤原先生がご多忙なので様子を見るようにも頼まれていてね」

「なっ……!?!?」

「それで間桐君、下級生を押しつけて順番を守るといふ行動をせず、今度はサボっているくせに射ることができないことを下級生のせいにする……さあ、君の言い分はなんだい？」

俺が言うと、慎二は苦虫をかみしめたような顔になる。

「君のことはよく話題だ。職員会議でね」

そう、こいつは結構問題を起こす男だ。

「美綴さんの話では部活を退部という話だが、それどころじゃない、最悪の場合君は『退学』も考えられている」

「なんだと……!?!?」

「このことは明日の職員会議にも出す。それなりの処罰を覚悟してもらおう」

「っく!」

慎二は弓道場を荷物を持って飛び出して行った。

「ありがとう神谷先生、事態を収めてくれて」

「何、たまたま通りかかったただけだ。さあ、練習を頑張るといい」

「ええ、ありがとうございます」

・・・さて、これで美綴から俺へと、標的も移るはずだ。

夜道、誰もいない所を俺が歩いていると、突然攻撃された。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ふん、来たか」

ライダーが構えていた。どうやら慎二の命令で俺の魂を吸いに来らしい。本来なら美綴がやられるんだがな。ライダーも驚いている。

「まさか、教師としてサーヴァントが紛れ込むとは」

「そうだな、びっくりしたか？」

「・・・・予想外だった、とだけ」

俺はため息をついて構えを解いた。

「おいライダー、お前に相談があるんだ」

「・・・敵に相談するとは、おろかですね!」

言いながら武器を飛ばすライダー。俺はそれを避ける。聞く耳持たずかい!

「ちよっ!待てって!話聞けよ!」

「聞く必要がない、あなたはここで倒す!」

しょうがないなあ・・・

「ゼロ!」

『オーライ、バインド』

バインドでライダーの足を止める。まったく

「んな闘争剥きだすなよ」

「つく!離しなさい!」

「落ちつけ、今は戦う意思はない」

どうやら魔力集めが足りないからか、急いでいるようだ。

「なあお前、慎二の言うこと聞いているけど、それでいいのか?」

「どづい意味です」

「『本当』のマスターの気持ち、考えたことあるか？」

俺が言うと、ライダーは驚いて俺を見る。

「!？」

「偽臣の書なんかで命令聞いて・・・それでいいのか？」

「黙りなさい・・・今のマスターは慎二です」

「嘘言つな。確かに俺達サーヴァントは戦うためにある。そして主人の命令は絶対だ。でもな！自分の心に嘘をつくんじゃないやねえ！」

「!?!」

俺はバインドを解き、鞆を捨つ。

「後は、お前が決める・・・戦う道を選ぶならそれもよし、偽りの契約にあがうのもまたよし・・・自分で考え、自分で決める」

こうして俺はその場を後にした。

衛宮家

「ただいま」

「あら、お帰り迅、遅かったわね」

「ああ、ちょっと戦ってきた」

「は!？」

俺は凜にライダーとの戦いを伝えた。

「あんだねえ・・・パスするなりなんなりしなさいよ!」

「わ、悪い、色々あつてな」

とりあえずライダーが魂喰らいを本気で始めたということを俺話した。

「なーにが保険だ、どうする凜」

「・・・わかったわ、ちょっと出かけてくる」

「おい遠坂、どこへ？」

「多分、教会だろ?今回のことを知らせるんだろ?」

これであいつらは行動に移る・・・

「おい土郎」

「え?」

「お前はまだ、あの男が本気で『巻き込まれた』と思うか?」

「そ、それは・・・」

「お前は確かに正義の味方だ・・・だが、悪を救うのは、正義の味方か？」

俺の言葉に、士郎は黙り込む。

「理想だけで正義は語れない。だが力だけでは正義ではない・・・理想だけを語り命を落とすのが嫌なら、強くなれ」

俺はそう言っただけで部屋に戻った。俺にはまだやらなきゃいけないことがあるから・・・

次の日の朝、俺は凜と間桐家に向かった。慎二が凜にくっついてかかる。

「魂喰らいのことで怒ってるのか？あんなの聖杯戦争じゃ常套手段なんだから！？言峰だってそう言ってるんだ。僕に落ち度なんかあるもんか！」

そりゃそこまで落ちたらもう落ちらんねーだろ

「そうだよ・・・マスターとして選ばれた僕らには聖杯を手に入れる崇高な目的がある。そのためなら虫けらどもの魂を奪うくらい何の問題もないはずだ。だって目的のためなら手段を選ばないのが魔術師なんだろう！」

そんなアホなこと誰が言ったよ。

「お前だって裏じゃ汚い手を使ってるんだろ遠坂」

凜が慎二を殴ろうとする。俺はバニッシュを使った状態でそれを止

める。

「（何するの！？離して！）」

「（お前がすることはない。俺がやる）」

バニッシュを解いて慎二に近づく

「お前は！？」

「さあ、お前の罪を数えろ・・・」

「なっ・・・あぐあっ！」

俺は顔面に思いっきり蹴りを叩きこんだ。あ、歯が欠けたかな？

「シンジ！」

ライダーが出てくる。俺はゼロを向けてライダーを止める。

「あんたと同じにしないでくれる？不愉快だわ」

凜もはつきりとした口調で慎二を睨む。

「私は別に今すぐアンタをぶっ殺してやっても構わないの。だけど遠坂と間桐の長い付き合いに免じて最後の警告に来たのよ」

「警告・・・？」

「今すぐこの戦いから手を引きなさい。そして今後一切街の人間に

手を出さないと誓うならこれまでのことは見逃してあげる。さもな
くばこの私が直接あんたに引導を渡してあげるわ」

「ぐっ……」

「せいぜいよく考えることね。返事は今夜聞かせてもらっわ」

こうして、俺たちは間桐家を後にした。

「……っく、くく、あいつの顔、おもしろかった」

「ったく、なんでアンタが代わりにやるのよ」

「オメーの手が汚れんだろ？」

言いながらあくびをする。昨日も寝てないからな……

「そりゃありがたいけど、あたしにも立場つてもんがあるのよ」

「ったく、オメーは17の癖に色々背負いすぎなんだよ」

俺はいいながら凜の頭をなでる。

「ちよっ……」

「さっきの警告だって、お前の優しさと弱さだ。お前、まだ人殺し
なんてできないだろ」

「それは……そうだけど」

凜はなんだかんだ言ってもお人よしの部分がある。本来ならすぐにも倒さなければいけない士郎に色々教えている。そして士郎の言葉に耳を傾け慎二の1%の可能性を信じている。

「でも、私は止まらない。聖杯を手に入れるまでは」

「わーったよ、どこまでもついてきましよう？マスター」

こういて、俺と凜は学校に向かうのだった。

一時間目が始まる瞬間、ライダーが結界を発動させたらしい。俺は凜と合流して屋上に向かった。どうやら士郎は落ちた後らしい。

「そこまでよ慎二！もう弁解の余地はないわ！覚悟はできてるんでしようね！？」

「っち、ライ「つりゃあああっ！」「ぐぼらあ！」

「慎二！？」

瞬動で近づいた俺は思いつきり首領パツチソード（ネギ）で慎二の顔をぶっ叩いた。余りの事態にライダーも驚いている。

「ちょっと迅！？なによそのネギ！」

「ネギじゃないぞ！これは由緒正しき宝具にして名刀の『首領パツチソード』！」

「嘘つけえ！そんな宝具あるわけないでしょ！」

「仕方ない、じゃあこっこの『魔剣大根ブレード』で……」

言いながら俺は大根を取り出すが……

「まじめにやれ！」

「ぐはっ！」

俺は凜に殴られた。ちよつとしたジョークなのに……

「つく、僕を馬鹿にして……！」

「そんなことしたら馬鹿に失礼だ」

「貴様あ！」

偽臣の書で魔力を俺に飛ばす。俺はそれを首領パッチソードで弾き飛ばす。

「なっ！？」

「お前の攻撃など効かん！」

ライダーをバインドで縛り、首領パッチソードで斬りかかる。

「終わりだ！」

「うわああっ！」

ガキイイン！

振り下ろした首領パッチソードはセイバーに防がれた。

凜side

なっ・・・どうしてセイバーが！？

「どづいつつもり衛宮君・・・」

「お前に慎二は殺させない。これが俺の出した結論だ」

士郎は私に自分の考えを訴える。つく！こいつどこまでお人好しなの！？

「この馬鹿！アンタ「こらセイバー！」！？」

見ると、少し離れた場所で迅とセイバーが言い合っていた。

「セイバー！てめ、せつかくの首領パッチソード斬れたじゃねーか！」

「食べ物や武器ではありません、そもそもそんなので人に斬りかからないでください」

「いやお前これ！高いネギだったんだぞ！」

結局ネギって言ってるじゃない。

「しかも期間限定で取り寄せたんだぞ！？場合によっては今日の鍋に入れようと思ったものだ！それを粗末にするとは・・・騎士失格だぞセイバー！」

「な、なんですって!?!」

「セイバー！お前今日は飯抜きだ！」

「そ、そんなぁ！」

「いつまでやってのよ!！」

私は迅とセイバーにドロップキックをお見舞いした。

「まじめにやんなさい！空気ぶち壊しじゃない！」

「シリアスな空気と夕食、どっちが大事だと思ってんだ」

「もちろん夕食です」

セイバー、あなたキャラ変わってるわよ。

「まじめにやるもなにも、こんな魔術師まがいのガキの相手してもな・・・」

「あんだねえ・・・」

・・・なんでだろう、さっきから迅は何を警戒してるの？まるで私達に魔力を使わせないような・・・

「つく！シンジ、離脱します」

バインドを解いたライダーがシンジを連れだす。

「逃がすかつ！」

するとライダーが首に剣を刺し、血で魔法陣を描く。

「避ける！」

その宝具、全員が避ける。ライダー達は逃げたけど、なんとか結界は消えたわね。

迅side

「さてと、なんとか終わったな・・・だが」

俺は屋上の扉の上を見る。

「終わってないみたいだな」

そこにいたのは、かつて倒した男・・・紅だった。

第九話「現れた男」(後書き)

秋風「連続投稿って何か得ある？」

迅「読者にはあるんじゃない？」

秋風「だよな、ってことでもう一本」

迅「次回、第十話『見えてきた本当の意味』」

第十話「Rider」（前書き）

今回で多分原作とずれてくる部分が多くなります

今のうちに原作を愛す方は退散してくださいね

第十話「Rider」

「・・・紅」

「ヒサシブリダナ、ゲンキダツタカ」

ぬけぬけと・・・

「まさか生きていたとはな・・・いや、正確にはあの欠片から修復したのか」

「ソノトオリ・・・コノチカラデナ・・・ソシテコノチニヤドルマリヨクデワレハヨミガエツタ」

面倒だな・・・

「ちよつと迅、あれは誰なの!？」

「・・・後で話す」

「なんとなく威圧感だ・・・」

「フツ・・・ワタシハマダウゴカン・・・キョウハアイサツダ」

「挨拶だと?」

こいつ、何のつもりだ・・・

「コノセカイノチカラ・・・セイハイ・・・ワガチトニクトシ、コ

ンドコソキサマヲホウムロウ」

「待てっ！」

こうして、紅は消えて行った。

「逃げたか……」

「……今は何も聞かないでおくわ。それより、行くわよ」

「ああ、わかってる」

「遠坂！俺達も……」

士郎が言おうとしたが、凜がガントを地面にぶつけ、怒鳴る。

「貴方には失望したわ！まあか慎二をかばって私達の行動を妨害するなんてね！もうこれ以上共闘を続けても意味がないわ。貴方は貴方で好きにするといい」

こうして、俺達はライダーたちを追った。

俺達は捜索を続け、奴らが行動するであろう夜を待った。

「で？さっきの奴はなんなの？」

「……名は紅、俺がいた世界で戦った敵だ」

「敵……か、友好的じゃなわけね？」

「ああ、あいつは何かをする気だ……」

言いながら俺は缶コーヒーを凧に渡す。

「だが、させるつもりはない」

「ええ、そうね……でも先にライダーをなんとかしないとイケないわ」

確かにそうだけど……俺としては、紅が出てくるというのは厄介だ。すると、魔力反応が起きる。

「こっちなね！いくわよ！」

「ああっ！」

こうして俺達は走るのだが……

「グルルルル……」

「紅の奴……俺達を行かせない気か」

回りには数十の魔力を纏った野良犬と、ローチの姿があった。

「凧、野良犬は頼んだ……俺は、奴を倒す」

「わかったわ……気をつけて」

「ああ」

俺は頷いて、カードを入れてブレイドバックルを装着してから構えを取った。そして待機音が鳴る。

「変身！」

『TURN UP』

オリハルコンエレメントが作動し、俺は仮面ライダー剣となる。

「行くぞ！うええい！」

「ガアアア！」

ローチを斬るが、流石は紅か、強化したローチたちは強い。ならば・
・・！

『SLASH SUNDER』

2枚のカードをブラウズする。

L I G H T N I N G S L A S H

「はああっ！」

「ギギイ！」

ライトニングスラッシュを敵におみまいする。よし、これならいける・・・！

「凜、大丈夫か!？」

「ええ、なんとかね!」

言いながら野良犬達を潰す凜。どうやら犬達は一撃をくらつと元に戻るらしい。さすがは凜と言ったところか。

「一気に決める」

『KICK SUNDER MACH』

三枚のカードが俺の体に宿る。

L I G H T N I N G S O N I C

「おおおおおっ!うえええい!」

ライトニングソニックが命中し、ローチは爆発・・・凜も野良犬達を片づけたようだ。

「ふう、片付いたな」

俺は変身を解き、凜に近づく。

「ええ、このままライダーたちを追うわよ」

「分かった」

こうして、俺達は街を走り抜けた。

紅side

「ヤハリローチテイドデハムリカ・・・」

私はソノコウケイヲミナガラモ、エミガコボレル

「コノモノガタリハマダナガイ・・・ソシテワタシノフツカツモマ
タシカリ・・・キナガニミルトシヨウカ・・・」

迅side

「つたく、時間くつちまった！」

「つべこべ言つてないで走るわよ！」

「へいへい・・・」

魔力反応が街の反対側にあるのは予想外だった。こんなことなら別荘からバイクを出しておけばよかった。

『ないものねだりしても駄目ですよマスター』

「わーってるよ」

そんなことを言っていると、空に光が走った。

「あれは・・・!？」

「エクスカリバー約束された勝利の剣……セイバーのやつ、ライダーを倒したんだな」

「エクスカリバーって……もしかして？」

「その話は後だ。ライダーが慎二を連れて逃げている」

令呪の絶対命令とはいえ……大した奴だ

桜 side

使ってしまった、最後の令呪……これで、ライダーは消えてしまう。兄さんは無事だった。でも、ライダーは……

「気にすることはありません、桜」

ライダーは笑顔だった。消えてしまつのに、私のせいなのに……

「サーヴァントはマスターの命令に従う者です」

「桜……どうし」ていつ「うっっ!!」

いきなり兄さんが倒れた。そしてそこにいたのは、私が良く知る人物だった。

「遠坂先輩……迅さん……」

迅side

「なにしてんのよあんだ」

「いやほら、この先は見られると困るからさ」

俺は言いながら魔力結界を張ってライダーの消滅を止める。

「え!？」

「なんのつもりです……」

「お前に消えられると、色々困る」

言いながら俺はライダーの胸に『破戒すべきすべての符』を突き刺した。

「がっ……」

「ライダー!？」

すると、予想通り、ライダーの消滅はなかったことにされ、俺の腕に令呪が現れる。

「これで、ライダー……お前のマスターは俺になる。そして、お前の消滅はなかったことになる」

「どっして……」

「なに……」

言いながら桜を見る。

「桜の涙を見たくないだけさ……」

「ライダー！」

「桜……」

桜が嬉し泣きでライダーに抱きつく。

「よかった……」

「なるほど、だから慎二を気絶させたのね？」

ライダーの復活を知れば、また何をしでかすかわからない。

「さてライダー、俺達と来い、そして……力を貸してくれ」

「サーヴァントは契約者の言うことを聞くものだ。わかった、力になるぞ」

「もっとも、桜とはいつでも会っていいからな」

こうして、ライダーは俺のサーヴァントとなった。

結果

セイバーVSライダー

勝者 セイバー

敗者 ライダー

備考

ライダーは消滅寸前で別の相手と契約し、消滅を免れた

遠坂家

「さて・・・ライダーとの戦いは終わったし・・・後残ってるのは？」

「キャスターとアサシン、そしてバーサーカーとランサー」

「まだまだ、先は長そうだな・・・」

「今日は色々あつて疲れたな・・・」

「ジン、お願いがあります」

「なんだ？言ってみ？」

「桜を、救ってください・・・」

やっぱりな・・・そうだと思った。

「どづいづこと?」

「桜は間桐臓硯・・・初代マキリの力によって蟲で凌辱され、心臓を始めとして体の中のあらゆるところに蟲が埋め込まれているのです」

「そ、そんな・・・どうして!?!」

驚きを隠せない凜

「・・・詳しく話せ」

「臓硯は五百年を生きて来た初代マキリ・・・その体は蟲で形成されています。間桐の血が絶えた今、養子だった桜に無理やり私を召喚させました。そして今度は、偽臣の書を使った慎二が、私を使って聖杯戦争に挑んだのです」

・・・ルートとしてはセイバールートではないな・・・だが、確実に違う道へと動き始めている。ならば・・・

「わかった、対策を立てよう。桜を救い、臓硯も倒す。だが今は・・・」

「ええ、キャスターね」

ライダーが俺のサーヴァントである以上魂喰らいはない。なんとかも止めなければいけない。

「・・・見えて来たな」

「えっ？」

「いや・・・なんでもない」

俺のすべきこと・・・この世界の悲しみをぬぐうこと。なのはの世界と同じことをしなければいけないというのが癪ではあるが、今度こそ変えて見せよう、全ての悲劇を・・・

第十話「Rider」（後書き）

秋風「紅は個人的に好きだったのでまた出しました」

迅「俺の面倒が増えるだけだ」

秋風「気にスンナ、大丈夫だって」

迅「しかも全部力タカナって・・・」

秋風「うん、不完全だからな」

迅「そうじゃなくて読みにくい」

秋風「・・・気にするな」

迅「するわ！」

秋風「じゃあ、今回はこれで」

迅「次回、第十一話『反英雄』」

第十一話「反英雄」(前書き)

今回は打って変わってシリアスです

第十一話「反英雄」

ライダーが仲間となってから次の日、俺と凜は土郎たちの所を訪れた。すでにセイバーはキャスターの手に落ちていた。

「遠坂！」

「何してるの！？逃げるわよ！」

「待ってくれ！まだセイバーが……」

「セイバーのことは諦めなさい！キャスターに魔術を使われちゃ勝ち目がない！死にたくければ走るのよ！」

セイバーが消えている以上俺の『破戒すべきすべての符』も使えない。ここは引くべきか

「くふ……フフフ、よくもやってくれたものね。いいわ、目にもを見せてあげようじゃない」

「やべえな……敵さん、相当怒ってるぞ」

空にはキャスターがすでに戦闘態勢でいた。

「馬鹿め、まんまとにげおおせられるとでも思ったか。チヨロチヨロ這い回る鼠ども……我が神へカテーの名に懸けて……おまえたちを木端微塵にしてくれよう！」

ウーラニア・フロゴシス
燃える天空！

「なっ!?!」

「あばよ、キャスター」

こうして、俺達は轉移し、逃げることにした。

このあと士郎に凜が一喝。士郎はその場に崩れた。俺達は屋敷に戻り、ライダーと合流した。

「予想外だわ、まさかキャスターがセイバーの令呪を手に入れるなんて」

「なるほど、高位の魔術師が最高の剣士と組むわけですね」

「ええ、セイバーが陥落すれば相当厄介な敵になる」

まあ、なんとかなるだろ・・・

「それに引き換え、こちらはクラスなしに騎乗兵だもの」

「あのな凜、そういう言い方ないんじゃないか?」

「そうです、私も力はありません」

といつても、こちらの戦力不足は目に見えるものだ。まったく、困ったもんだ・・・

「とにかく、奴を叩くなら早めの方がいい。今日から狙いを一本に

絞りましょう。さあ迅、それにライダー、三人でキャスターを倒す方法を考えるわよ」

凜side

私はある男の夢を見ていた。ある日理不尽に神に殺された男・・・男は転生し、世界のために奔走した。異形な敵の前に、男は恐れず戦い続けた。そいつは頑張っ、英雄と呼ばれるほどの偉業を成し遂げ、大切な者を守り続けた。だというのに、そいつは利用され、そして追われる身となったのだ・・・

「凜、おい、凜！」

「ぼーっとしてた・・・」

「あ、何？」

「何ぼーっとしてんだ。キャスター撃破の祭壇を立ててるんだろっが」

「二人とも、お茶が入りました」

「サンキューライダー」

「言いながら迅がカップを手に取る。」

「しっかりしてくれ凜、お前がそれじゃ困る」

「ごめんごめん、話を続けましょう」

(今朝見た夢・・・あれはいつたいたいなんだったのかしら)

迅side

「さて、俺達も動くか」

「でも迅、あなた何か考えがあるの？」

「・・・別に簡単な話だ。キャスターがいるのは柳洞寺・・・マスタは恐らく葛木だ」

「葛木が？確かに可能性はあるけど・・・」

やっぱり凜はまだ実戦不足だな。

「凜」

「え？」

俺は思いつきり、凜に殺気を当てた。少しは反応したが、ライダーはすぐに構えを取った。

「今、何をしたの？」

「単純に殺気を当てただけだ。反応が鈍いな・・・凜」

「悪かったわね・・・で、何よ？」

「以前これを、葛木にやってみた」

職員会議が終わった後、この世界が同じように沿っているのかどうかをやってみた。

「案の定、葛木は反応してくれたよ。ライダーみたいにな」

「つまり……？」

「ああ、あいつも人間ではかなりのやり手だ。すでに人を手に懸けているほどな」

正直、葛木は強い。ライダーが五分って感じか？

「……私も試してみたいかしら」

「すぐにやるか？」

「ううん、昨日はろくに寝てないから……出るのは午後、それまで休むわ」

凜side

私はシャワーを浴び、着替える。疲れは少し取れた。

「そういえば迅、あなたそろそろ話してくれないの？あんたのこと」

「俺が何者かって？悪いが、まだ時期じゃない……もう少ししたら、な」

うーん、なんで教えてくれないのかしら。じゃあ、これはどうかしら
「それじゃあさ、聖杯を手に入れたらあんたはいつたい何を願うつもり？」

「願い？そうだな・・・特にない」

「はあ？」

聞いた後、私は部屋でベッドに寝そべる。

「あーもう、なんだってのよ、あいつは！」

（俺は神の本棚を持ってから願うことは全部調べるからな。娯楽にも困らないし、変えたい過去も特にない。だから勝つことにしか興味がない。それは凜も一緒だろ？）

「それはそうなんだけど、なーんかひっかかるのよね、あいつの態度」

紅という敵にしる、戦い方にしる・・・そして宝具を自在に使いこなせることも

「まあ、悪い奴じゃないみたいだからいいけどね」

迅side

夜、凜は葛木と接触し、尋問するがうまく具合にはぐらかされた。納得できない凜は葛木に向かって魔術カントを使った。しかしそれは原作通りにそれ、車に当たった。

「まったく！何をしているんだ君は！」

「う、うるさい！なんなのよもう！」

「・・・恐らく、殺気にあてがわれて逸れたな」

つと、そこで柳洞にぶつかった。

「柳洞君！その女は葛木と組んで悪事を働いている可能性があるのよ！」

「お、おれは！うわあああ！」

凜が葛木の嫁について聞くと、柳洞はキャスターに乗っ取られ、攻撃を始める。

「私と宗一郎さまのことを嗅ぎまわるのはそなたかえ・・・おのれ忌々しや、今すぐ地獄へたたき落としてくれようぞ！」

「この声はキャスター！」

「凜！マイマジック・スキル・マギステル！『戦いの歌』！」

「ぐえっ！」

俺は戦いの歌で身体強化をし、柳洞を吹っ飛ばす。

「まったく、危ないな」

「これではつきりしたわ。柳洞寺の葛木の元にキャスターはいる」

「だな・・・行くぞ凜、こちらの行動がばれた以上、戦うしかない。ライダーもいいな」

霊体化を解いたライダーが現れる。

「わかりました、行きましょう」

こうして、俺達は柳洞寺へと向かった。

柳洞寺についた俺達は、すでに武装をつけていた。

「どうする?」

「私はまだアサシンに顔が割れていません。私で気を引き、そこを叩きますか?」

「いや、もうばれてる。だろ?佐々木小次郎」

「さすがだ・・・神谷迅。また会えてうれしいぞ」

もうすでに来るのがわかってた感じだな。

「ゼロ」

『オーライ、スタンバイレディ』

「決着をつけるか？」

「・・・つぶ、やはりこの感じ」

「？」

「神谷・・・貴様もやはり、まっとうな英霊ではないようだな『反英霊』か？」

凜が驚いた顔になる。ライダーは知っていたようだ。まあ、クラスのないサーヴァントがまともなわけがない。

「・・・そういうお前も同じだろう。文献のみにあり、史実が確認されない、人々の想念によって生み出された架空の英霊・・・」

「いかにも、私とて正規の英霊ではない。陽炎如き不確かなこの身を呼び起こし、番犬として困ったのはあの女狐の仕業・・・だがその番犬も尻尾を振る相手が織らぬのでは意味がないのでな」

「どづいつこと？」

凜が言うと、佐々木小次郎は不敵な笑みを作る。

「ふっ、これ以上私の口から語る必要もあるまい。行ってその眼で確かめてみるがいい」

「どうやら何か中であつたらしいな・・・行くぞ凜、ライダー」

「ええ」

「わかりました」

こうして、俺達は柳洞寺の中へと踏み込んだ。

「こ、これは!?!」

それは柳洞寺が火の海になった後だった。

「半端ない破壊力だ・・・恐らく」

「バーサーカーの仕業だわ・・・」

凜side

すさまじい破壊の跡だった。おそらくバーサーカーとキャスターの間で壮絶な死闘が演じられた後なのだろう。だけど、今はそれよりもっと気になることがある。

「どうした、凜?」

「迅・・・あなた・・・」

私は思い切って、それを口に出した。

「貴方が反英霊だっていうのは本当なの?」

「さっきの佐々木小次郎の言葉か・・・確かに、俺はまっとうな英
霊じゃない・・・」

「じゃあ本当に?」

「・・・・・・凜、俺は英雄じゃないんだ」

「え・・・・?」

どういっ、こと?」

「英雄にはなれない・・・いや、英雄のなりそこないだ」

「迅・・・・」

「それより、ここのお坊さんは助かりそうだ。ライダー、救出をし
よう」

「わかりました」

迅の言葉に嘘は感じられない。英雄ではない・・・・確かに、力はあ
ってもそんな雰囲気はない。私と変わらない普通の人間・・・・学生・
・・・・そんな感じ。私は迅が悪を目的とする反英雄あることを恐れた
けど、どうやらその心配はないみたい。でも・・・・

(迅、貴方の英雄でないと言ったときのその悲しい眼は、一体なん
だったの・・・・?)

迅side

「凜は寝たようだな・・・」

俺は夜、屋根の上で空を見た。星が綺麗に輝いている。

「英雄・・・か」

本来なら英霊は英雄の魂だ。セイバーはアーサー王、ライダーはメ
デューサー、ランサーはクーフリン、アサシンは佐々木小次郎、バー
サーカーはヘラクレス、キャスターはコルキス王女、そしてこの世
界にいないアーチャーはエミヤだ・・・

「俺は英雄なんて器じゃない」

ましてや、なるうとも思わない。

「俺は救う・・・全ての悲しみを・・・そのために俺はいるんだ」

俺は自分にそう言い聞かせた。

第十一話「反英雄」(後書き)

秋風「ということで反英雄でした」

迅「なかなか更新遅いな」

秋風「もともとが漫画だからな。正直苦戦してる」

迅「この後キヤスターだけど？」

秋風「大丈夫×2」

迅「次回、第十二話『迅の過去』ではまた」

第十二話「迅の過去、そして敗北」(前書き)

とりあえず更新です。

迅の過去を書きました。まあ前世じゃなくて神様シリーズのまとめですけど

第十二話「迅の過去、そして敗北」

凜side

その夜、私は再び夢を見た。そこは白い空間にそいつは立っていた。

「バイバーイ」

「覚えてろクソ女神いいいいいい！！！！！！！！！！」

そしていきなり穴に落とされた。

(ああ・・・そうか)

ようするにこれがアイツが英霊になった事件なんだ。何故か転生した世界を知るあいつは、片っ端からその「悲劇」を変えようとした。どんな敵が相手だろうと、どんな人間の悲しみだろうと、片っ端から、全てを救って行った。でもあいつはその力を使いすぎて慢心したのか、それを奪われ、逆に吸収された・・・闇の中で、9人の人間があいつを立ち上がらせた。

「俺は全てを守りたい」

あいつの決意があった。あいつの本音があった。あいつは・・・ただひたすらそれだけをしてきた。どんなにくじけようと、どんなに押されようと、あいつはそれだけのために戦い続けた。そして結果的に、あいつは一度瀕死なって海に落ちた。でもそれを神が救って、あの世に連れていくのか、戻るのか聞いていた。

「……人ってよ、初めてのことはなんでも怖いし、躊躇うよな」

「ええ、そうね」

「死ぬのも、もう経験しちまった……もう、怖くねえ」

「それは良いことではないわ」

それでもあいつは、こう言った。

「俺が死んで救える命があるんなら……それで本望さ」

その笑みは、何故か知らないけどかっこよかった。偽善やかっこつけなんかじゃない、本気でそう言っていた。そしてあいつはもう一度、その異形な化け物に挑む

「ガンダムエクシア、神谷迅……未来を切り拓く！」

その力で今度こそ、あいつはその異形を倒した。でもその後も変わらずあいつは戦った。なのにそれを世界は理解しない。それどころか、あいつは汚名を着せられた。

「神谷迅！次元犯罪者として拘束する！」

あいつは逃げ回り、仲間を敵に回してまでも、その本心を貫いた。そしてそれを理解した人間が仲間になって、大きな渦として動いた。戦って戦って、そして怪物にもう一度挑んだ。セイバーと同じ約束エされた勝利の剣を手に、怪物を見据えていた。

「……よう紅、ケリつけに来たぜ」

私はそこで目を覚ました。

「あっちゃあ・・・やっぱりこれアイツの記憶か・・・サーヴァントとマスターは霊的に繋がっているからこんなこともあるんだろうけど・・・」

それにしたってアイツは馬鹿だ。力つてのは自分自身の望みをかなえるためのもの。神はそのつもりであいつに力を与えたのに、一度も自分のために使わなかった。だからこそアイツは利用された。

「英雄のなりそこない・・・か」

迅がそう言っていた。英雄とは人々を導く光、反英雄は悪によってかえって全を明確にし、世を救った者。あいつはどちらにも属さない、言うとおり・・・なりそこないだ。

「はあ・・・まいったな、これじゃああいつと合わせる顔がないわ」
そんなことを呟きながら水を飲んでみると、侵入者を確認する。この魔術師の家に侵入者がきた。結界をかいくぐってくるなんて、相応な実力者。私は外へ出てそれを確認する。気配を感じ、私は身を隠した。

「こんな星が綺麗な夜に何の用だ？戦いに来たわけでもねーだろ・・・
・・・キャスター」

(キャスター・・・の幻影!?)

「単刀直入に言うわ・・・神谷、私と手を組みなさい。フフ・・・」

考えてもみるがいいわ。現在私の元には3体ものサーヴァントが結集しているのよ。貴方はこの圧倒的なアを埋められやしない。違つて?」

「・・・はっ、確かにそうだな・・・ついさっきまで」

・・・!

「お前は地の利にたけた柳洞寺を失った。その様子からしてセイバーはまだ堕ちていない上、アサシンは柳洞寺から動けない・・・そして幻影がここに来たということは貴様自身も負傷している。そして柳洞寺を奪還しようにもバーサーカーの目が光らないわけがない。お前はイリヤに目の敵にされているからな」

「・・・」

「つまり貴様は今単騎の丸裸というわけだ。そんな貴様を討つなど容易い・・・」

「チ・・・そういう貴方はどうなの神谷・・・貴方一人でバーサーカーを倒す手立てがあるというの?この聖杯戦争を制し、聖杯を手にするためには彼奴の攻略は必須。そのために我らが手を組むのは悪い話ではないはず!聖杯は万能の竈。それを手にすればこの忌まわしい『英霊』というくびきから解放されることも可能だわ!」

私はハツとする。キャスターのいうのは恐らく世界との契約。英霊になった大小のことだ。迅も私に呼び出された以上、なんらかの形で世界とつながっている。

「あの忌々しい『世界』との契約!我らを縛り虫けらどもの不始末

の尻拭いを強いる劣悪な呪い！幾度となく利用され使い捨てられてきたわが身の不幸を貴方は呪わないの！？聖杯を手に入れ、のうのうと我らにおける「救い」を享受する人間どもに復讐したいと思わないの！？神谷！」

一時の静寂が訪れる。そして迅が口を開いた。

「・・・キャスターよ、それは本当に貴様の望みか？」

「何？」

「貴様の誘いは普通の反英霊なら乗るだろう・・・だが、貴様自身それを望んでいない。くびきを外すのには、別の目的があるようだな」

「何を根拠にそんな・・・」

「いったいどうということ・・・？」

「貴様は幾度となく、単身で俺達に挑んでくる。セイバー奪取、そして俺への勧誘・・・それ以前の襲撃も全て、幻影などを使ったものだ。貴様はマスターを前線に出させたくないと見える」

「っ・・・！」

「そして貴様に答えよう。答えはノーだ」

「なんですって!?!」

「・・・確かにこの世界の呪縛を放つには悪い話ではない。だがそ

の呪縛とやらのおかげで、俺は凜とめぐり合えた」

・・・!

「俺はそれに感謝し、そしてあいつのために戦っている」

「あんな小娘のため？ 仮にも英霊があんな小娘のためになど・・・」

小娘小娘って・・・あの女あ・・・

「確かにあいつはまだ幼い、心も体も・・・だが、その気高き魂は、誰よりも魅かれるものがある。そしてあいつの願いは俺の願いでもある。『魂喰らい』でこの街の人間を脅かす人間とは組まない。そうそうに立ち去れ、キャスター」

「つく・・・後悔しても知らないわよ」

ほっ・・・迅は裏切らなかつたわね。

「凜!」

ええ!?! ば、ばれてた!?!

「キャスターは相当焦ってるぞ、今が好機だろうな」

「・・・」

なんて言えばいいのかな・・・

「迅、あんた・・・」

「ふふっ、どうだ？俺なりになかなかだったんだがな。あいつを追
い払った俺の口上は」

「なっ……」

私は言われて、顔が一気に紅くなった。

「バ……バカッ！そんなこと言ってるんじゃないわよ！」

「だな、もうあんまり時間もない。急いだ方がいいな……セイバ
ーが配下になるのも時間の問題だ。奴を倒すのには絶好の機会……
いけるか？」

「当然！」

（そうね迅……ちよつとでもアンタを疑った私が馬鹿だった。キ
ャスター……次の戦いで決着をつける！）

迅side

俺たちは現在山中を歩く。どうやらこの先の廃屋に葛木とキャスタ
ーがいるらしい。

「俺がキャスターを足止め、凜とライダーは葛木を倒す」

「分かってるわ、ぬかりはないもの」

「そしてライダー、葛木の始末はお前に任せる」

「わかりました」

こうして、作戦が開始される。ライダーはまだキャスターが知らない。なので霊化して、凜と行動する。

「お前の相手は俺だ、キャスター」

「つく！」

「マイマジックスキル・マジステル！」

フラグランセオカンス
紅き焰！

「魔術・・・！」

「残念、魔法だ！」

さらに攻撃をしようとするが、それはセイバーに防がれる。

「セイバー！？」

「ジ・・・ン・・・」

令呪に抵抗をしてはいるが、体が追い付いていない。

「ゼロ！」

『チェーンバインド』

バインドで固めても、数秒で破られる。これが契約を果たしたセイバーの本領か……。さらにキャスターの魔術とは……

「何とも手ごわい……」

凜side

「このまま一気に行くわよ、ライダー」

「ええ凜………！凜、下がりなさい」

私はライダーに抱えられ、上から飛来する攻撃を避ける。そこには白い化け物がいた。

「……どうやら、竜牙兵ではないようですね……凜、一人でできますか？」

「任せていいのね？」

「ええ、もちろん」

こうして私はその場をライダーに任せ、葛木を追った。

迅side

「つく！」

「ほっほっほ！さあセイバーやりなさい！」

「ぐうう！」

「ちい！」

俺はゼロを構えてその攻撃を防ぐ。ブレイドのマツハを見切るほどだ・・・ブレイドは通じないならクロックアップでも見切られる。カブトの薄い装甲で戦えばひとたまりもない。

「・・・ゼロ、この状況を打開するとしたら？」

『恐らくは、あれしか』

「・・・原作と同じか。だがこちらにはライダーがいる。ならいけるか」

「そんなものなの？神谷」

仕方がない・・・

体は剣で出来ている

俺が歌を始めると、襲いかかろうとするセイバーが後退する。

「なに？」

幾たびの戦場を超えて 不敗

彼の者は常に独り

剣の丘で勝利に酔う！

「この詠唱は！？世界が侵食されてゆく！これはまさか・・・セイバー！神谷を止めなさい！」

今更止まるか・・・！

「待て」

そこに第三者の声が聞こえた。この声・・・まさか！？

「その必要はない」

「宗一郎様！」

ば、馬鹿な！？

「待たせたなキャスター・・・お前に言われた通り、生かしたまま連れて来た」

「凜・・・っ！？」

バカな・・・ライダーがいたはずだ・・・何故！？

「(迅・・・)」

「(ライダー！？)」

「(すみません、白い怪物に手間取っています。そちらの首尾は・・・)」

・・・つく、白い怪物、オルフェノクかなんかだろう。紅のやつ！
ことを運ばせない気だな

「(ライダー、すぐに離脱しろ。士郎の家で待機。以後パスはするな)」

「(・・・了解)」

こうしてライダーとのパスは切った。

「さあどうするの？神谷」

凜は葛木に肩を壊され目を覚ましている。ここまでか・・・だが、チャンスがないわけじゃない。なら、ここは従うしかないだろう

「わかった、条件を飲もう・・・ただし」

「なに？」

「数分の間、凜と二人きりにしてくれ」

・・・最後の策だ。原作通りに行くのなら、後はあいつがなんとかするだろう。

「いいわ、3分待ってあげる」

△ カかお前は

「凜、大丈夫か」

「・・・なんとかね」

見張られているのは仕方がない。

「機会を見て逃げる。凜」

俺は凜を抱きしめる。

「なっ・・・ちよつと迅！」

「すまん、俺の力不足だ」

言いながら俺は凜の肩を治し、ゼロをポケットに忍ばせた。これは凜もわからないようにしている。キャスターにばれるとまずいからな。

「そんなことないわよ・・・ありがとう」

「あとは士郎がなんとかするだろう。頼んだぞ」

こうして、3分は終わった。

俺の体に『破戒すべきすべての符』が突き刺さる。これで令呪は消え、キャスターのものとなった。そしてキャスターの指示によってセイバーが襲いかかる。凜を始末しようというのだ。

「凜！逃げろ！」

俺が叫ぶが間に合わない。その時だった。凜を何かが庇う。それは
士郎だった。

「遠坂！しっかりつかまってる！」

士郎が崖の下に落ちて行った。・・・後は頼んだぞ、士郎

第十二話「迅の過去、そして敗北」（後書き）

秋風「ということでキャスター戦も中盤です」

迅「とりあえず、次回は？」

秋風「おう、ほとんどが凛sideだな、さらにいうとお前の出番は次はないと思う」

迅「まじか・・・」

秋風「てか、Fateのゲーム中古で買おうと思ったけど高い！」

迅「そりゃ人気ゲームだからな」

秋風「結構似てる感じで書くかも」

迅「何が」

秋風「他の小説のと」

迅「許可とれよ」

秋風「あい」

迅「次回、第十三話『反撃の一步、新たな力』ではまた」

第十三話「反撃の一步、新たな力」(前書き)

新デバイス登場です

第十三話「反撃の一步、新たな力」

凜side

私は衛宮君と崖の下に落ちて、目を覚ました。そこは衛宮君の背中の上だった。つまり、私はおぶられていたのだ。

「どうやらキャスターたちは追ってこないみたいだな。正直助かった。今戦いになったらそれこそ為す術がないからな」

「ちよ、ちよっと!」

「おい遠坂」

「降りしてよ、自分で歩けるから」

私は衛宮君から降りて立ち上がる。でも力が入らず、その場にへたり込んでしまった。

「あんまり無理すんなよ。ずいぶん激しい戦いだっただらう? ちよどいいや、少し休んでいこう」

「衛宮君・・・」

その後私は衛宮君を怒った。何故無関係の衛宮君がここに来たのか、そして何故あんな危ないことをしたのか? 私は説教して、涙が流れた。私が男の子の前で泣くなんて、ホント不覚・・・!そして衛宮君は私に言った。前回の聖杯戦争の場所が自分の家のだ真ん中で、そして衛宮切嗣に助けられたこと。そして、自分に協力してほしい

ことを。私はそれを了承した。

「今度はしっかりと自分の仕事してよね」

「遠坂・・・！」

「おう、ようやく結論が出たか？」

そこにいたのは蒼いスーツに槍を持った男。ランサーだった

「まったく、話が長えんだよテムエら・・・待ちくたびれて寝ちまうところだったじゃねえか、なあ？」

「「ランサー！？」「」

「くそっ！こんな時に！」

私は思いつきり魔術をランサーに放つ。

「うわっどー！」

「ちー！」

「待て待て待て！別に今すぐ殺りあうつもりはねえよ」

この後ランサーは私達に協力すると言ってきた。4体ものサーヴァントが結集しているのなら、残ったもので協力すればいい。ランサーのマスターはそういう考えだと示した。私達は衛宮君の家につき、ランサーは霊体化して消えた。

「……そろそろ良いわね、ライダー」

「え!?!」

「ここにいます、凜」

そこに現れたのはライダーだった。どうやらしっかりと作戦を失敗を理解し撤退していたらしい。

「ど、どういうことだ!?! だってライダーはセイバーが倒したんじゃない……」

「確かに私は死せる運命でした……しかし私は迅に助けられ、迅のサーヴァントとなったのです」

「何故か知らないけど、あいつも『破戒すべきすべての符』を持っていたのよ」

「まさか、ライダーが生きてたなんて……」

「シロウ、私はもうシンジのサーヴァントではありませんので、その辺をご理解いただけると助かります」

とりあえず、これでこちらにサーヴァントは二体……対策も立てなきゃいけないし……って

「ライダー、あんた迅のサーヴァントよね」

「ああ、そのことですか? 私に一つの命令が令呪で発動しています『もし自分が凜と敵対する、もしくは令呪を奪われることがあれば、

凜と共に行動し、その状況を打開せよ』と

「なるほどね・・・」

なら問題はないか・・・後は、どうするか

『凜！凜！』

「え？」

スカートのポケットから声がした。突っ込んでみると、そこには迅のデバイス『ゼロ』がそこにいた。

『よかった、やっと出れました』

「ゼロ!?!」

『すみません凜、私は迅から離れると強制スリープになるので、再起動に時間がかかりました』

「どうしてゼロがここに？」

だって、迅のデバイスなんじゃ・・・

『迅は凜に抱きついたとき、キャスターに気づかれぬよう私を入れました。一時間ほどで再起動をできるように』

「そうだったの・・・」

あいつ、ちゃんと考えているのね。

『それより凜、今のうちに宝石にあなたの血を入れるなり、士郎の力を知ることもしなければいけません』

「そうね、色々やることはあるわ」

こうして、私達は行動を移すことにした。

それからしばらくして、私は衛宮君の体に宝石を入れて魔術回路を矯正させた。当然それは想像絶する痛み。気を失ったのでベッドに寝かせた。

「さて・・・これからどうしようかしら」

『凜、とりあえず別荘に行きましょう』

「どうして？」

『貴女に託すものがあるからです』

私は言われるがまま、別荘に赴いた。誰もいない別荘、その部屋の
一室。

『その箱です』

箱を開けた。そこには紅い私のペンダントが入っていた。

「これって・・・」

『 起動認証を確認』

「え!？」

突然声が聞こえる。よくよく考えれば私のペンダントは迅が見つけてくれた。ってことは？

『これはあなた専用のデバイスです』

「私の、デバイス？」

『コードを入力してください』

え、え?どうしたら・・・

『まずは彼女の名前を決めてください』

「な、名前・・・えっと、えっと・・・ルビー!」

『認証を確認、起動・・・よろしく願います、マイマスター』

『あくまでも彼女は貴女のサポートをするデバイスです。私のように剣にはなりません』

サポート？

『戦闘において最も完璧な魔力配分、そしてキャパシティを超えた際の貴女へのダメージ軽減・・・その他、魔術解析などをするデバイスです』

「迅が、私にこれを？」

『万が一ということがあったのでしよう。貴女がよく無茶するのを、マスターは心配していました』

「迅……」

なによ、あいつが一番無茶してるくせに……

『凜』

「何？」

『迅が貴女に私、そしてルビーを託した意味、わかりますね？』

「……ええ、最後まであきらめるなっただけでしょ？」

『流石は私のマスターのマスターです』

……どんな戦いになろうとも、私はあいつを救う。私のところへ戻ることがなくても、キャスターからは解放する。待ってて、迅！

翌日、衛宮君が目を覚ました。意外だった。一日で回復するなんて。その後料理をランサーが食べていて、収集をつけるのが面倒だったけど、ひと段落。そしてランサーの話では、キャスターが教会を強襲し、綺麗が行方不明だという。あいつのことだから死にはしないでしょうね。一方の衛宮君は強化が成功したのは良いけど、ランサーにそれでは死ぬと言われて特訓をしている。

『マイマスター凜』

「どうしたのルビー」

『私には彼が理解できません。魔術をかじっただけの彼がサーヴァントに勝てるはずもない。なのに何故彼は挑むのですか?』

・・・そうね、あいつは無茶で無謀で、いつも無駄で無意味で無様

確かに無駄かもしれないけどさ、でもそれは挑戦をやめる理由にはならない

「・・・ルビー、あなたはまだまだだね」

『はい?』

「あいつは馬鹿が付くほどのお人好し・・・でも、あいつには最後まであきらめない根性がある。私は信頼してるのよ」

『・・・兄上、私は未熟でしょうか?』

『さあ?まあ凜としてはマスターと士郎、どちらを取るかですけどね』

「ばっ、何言ってるのよ!」

『知ってますよ?抱きつかれた時顔真っ赤だったの』

それはいきなりだったからでしょうが!

『どうせ見たんでしょう？マスターの過去』

「どうしてあんたが・・・」

『そりゃ、知ってますよ。私とマスターもリンクしてますから』

迅の過去・・・か

「ねえゼロ、聞いてもいい？」

『なんですか？』

「迅はどうして・・・あそこまで自己犠牲で頑張るの？」

あいつは自分を犠牲にして、それでもあの夢で出て来た女の子達を守っていた。

『簡単な話ですよ、凜』

「え？」

『マスターも士郎と同じ、お人よしなんです』

「・・・」

お人好し・・・か

「おらぁ！どうした小僧！」

「っくー！」

士郎がとっさに二刀に構えて戦う。型が滅茶苦茶ね・・・でもどうしてかしら、士郎が剣を使うと、迅のイメージと重なる。

「こっからは本気で行くぜえ！」

ランサーもランサーでよくやるわね、まったく・・・

この後士郎はランサーに一撃も当てれずに終わった。でもなんとか型はまともになったし、葛木に対応はできるだろう。今私達は作戦会議をしている。

「おいおいおい！いまさら作戦会議もクソもねえだろ？」

・・・こいつ、脳みそ筋肉なの？

「坊主が葛木の相手をして、嬢ちゃんがキャスターを討つ。そんなもって後の二人は俺が止める。それだけ決まってるじゃ十分じゃねーか。あとはもうなるようにしかならねえだろ」

「あのねえランサー、そういうわけにもいかないのよ。4対4・・・数的には互角でも、向こうは全てサーヴァント、こっちは二人が人間。不利なんだからちゃんと対策を立てないと」

『そうですよ、そんな詰めが甘いからゲイ・ボルクを盗まれて襲撃されるんですよ』

「つてめ！なんでそれを！」

『史実ですから』

ああ、そういえばクーフリンって最後王妃メイブを逃がしてそのメイブが恨みを持つ戦士を焚きつけたんだっけ。

「まあ、それはともかくとして、あなたの宝具は一度セイバーに避けられているでしょう。万が一のことが合った場合は貴女はセイバーに対して分が悪いと私は考えるわ」

「それを言えばセイバーの宝具だってネタが割れてんだろ。あんなの喰らいさえしなければ屁でもねえ。いくらでもやりようはあるってもんさ」

「しかし、凜、私はどうすれば？」

「ライダーにはこの前みたいな怪物の相手をしてもらっわ」

そう、あの紅という男が妨害しているとすれば・・・私達が不利になる。

「あのこの前屋上にいた男か？」

「そうよ、あの男・・・紅と因縁があるの。だから恨みがあるんでしょっね」

『紅に関してですが・・・』

「何よ、ゼロ？」

『紅は迅の能力を90%はコピーしています。神の本棚と同等の力

です』

化け物ね・・・

『そして後の10%は迅とは違い『闇』を生み出す能力。貴方達が
いう化け物を召喚します』

「対策は？」

『ありません。同じ能力を有し、オリジナルである迅だけが対抗で
きます』

「・・・それより嬢ちゃんよ、いいんだな？場合によっては
あいつを殺すことになっても」

「なっ・・・どういうことだよ遠坂！」

「構わないわ、もとより覚悟のうえよ」

そう、私は口ではそういうけれど、多分・・・心のどこかで、迅に
は死んで欲しくない、そう思ってる。

「何言ってるんだ！あいつを取り戻すんじゃないのかよ！」

「仕方ないのよ、そんなことを言ってられる状況じゃないし、戦力
を詰められればそれで」

「ゼロ！お前もそういうのか！？」

『凜がそう言ってるんです。しかたありません』

衛宮君は納得いかないようだけど、きつと大丈夫、あきらめるなど
言ってくれたあいつならきつと・・・

『それより士郎、あなたに確認することがあります』

「な、なんだよ・・・」

『あなたはセイバーを救いたいのですね？』

「もちろん、そのつもりだ」

まあ、そのために動くわけだし・・・

『その場合、最悪葛木とキャスターは死にます。いえ、殺さなければいけません。貴方にその覚悟はるのですか？』

「どっついうことだ・・・？」

『先に言っておきましょう、破戒すべきすべての符を持つことから
キャスターの正体はコルキスの女王、自らを捨てた夫に復讐するた
め我が子までをも手にかけたという希代の悪女です』

コルキスの女王・・・ギリシャの悲劇のあの・・・

『そんな彼女を殺さず、逃がしてみなさい・・・この街は一瞬で灰
と化すでしょう』

「っ!」

『そして葛木・・・凜も聞いたでしょう？彼が殺人鬼であることを』

「ええ、そう言っていたわ」

『士郎、貴方の正義は立派です。しかし、理想だけでは何もできません。人を生かすことは、殺すことをよりも難しい。ランサーはその点をよくわかっていますね？』

「ああ、いくつも戦場を渡ってきたからな」

その後、作戦会議は続いた。だけど、衛宮君は暗いままだった。

第十三話「反撃の一步、新たな力」（後書き）

秋風「ということ、新デバイスのルビーです。プリズマイリヤを知ってる人はルビーを知っているでしょうが、あれとはまた違うのであしからず」

ルビー

インテリジエントデバイス

迅作成のインテリジエントデバイス。武器形態とB Jは存在せず、凜の魔術をあくまでサポートするだけのデバイス。ゼロと兄弟機で妹に当たる。世界の歴史が組み込まれているので、そのつと英霊たちの失態をつくドSな面を持っている。待機形態は凜のペンダントと同じ。魔術回路を専門に扱うので、普通のデバイスとは違う。迅が凜だけを適合者に行っている。

秋風「こんな感じ」

迅「とりあえず俺が作ったからこそ、凜が動かせるってことだ」

秋風「さて、次回より迅が出てきます」

迅「やっとか」

秋風「たかが一話分だろ」

迅「されど一話分だ」

秋風「あそ」

迅「次回、第十四話『願い』ではまた」

第十四話「意外な結末」(前書き)

ということでキャスター戦です

第十四話「意外な結末」

キャスト side

教会は抑えた。セイバーも徐々に堕ちかけている。バーサーカーを倒すのなら、もうすぐチャンスが訪れる。でも一つ気にくわないのが……

「なんであなたがここでお茶を飲んでいるの!」

そう、先日従えたクラス無きサーヴァント、神谷迅だった。

「俺がお茶飲みたいから」

「理由になってないわよ!」

門の敬語を命令したのに、なんでこいつはことごとく令呪に逆らってるわけ? まったく意味がわからない!

「あなたは何者なの? 魔力の矯正をかいぐるなんて……」

「内緒」

言いながらお茶をすする。ほんと、殺してやりたい! でも……バーサーカーを倒すまでそれはできない。

「まあ落ちつけ、これでも飲めば落ちつくぞ? 最近ワインばかり飲んでるだろ、お前」

「余計なお世話よ」

「んゝ・・・腹へったな、キャスター、何か食う？」

「いらないわ！」

「葛木は？」

「・・・そうだな、和食を頼めるか？」

「あいよ」

宗一郎様！なんであいつにリクエストなんかしてるんですか！

「宗一郎様！？」

「落ちつけキャスターよ、わからないか？アイツはここに来てから、まったく隙を見せていない」

・・・とてもそうには思えないけど

「さらに言えば、あいつの力は未知だ。警戒するに越したことはない」

「・・・わかりました、宗一郎様がそうおっしゃるなら」

「ほい、できたぞ」

和食が並ぶ。寺の精進料理とは違い、ふんだんに肉や魚を使ったものだ。刺身に天ぷら、肉じゃが、随分と作るわね・・・

「ほう、旨いな」

「だろ？」

宗一郎様も隙を見せてはいないけど、なんだか心配で怖い。

「ほらキャスター、オメーの分もあるんだよ」

「・・・一応、もらっておくわ」

口に入れると、うまみが広がった。おいしい・・・すごく、悔しいけど

迅side

うん、久しぶりに作ったけど上出来だな。そういえば・・・

「葛木、おめーここ最近何食ってたんだ？」

「主に缶詰類だ」

「・・・料理は？」

「できん」

なるほど・・・

「んじゃキャスターが作ればいいじゃん」

そう言うと、葛木が固まった。

「……………それは、勘弁してもらいたい」

「キャストター？」

「う、うるさいわね！料理なんて作ったことないのよ！」

まあ、王女だもんね

「ごっそさん、さて……セイバーにも持っていくか」

「拘束を外せつてこと？」

キャストターが俺を睨む。

「別にくわせなくてもいいけど知らんぞ？セイバーが戦う時に腹が鳴って倒れたりしたら」

「……………そんなに？」

「あいつは食いものに関しては執念深いぞ」

腹ペコ王の異名を持つてるしな

「わかったわよ、好きにきなさい」

こうして、俺は地下へと降りて行った。

「ゲホッ、ゲホッ、すみません」

「ったく・・・お前は」

とりあえずセイバーも元気になったので、飯を片づける。

「セイバー、もうすぐ士郎が助けに来る。頑張れよ」

「はい、迅」

さて、俺も準備しなくちゃね・・・

しばらくして、分身から連絡が来た。ランサーが来たと

「オーライ、行こうか『フォルテ』」

『・・・了解した』

俺は再び戦場へと赴く。

外に出ると、ランサーがいた。

「はっ、さっきのは幻影かよ」

「ふっ・・・分かってるくせによく言っよ、ランサー」

「てめえとは一度やり合ってから本気でやってなかったな・・・さ

あ、始めようぜ！」

「ああ、そうだな・・・フォルテ、起動開始」

『了解した、武装形態』

俺は黒いバリアジャケットに茶色いマント、そしてバイザーが装着される。

「ほう、ゼロつての以外にも持ってつやがったか」

「最近作ったのさ・・・対サーヴァント用デバイス『フォルテ』

」

『戦闘モード開始、敵はランサー・・・武装『ダブルブレイド』』

フォルテは敵と同等の力を持った武器をストックの中から作り出す。その双剣を持ち、俺は構えをとる。

「俺に勝つつもりか？」

「フォルテにはあらゆる敵に勝つためのシステム『ゼロシステム』が備えられている。あらゆる状況、環境でもっとも高い確率の選択肢を瞬時に決定する」

「おもしれえ！勝って見る！」

こうして、俺とランサーの激闘は始まった。

凜 Side

「・・・セイバー・・・つて」

なんか知らないけど、セイバーが幸せいっぱい眠っている。これならいけるわね。

「今のうちにキャスターを・・・」

「あら、私に何か用？」

キャスターが突然現れ、私達に魔力を放った。

「ルビー！」

『オーライ、凜』

魔力を出力して防御する。宝石による魔力で防ぐ。衛宮君は葛木の相手をしている。これならいける・・・！

「ほらほら、どうしたの？」

次々と撃ちだされる魔術。私は宝石を使って防ぎ続ける。

「さて、残りの宝石はいくつかしらね？10？20？案外次が最後だったりしてね」

つく、確かにキャスターの言うとおり、宝石は残り6個。残り6個が底を突く前に決着をつけないといけない。ルビーの補助もそう長

くは持たない。いや・・・これは端から不利な戦いだつた。でも違う・・・絶対不可能と思わせるその状況こそが、逆に私達に正気を呼び込む

「ふふ、さあどうしたの？守るばかりでは負けてしまつわよ？」

オーケー・・・見せてあげるわ

(隠したの戦いつてやつをね！)

F u n f D r e i S e c h s E n t f e s e l u n g !
5番 3番 6番 一斉解放！

「なっ!？」

J e t z t n o c h V i e r V e r e i n i g u n g d e
r K r a f t !
加えて 4番 相乗！

『プロテクション展開、魔術回路保護』

これで、キャスターに届く！

「ふふ、私も甘く見られたものね・・・」

そ、そんな・・・

「あれだけ大口を叩いておいてまさかこの程度とは、あきれてものも言えないわ。貴女、もう消えなさ」

なんてね！

「イッ！？」

私は思い切り肘をキャスターの鳩尾に叩きこむ。

「ぐ……え？」

「かかったわねキャスター、知り合いの神父にちよつとした使い手がいたせいでね、私ってば対術全般にはそれなりに覚えがあるわけ。体に強化だけじゃなく、迅が託してくれたルビーの力で強化がさらに二乗する。今時の魔導士には護身術も必修科目よ！」

そう言っつて私は拳と蹴りをかまし、キャスターを吹き飛ばした。

迅side

「……」

「どうした、神谷」

「どうやら、キャスターの監視が消えた」

こっちに魔術を回す余裕がなくなつたんだな。

「おい、どづいつつもりだ、獲物を収めやがって」

「………感じないか？ランサー」

「あん？」

「この、闇の気配を……」

来たな、あの野郎……

「勝負は預ける、じゃあなランサー」

「あ、おい！待ちやがれ！」

俺は急いで地下へと向かった。間に合うといいんだが……！

ライダー side

私はずっと身をひそめています。ゼロが「大丈夫だ」と言うのでここにいますが、葛木はもはや人間離れしていますね。そしてセイバ―もセイバーで無茶をする。命令に無理やり背き、自らの体に剣をつきたてるなど………

「最後のとどめは、私が代わりにさしてあげてもよくてよ？」

ここまでですね、行かなければ……！

『待つてくださーいライダー』

「え？」

「アア、ソレガアトスウビヨウハヤケレバナ」

そこに大量の魔力弾が叩きこまれる。これは迅の……いや、もつとまがまがしい……。これはまさか！

「ヒサシブリダナ、シヨクン」

最悪の敵、紅がそこにいました。

迅side

俺が駆けつけると、そこには血まみれの土郎と、血まみれのキャスター、そして葛木がいた。

「つく！凜！」

「迅！？」

俺はすぐにケアルガを3人に当てる。

「動けるか、セイバー！」

「な、なんとか……」

どうする？どうすればいい……？

「オヤオヤ、ヒーローガオクレテトウジヨウカ？」

「紅、テメエ・・・」

「ワタシハキミノミカタノツモリダガ？ホラ、キャスターヲシマツ
シタ・・・ダガオカシイナ、キミハドウシテカノジヨウチヲタスケ
タ？」

・・・

「てめえに教えることなんざ、ねえ」

フォルテを大剣にして構える。

「・・・ホンライナラ、セイバーノタマシイトキャスターノ
タマシイヲイタダクツモリダツタンダガ・・・シカタガナイ、キヨ
ウハヒクトシヨウ」

こうして紅は消える。だがそこからアリゲーターイマジンが現れる。

「っち！」

555 Standing by

「おい！葛木と士郎を抱えて逃げろ！」

「わ、わかつたわ！」

「ライダー！キャスターを連れてけ！」

「はい！」

「変身！」

C o m p l e t e

仮面ライダーファイズとなり、アリゲーターイマジンに躍りかかる。

「おおおおっ！」

「があああっ！」

つく、強い・・・あの野郎、強化を施してる。仕方がない・・・

C o m p l e t e

俺はアクセルメモリーを引き抜き、装着した。仮面ライダーファイズアクセルフォームとなる。

「一気に片付ける」

S t a r t u p

スタータースイッチを押すと同時に、俺はファイズポインターにミッションメモリーを入れておいた。

R e a d y

一気に飛びあがると、ファイズフォンを開いてENTERを押す。

E x c e e d c h a r g e

「おおおおおおおおおおおおおっ!」

「ぐがああああああああ!?!」

連続のクリムゾンスマッシュがヒットする。

Three Two One Time out Refor
mation

ファイズの紋章が浮かび、アリゲーターイマジンが爆発した。

「・・・よし、脱出だ」

こうして俺は、教会を後にした。

キャスター戦 結果

部外者による攻撃によってキャスターとそのマスターが重傷、よって引き分け

第十四話「意外な結末」(後書き)

秋風「つてことでキャスター戦でした」

迅「なんか、すごいご都合主義じゃね？」

秋風「気にすんな」

迅「別にいいけど」

秋風「さあ、クライマックスはまだ遠くても、楽しんでくれ」

迅「・・・そーだな」

秋風「ではw」

迅「次回、第十五話『秘めた想いと願い』ではまた」

第十五話「契約と少女の想い」(前書き)

ということで、今回から話がずれません。もう原作崩壊です

第十五話「契約と少女の想い」

戦いは終わった。俺達は士郎の家に戻ってきた。俺は凜に『破戒すべきすべての符』を突き刺してもらい、契約を戻した。セイバーにも同じことはしたのだが、原作通り、魔術回路は安定していない。そして次の日の早朝、キャスターが目を覚ました。

「ここは……」

「よう、目が覚めたか？」

俺が入ると、警戒するキャスター

「おっと、妙な真似はしないでくれよ？」

言いながら手だけをバインドで止め、体を起こした。

「……なるほど、私は負けたのね」

「ああ、そうだ」

「宗一郎様は……？」

キャスターがうつむく。まあ、予想は最悪の予想をしているのだから。

「一応、命は取り留めた。数日すれば目が覚めるだろう」

「ほ、本当に……!？」

「俺の力なら、すぐに目を覚まさせることができる」

「お、お願い！宗一郎様を……」

俺はそこで手を出し、キャスターの目の前につきだす。

「なら、条件がある」

「じよ、条件？」

俺は人差し指を出す。

「まず、この聖杯戦争から降りること」

次に中指を出す。

「次、今後一切魂喰らいをしない」

そして薬指を出す。

「最後、この先俺と契約し、協力して紅を討つこと」

「それで、本当に宗一郎様を？」

「ああ、嘘じゃない」

「分かったわ。あなたの条件を飲みましょう」

こうして契約し、葛木の意識を取り戻させた。

「キャスター……」

「ああ！宗一郎様！」

キャスターは泣きながら葛木に泣きついた。そして俺はその後の説明をした。

「……一つ聞きたい」

「なんだ？」

「何故お前は、俺を助けた？」

まあ、当然だわな。まあ、今後の戦力のためにキャスターを助けたっていうのもあるけど……

「お前、キャスターを紅の攻撃から守ったんだろ？」

「……ああ」

「それを聞いてどうもな、お前と俺が似てるように見えた。だから助けた……それだけさ」

こうして俺はキャスターと葛木を帰らせた。今後何か起きたときのみ、キャスターは俺が呼び出すことにした。

「迅」

「凜……よく頑張ったよ、今回は」

「・・・・・・・・私、駄目だった」

「え？」

突然暗くなる凜

「アイツが目の前に現れた時、別に宝石のストックはまだあった。ルビーもあった、ライダーが背後にいた。それなのに・・・・私は、動けなかった」

「凜・・・・・・・・」

「私は、弱い・・・・魔術を覚えて、気丈にふるまっても私は・・・・」

はあ・・・・

「よしよし、凜」

俺は慰めるために、優しく凜を抱きしめる。

「あつ・・・・・・・・」

「大丈夫、強くなればいい・・・・これから先、な？」

「迅・・・・」

まったく、手のかかるマスターだ

「まだ泣くのは早い。桜のこともある・・・・そして、バーサーカー」

のことも」

「・・・そうね、泣くのは、まだ早いわよね！」

元気を取り戻した凜は笑顔で台所へと向かって行った。俺は外に出た。魂喰らいがなくなったので、街も落ち着きを取り戻すだろう。

「・・・ん？」

そんな街の中、一人の少女が歩いていた。銀の長髪を揺らし、紅い瞳には強い意志を秘めた、幼い少女。

「イリヤスフィール？」

「・・・あ、クラスなし」

出合いがしらこれですか

「・・・・・・」

俺はゼロとフォルテに手をかける。

「ああ、大丈夫だよ？ここでは戦わないから」

無邪気な笑みを作るイリヤ。こんな少女がバーサーカーを従えろとは、本当に恐ろしい。

「ねえ、クラスなし」

「クラスなしじゃない、神谷迅だ・・・イリヤスフィール」

「ふーん、じゃあ迅って呼ぶね。私のことも『イリヤ』って呼んで？」

「わかった、イリヤ」

「ねえ迅、ジンは何をしてたの？」

「……………何と言われてもなあ

「ちよつとぶらぶらとな……………」

「そうなんだ！じゃあ街を案内してよ！」

無邪気に言うイリヤ

「分かったよ、お姫様」

こうして、俺はイリヤを連れて街を歩くことにした。

「ねえ迅！あれは何？」

「あれ？ああ、あれは『ボーリング場』って言ってボーリングを楽しむ場所だ」

「ボーリング？」

ああ、そっか……………お姫様を知るわけないわ。確かこの子自動販売機も知らないんだっけ？

「スポーツだよ、球技だ」

「へえ、おもしろいの？」

「面白い人には面白く感じるだろ」

「じゃあやってみようよー！」

こうして、ボーリング場へと入っていった。

「わあ」

初めて見る光景に興奮気味のイリヤ。金は俺が払い、靴を変えさせる。イリヤがコートを脱ぐと、11巻のあの私服だった。

「で、どうやるの？」

「この鉄球を投げて、あそこのピンを倒すんだ」

一応ガードアールはないようにしているので、倒れるだろ。第一球を投げるイリヤ。その瞬間

「へうっ！」

見事にこけた。周りからクスクスと笑いが起きるが、俺は目をそらして見なかったことにする。そして適当に投げて6ピン位倒して戻ってきた。次は3ピン、合計9ピンが倒れる。

「凄いじゃないか、イリヤ」

「うん」

俺も5、4で倒して9ピンだ。そのうちストライクを取ったりと、イリヤは大はしゃぎだった。

「あー！楽しかった！」

ボーリング場を出て、ご機嫌のイリヤ。次はゲームセンターに目をつける。

「今度あそこ行こう！」

ゲームセンターでもUFOキャッチャーや流行りのレースゲームなど、大いに遊びまくった。

「今日は楽しかったよ！ありがとね迅！」

「どういたしまして」

今は公園でベンチに座っている。イリヤはUFOキャッチャーで取ってあげたぬいぐるみを嬉しそうに持っている。

「ねえ迅？」

「ん？」

「迅はどうして敵の私と遊んでくれたの？」

別に理由はないんだけど・・・

「お前が街を案内しろって言ったじゃん」

「でも、私は隙を見て殺したかもしれないよ？」

さらっと恐ろしいことを言っつなこの娘は・・・

「そんなことしねーよ、お前は」

「え？」

「俺を殺すことより、もっと大事な目的があったんだろ？」

俺が言つと、イリヤは顔を伏せる。

「私が聖杯戦争に参加したのは、お兄ちゃん・・・衛宮士郎に会うため」

「・・・士郎を殺すつてか？」

「初めは、切嗣を殺すつもりだったの」

イリヤは静かに、自分のことを話し始めた。イリヤの父、つまり士郎の義父の切嗣が自分と母親を見捨てたこと。そして自分たちの家を裏切ったこと・・・だから自分はそのために二本を訪れた。そうイリヤは言った。

「・・・なるほどね」

「だから、私は負けない・・・セイバーにも、あなたにも」

「……一ついいか？イリヤ」

「何？」

「お前は、本当は復讐を望んでいないんじゃないか？」

「え？」

最初の違和感が合った。

「最初会った時、君は俺達に襲いかかった。士郎ではなく」

「……」

「心のどこかで、お前は分かっていた。こんなことをしても意味がない。切嗣はもういないのだから」

イリヤは信じたくなかったのだ。切嗣の死を受け入れたくなかったのだ。だから、この日本へと来た。

「だから、お前は士郎の前に現れ、ライダーのことを教えた。キヤスターを討ちに行った。お前は本当は……」

俺はその思っ言うことを口にした。

「本当は、父親に……切嗣に抱きしめて欲しかっただけなんだ」

「……」

「でも、もう切嗣はいない。だから士郎が欲しい、振り向いて欲しい・・・セイバーでも凜でもなく、自分に・・・そして抱きしめて欲しい・・・だから、君は戦い続ける。違うか？」

「・・・迅の、言つとおりだよ」

涙を流しながら、イリヤは言う。

「お父さんは、お母さんと私を置いて、日本へ行った。でも、死んだ時を聞いて思った・・・
どうして・・・」

どうして私を、連れて行ってくれなかったの？

「そして私は知った・・・切嗣の子供の存在」

切嗣のもう一人の子、士郎・・・彼のために、切嗣は日本で死んだ。

「士郎が憎かった、士郎が羨ましかった・・・だから私は聖杯を手に入れるっていう名目で日本に来た。士郎に会うために・・・」

だが皮肉なことに、彼はサーヴァントと戦うマスターになった・・・か

「そっか・・・」

俺はイリアの頭をなで、空を見上げる。世界は、どうしてこんなにも非情なのだろうか

「じゃあ、そろそろ私、帰るね」

「・・・ああ、もうそんな時間か」

いつの間にか夕日が見え始めていた。

「そっだ、はい」

「ん？」

イリヤに紙きれを渡された。

「その記してある場所にね、私が住んでるお城があるの。今度お城に遊びに来て？」

「いいのか？他のサーヴァントと組んでバーサーカーを倒しに行くかもしれないぞ？」

「うっん、兎はそんなことしないって、信じてるから」

「・・・そっか」

「それに、来ても倒すもん」

そう言っつて、イリヤは帰っていった。

「・・・城、か」

今度行ってみるよしよっ。

家に帰ると、何故かキャスターがいた

「ん？キャスター」

「待つてたわ。知らせなければいけないことがあるの」

「知らせ？」

キャスターの報告は、アサシンが倒されたということだった。

「魔力を感じ取ったが、ランサーやバーサーカーではなかった。でも他のサーヴァントはここに集結している」

凜の手札は俺、ライダー、キャスターの3人。士郎の手札はセイバ
ー、そして言峰の手札はランサー・・・そして、ギルガメッシュだ。
となると・・・残りは？

「・・・・・・・・初代マキリ。あの爺だな」

「そうね・・・行くわよ迅、桜を助けに」

「ああ、そうしよう」

こうして、俺と凜は間桐家へ向かうことにした。

おまけ

NGシーン もしもバーサーカーがその場にいたら？

「！」

咆哮を上げ、バーサーカーがボウリング場でボールを投げた。一個ではない、数十のボールだ。そのせいでレーンが抉れたり、ボールが砕け散った。

「……お客様、レーンの弁償を」

「……ボウリングはルールを守りましょう」

NGシーン2 もしもキャスターと葛木が出来ていたら？

「んじゃじょう「宗一郎様あ！」うお!？」

バインドを破り、葛木に抱きつく。

「ああ！死なないで宗一郎様！」

「お、おい……話を……」

「ああ！私達、始まったばかりなのに！家も買って、子供ももうすぐ出来て、新しい生活ができると思ったのに！」

「……恋愛の賞味期限が切れた女の言うことではない

第十五話「契約と少女の想い」（後書き）

秋風「ということ、NGシーンでした」

迅「意味あつたの？あれ」

秋風「何を言うか、最初はあれだったんだぞ？」

迅「マジで!？」

秋風「ギャグ要素満載でやったら流石に後半のシリアスが潰れると思つて」

迅「・・・そりゃそうだ」

秋風「なので番外編として書いたのだ」

迅「次回、第十六話『本当の愛』ではまた」

第十六話「桜」（前書き）

というところで、対話がサムいと言われても頑張ります、秋風です

今回で桜のことにけりがつきます

第十六話「桜」

俺達はすぐに、間桐の屋敷に乗り込んだ。というか、凜が思いつきりドアをぶち破った。いいのか？これ・・・

「ほう、遠坂の小娘か・・・何をしに来た？」

魔力を追って地下室へと突入した。そしてそこには老人、初代マキリ。そして桜がいた。

「遠坂先輩・・・迅さん・・・」

「・・・アンタに聞くことがあるわ、臓硯」

「なんだ？遠坂の娘よ」

「桜に無理やりサーヴァントを召喚させたのはあなたね」

凜が臓硯を睨みつける。桜はそんな凜を見ることができないようだ。

「当然だ、聖杯はマキリの悲願だ・・・魔術を使える者がやるのは事実じゃろくに」

「・・・桜、私はこの冬木の管理者としてではなく姉として聞くわ。貴女は聖杯が欲しいの？」

「わ、私は・・・」

・・・凜は今、管理者ではなく、姉として言った。凜の目は本気

だった。

「話すだけ無駄だ、凜」

言いながら俺は臍硯にゼロを向けた。

「ほう？」

「話し合いなんか俺達にあわねえ、とつとと桜連れて逃げんぞ」

「・・・駄目よ、桜にその答えを聞かなきゃ」

「だそうだ、桜」

「私・・・もう嫌です！ここにはいたくない！先輩を傷つけない！戦いたくない！」

桜が頭を抱えてしゃがみこんだ。その眼には涙が浮かんでいる。

「聞いた通りよ、間桐臍硯」

「ぬ？」

「遠坂の人間として、冬木の管理者として、そして・・・『遠坂』桜の姉として、桜を・・・妹を返してもらおう！」

言いながら凜も宝石を取り出し、戦闘態勢に入る。

「カカカ！悪いがそうもいかん、桜は大切な孫、聖杯を手に入れるのに必要じゃ」

「させるかよ、じじい」

「若造の相手はこいつじゃ、ゆけい！真・アサシン！」

俺の背後に突然ナイフが現れる。俺はそれを避けて、相手を見る。
真・アサシン・・・佐々木小次郎を倒したのはこいつか・・・って
ことはランサーも？いや、ランサーは生きてるな

2日前

「おいランサー」

夜、偵察していたランサーを見つけた。

「なんだ？やるってか？」

「んなわけねえだろ、じゃなきゃとつくに戦ってる」

言っと、ランサーはゲイ・ボルクを降ろした。

「じゃあなんだ？俺も仲間にしようってか？」

「そのまさかだよ、ランサー」

「馬鹿馬鹿しい！なんで俺がお前らと仲良ししなきゃなんねえんだ」

別にそういつつもりじゃないんだけどなあ・・・

「お前、今のマスターには満足してねえだろ？」

「……………」

「言峰綺麗だろ？お前のマスター」

「……………知ってたのか」

言いながら、バツの悪そうな顔をするランサー

「ああ、まあな」

「それで？」

「別に今決めるとは言わない。聖杯を諦めることになるからな。だ
けどお前が最高の戦いを望むのなら……………」

言いながら俺は剣を取り出す。

「俺と契約を結べ」

騎士として剣を交えるのは共に闘うしるしだ。

「……………はん、考えておいてやるよ」

「後、ランサー……………しばらく柳洞寺には近づくな」

「あ？」

「実はな……………」

俺は予知夢という嘘で、ランサーの死について教えた。

「それを信じると？」

「俺の予知は100%当たる」

「用心しよう」

こうしてランサーは消えた。

「真・アサシンか・・・まあいい、倒してやる」

「若造が、調子に乗るなよ？」

この暗い場所じゃ確かにこいつが有利だ。桜のこともあるし、長期戦は不利になる。ならば速攻で片をつけるとしよう。

「悪いがアサシン、一瞬で勝負を決める」

俺はライダーベルトを取り出す。

「変身」

『HENSHIN』

仮面ライダーカブトマスクドフォームとなり、すぐにゼクターフォーンを動かした。

「キャストオフ」

『C U S T O F F』

「ぐおっ!？」

『C H A N G E B E E T L E』

「クロックアップ」

『C L O C K U P P』

俺はクロックアップで真・アサシンをタコ殴りにした。そして……

『O N E T W O T H R E E』

「悪いがお前は仲間にする気になれん……ライダーキック」

『R I D E R K I C K !』

ライダーキックによって、真・アサシンは吹き飛ばされ、ギャグ漫画みたいに地下室の本棚の中に頭から突っ込んだ。

「げばらっ」

『C L O C K O V E R』

「さあ、後はお前だ」

「使えんサーヴァントだ……だがいいのか？ 僕の合図で桜の心臓

やいたるところに埋め込まれた刻印蟲が桜の体を食いつくしても」

「なんですって!?!」

ああ、そういえばそうだったな・・・まあ・・・

「知ってるよバーカ」

俺の分身が既に桜の後ろに立っていた。

「何!?!」

「え!?!」

既に冒険王ビイト登場の鉄壁の盾『クラウンシールド』とよく似た盾を構えた俺（分身）がいた。

「彼の者にありし全ての邪悪を避けよ『ホーリー』!」

白い光が桜を包み込む。冒険王ビイトのクラウンシールドの属性は水だ。そしてその追加効果で魔人の毒を吐きだす。だが、俺がそれをアレンジして作り出した。フォルテのシールド形態。光によってその対外の邪悪物質を体外から出し、消滅させる。桜の中にいた蟲は全て消え去ってしまった。

「む、虫が消えた!?!」

「ば、馬鹿な!」

「間桐臓硯!」

凜が宝石を手に、それを臓硯に向ける。

「眠りなさい！永遠に！」

砲撃が放たれ、臓硯が消滅していく。

「馬鹿な……ワシが……マキリが終わるのか？そんな、ありえん……」

「終わってたのよ、マキリは日本に来た時からね」

「ありえん！ありええええん！」

消滅していく体が、急に黒く光った。そしてそれは強大な化け物に変貌していく。そして地下が崩れ始めた。

「まずい！クロックアップ！」

『CLOCK UP』

分身が消えて、俺は凜と桜を抱えて屋敷の外へと脱出した。

『CLOCK OVER』

俺は凜と桜を降ろす。すると、臓硯が現れる。その姿は3メートルほどの化け物だった。

「なっ、どっいっことや……！」

「・・・紅だ」

「え？」

「紅の野郎、臓硯の体をいじってやがったんだ！」

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!!!!!!!!!」

咆哮を上げる臓硯。俺は阻害結界を張り、市民の混乱を避ける。

「ど、どうするのよー！」

「大丈夫だ凜・・・」

「え？」

「おばあちゃんが言っていた・・・俺が望みさえすれば、天は俺の味方をする」

「え？」

言いながら俺は右手を上げる。すると、その手のひらにハイパーゼクターが現れた。

「ハイパーキャストオフ」

『HYPER CUST OFF CHANGE HYPER B
EETLE』

そしてパーフェクトゼクターが俺の手に宿り、ザビーゼクター、ドレイクゼクター、サソードゼクターがパーフェクトゼクターに宿った。そして俺はボタンを押し始める。

『KABUTO THEBEE DRAKE SASSWADE POWER』

ボタンを押すと、俺は構えを取った。今回はガンモードではない。

『ALL ZECTERS COMBINE』

「今度こそ終わりだ、間桐臓硯！」

『MAXIMUM HYPER TYPHOON!』

「はあああっ！」

俺は一気に飛びあがり、マキシマムハイパータイフーンが臓硯の化け物に激突し、砂になって消えた。

「・・・終わったぞ、凜」

こうして、桜の奪還は成功した。

衛宮家

現在、居間に士郎、セイバー、ライダー、キャスター、葛木、凜、そして俺と桜がいた。桜は一言一言を振り絞り、今回の聖杯戦争に関わっていたこと、ライダーのマスターだったこと、そして体の蟲

と、聖杯の欠片のこと・・・その全てを話した。

「先輩、ごめんなさい」

深く頭を下げる桜。その眼には大量の涙が流れる。騙していたこと、傷つける原因となったこと・・・その全ての想いをこめて、桜は士郎に謝った。

「頭を上げてくれ、桜」

「先輩・・・」

「お前だって、自分の意思でやってたわけじゃない・・・それにお前は俺の家族だ。許すよ、桜」

「先輩・・・!」

桜は嬉し涙を流し、士郎に抱きついた。一件落着くことのでいいの
かね。

「で？この話のために私と宗一郎様を呼んだの？」

「違う違う、今日はそれだけのために呼んだんじゃないよ」

「じゃあなんなのよ」

「よっ、来たぜ？」

そこにランサーも現れた。

「ランサー!？」

セイバー達が構えを取る。

「おいおい、今日は戦いに来たんじゃないぜ?」

「じゃあ何しに来たのよ」

凜が言つと、ランサーが頭を掻く。

「神谷に聞いてねえのか?俺はそいつに招待されたんだぞ?」

「「「「「はあ!？」」「」「」

一斉に俺を見る一同。

「ああ、言つての忘れてたわ」

「頼むぜ、それでよく俺のサーヴァントになるとか言つな」

「「「「「はああああああああああ!？」」「」「」

驚きの声を上げる一同。まあまあ、落ちつけみんな。

「落ちつけるかあ!」

「ゲハッ!」

思い切り凜に殴られた。

「ね、姉さん、さすがにやりすぎです・・・」

「いいのよ、こいつこれくらいじゃやられないから」

「って・・・魔力込めて殴りやがって。まあそれはさておきだな・
・みんなで戦いを忘れて遊びたいと思ったわけだ」

「遊ぶって?」

「さあみんな準備しろ!海行くぞ!」

こうして、俺は魔法陣を展開して転移した。

第十六話「桜」（後書き）

秋風「ということで、桜救出編でした」

迅「いいのか？イタイらしいぞ？」

秋風「気にしない！」

迅「あ、そ」

秋風「次回は楽しい日常編です」

迅「で、今回は紹介があるんだろ？」

秋風「そう、フォルテを紹介し忘れてた」

フォルテ

術式 ミッドベルカ混合のハイブリット型のインテリジェントデバイス

形態 武器全般

CV 檜山修之

迅が開発したデバイスの第3号機。1号はゼロ、2号はルビーである。対サーヴァント用に作りだしたデバイスで、ゼロシステムが組み込まれており、対サーヴァントに対し、もっとも適した武装を制定し、戦闘を補助する。余り喋ることはなく、戦闘で助言などをしていない。ただ、女性に鈍い迅にたいして、少々あきれを感じている。

秋風「こんな感じです」

迅「次回、第十七話『一時の平和、本気の想い』ではまたw」

第十七話「一時の平和、本気の想い」(前書き)

みなさんの声援のおかげで、書きあげて決意しました。ここからはあまり見る人がいないのであれですけど、頑張ります

第十七話「一時の平和、本気の想い」

季節は冬、そして聖杯戦争と言う名の戦いが繰り広げられる真っ只中……なのだが

「いやっほー！」

現在、別荘のリゾートで遊びまくりです。

転移直後

「な、ななななな……なんなのこれはー！」

キャスターが叫ぶ。まあ、魔術に長けたはずのサーヴァントのキャスターが知らないのも無理はないんだが。

「ここは俺の別荘だ。さあ、行くか」

こうして、下に降りる。女性陣はこの中のメイドロボット（茶々丸の姉）のコピーが用意した水着を着ている。写真だけ渡して『みんなに合う水着を』と言ったら速攻で作ったこいつらが恐ろしい。

「ど、どうですか？先輩」

「あ、ああ……すごく似合ってるよ」

桜は白いビキニを着ている。正直な話、凛と胸を比べれば偉い大きさの比較な……

「うっさい！」

思いつきり殴られる。心読むなよ。まあ、そんな彼女もトレーナーと同じ紅いビキニを着ている。

「お前だつて似合ってるぞ」

「・・・ふん！」

あーあ、お姫様がご機嫌損ねた。

「ったく、オメーは女心わかってねえな」

『マスターは昔からそうです』

と、いうのはランサーだ。ランサーは水着にアロハシャツを着ている。まさしく『兄貴』と言う感じだ。で、一方のキャスター達はと言つと・・・

「どうですか？宗一郎様」

「ああ、似合っているぞキャスター」

ラブラブモード全開である。ほんと、あいつらこのままゴールじゃねーの？

士郎は士郎でセイバーと桜に迫られて困ってるのが面白い。

「なあゼロ？」

『なんですかマスター？』

「・・・俺が海鳴に戻る可能性は？」

『・・・現時点でマスターが次元震を起こした場合0.725%、この世界の役割を終えた場合は78%、天界の女神“アテナ”と接触した場合100%です』

・・・次元震を起こすのはうん、やめておこう。

「後の問題はイリヤだが・・・」

あの子の命を、どう繋ぎとめればいいのか？そして、この先の最後の戦いを・・・

『マスター』

「ん？」

「なーにやってんのよ、アンタは」

「凜・・・」

「ほら、みんなで遊ぶわよ」

やれやれ、考えるのは後にするか・・・

みんなでひとしきり騒いだ後、飯を食うことになった。メイドロボ

ツトたちが作り上げた、世界中から取り寄せた食材を使った食事だ。当然ながら『腹ペコ王』が目を輝かせた。しかも『今日はサーヴァントになって一番幸せかもしれない』などと言っていた。ホント食い意地張ってんな、こいつ。

「ま、いつか・・・」

言いながらワインを飲むのだが、凜に取り上げられた。

「ちよつと迅、あんた未成年でしょ」

もう中の年齢は30超えたけどね・・・

「へいへい・・・」

言いながら飯を食う。士郎も士郎で多く食べている。どうやらこの後修行でもしようとしているらしい。ちなみに食事の内容はというと、和食、洋食、中華、なんでもある。品目としても量がたくさんあるのだが、その辺はお持ち帰り用に包んだりしている。ランサーがマーボウドーフをめっちゃ食ってたけど、サーヴァントって食習慣までマスターに似るのかな？

「・・・つてかランサー」

「あん？」

「オメーはどうすんだ、これから」

「ああ、それな。さっさと『破戒すべきすべての符』刺せ」

「いいのか？」

俺が聞くと、ランサーは何を今更という顔になる。

「俺はもうあいつの元で戦うつもりはねえ」

「・・・ギルガメッシュか？」

「もうそこまで知ってるならわかんだろうが」

ま、いつか・・・

「行くぞ」

俺は破戒すべきすべての符を刺した。そして俺の腕に令呪が宿った。あれ？ライダーは腕だけどランサーは腕だっけ？ま、いつか・・・

「よしマスター・・・さっそく盃をかわそうじゃねえか」

「おう」

こうして酒を飲み、盃を交わした。そしてこの後凜にぶん殴られた。

「えーと、これどういう状況？」

現在士郎が木刀を構え、葛木、ランサー、ライダーに囲まれている。

「ん？修行」

「これは死刑宣告のまちがいじゃないか？」

「頑張れ」

俺は親指を立て、笑顔で士郎を地獄へといざなった。この後ポロポロ士郎はポロポロになった。

「あーあ・・・」

「ははは、良い修行じゃねーか」

あきれる凜と笑う俺。普段セイバーとしかやってねえし・・・って、ん？

「セイバー!？」

セイバーがいつの間にか倒れ伏している。

「セイバー、しっかりしろ！」

「うっ・・・迅・・・」

予想以上に魔力供給が安定してない・・・!

「士郎、こっちこい！」

「セイバー!どうした！」

セイバーの魔力供給が安定しないのは、士郎がその力を受け入れないからだ・・・

「凜、空き部屋で儀式をやる。こいつの新しいラインを作る」

「ちょっと、その意味分かってるの!？」

「失敗の確率が高いが、セイバーが消えるよりはました」

「どういうことだ？」

「士郎、こっちに来て」

俺は士郎にセイバーについてと、失敗の結果を話す。

「どうする士郎、お前が決める」

「待ってください迅・・・それは・・・」

「やるよ、俺・・・」

「シロウ？」

「迅を見てて思った・・・迅が、世界のためじゃなく、みんなのために戦ってた。みんなの消滅を防いだ・・・だから俺も、衛宮士郎として、セイバーを救う」

「シロウ・・・」

「先輩・・・」

それでこそ、だな・・・

「士郎、儀式に入る。まずだな・・・」

この後儀式に入る。まあ知つての通りあの方法だ。士郎とセイバー・・・二人が理解しなければいけないのはわかっている。桜の想いが少し遠のくかもしれないが、多分大丈夫だろう。

「うわあああああっ！」

士郎が悲鳴を上げる。体中に痣が現れる。儀式の中、セイバーが士郎をくらくらいつくそうとする。

「一度儀式を・・・！」

「待て凜、大丈夫だ・・・」

俺は魔力を終結させ、安定させる。原作と違うかもしれない、失敗があるかもしれない。ならば少しでも確立を上げなければいけない。

「うっ・・・」

士郎の痣が消えていく。成功か・・・

「心肺が落ちついた・・・もう大丈夫だ」

「まったく、世話焼かせるわね・・・こいつは」

「はは、だな」

服を着せて、しばらくの間二人が目覚めるのを見守った。

しばらくして、二人が目を覚ました。幾分か気分がいいらしい。そして想定外なことが合った。土郎の魔術回路がすっかりと稼働しているのだ。バーサーカーとのやり取りの中で覚醒するはずだが、もうこんなに早く覚醒するとは・・・やはり別荘に満ちる魔力が

「・・・・・・・・シロウ」

紅く頬を染めるセイバー、まったく初々しいったらまったく・・・

「あの、セイバー」

「はい、なんでしょう桜？」

「お話があります」

・・・退散するのでしょうか

桜side

迅さんが先輩と姉さんを連れて外へ出た。ありがとう、迅さん

「あの、話とは・・・？」

「セイバーは・・・先輩のこと、どう思ってますか？」

「っ・・・・・・・・いきなり、どういっ」

顔を紅くし、動揺するセイバー……やっぱり

「私は、先輩が好きです」

「桜……」

「でも、先輩はきっと、セイバーが好きなんだと思う」

「……」

私は思った。この恋は、叶わない。セイバーのために命をかけた先輩。その思いは“正義の味方”というだけではない、きつと心のどこかで……

「……私は、恋というのはあまり分かりません。結婚も政略結婚でしたし」

そういうことさらつと言うセイバーが怖い。

「しかし……私は士郎のサーヴァントになれたことを幸せに思います」

「セイバー……」

「だから私もきつと……士郎のことが『好き』なのかもしれない」

やっぱり、そうだよ……

「・・・オホン」

「「!?!?」」

びっくりして後ろを見ると、そこには先輩がいた。

「せ、先輩!?!いつから・・・」

「・・・えーと、桜がその、俺が好きって言ったところから」

ほぼ最初から!?!?

「シロウ・・・」

「・・・俺は、その」

先輩が少し慌てている。

「俺は、昔から桜がそう想ってくれてるなんて思わなかったし、セイバーも、まさかそんな風に言ってくれるとは思わなかった・・・
・えと、その・・・嬉しいよ、凄く」

先輩・・・

「じゃあ、先輩はやはりセイバーと・・・」

「シロウ、やはり桜と・・・」

と、私達の声が重なった。

「その、迅にも言われたんだが・・・その、“片方だけ”っていう案は、どうも俺には出来そうにないんだ・・・」

え・・・それって、まさか？

「もし、二人がいいのなら俺はその・・・二人を、受け入れたい」

「先輩・・・」

「シロウ・・・」

何故だろう、普通の女の子なら怒るだろうけど、その言葉はとても嬉しかった。

「先輩・・・！」

「シロウ！」

私とセイバーは抱きつき、涙を流した。

迅 side

「・・・よかったな、桜、セイバー」

「ほうほう、マスターもやるなあ、あの小僧にハーレムを選ばせるとは」

と、俺とランサーと凜でそれを覗いている。

「良かったわね・・・桜」

「なんだ嬢ちゃん、羨ましいのかい？」

「違うわよ馬鹿っ！」

思いつきりランサーの腹に蹴りを入れる凜。そして悶えるランサー

「・・・ま、いつか」

頭を掻きながら、俺は外に行くことにした。最後の戦いは、すぐそこまで来ている・・・

『他人の恋を手伝う前に、自分の恋を成就させて欲しいものです』

「だな・・・」

ゼロとランサーがなんか言ってるけど、気にしないでおこづ。

第十七話「一時の平和、本気の想い」(後書き)

秋風「ということで、セイバーと桜のハーレムルートでした」

迅「本来ならこういう結果はありえないからな」

秋風「俺なりのオリジナルです」

迅「原作を知らないだけだろうが」

秋風「さーせん」

迅「次回、第十八話『英雄王VS最強のサーヴァント』ではまた」

第十八話「英雄王VS最強のサーヴァント」(前書き)

お久しぶりです。別に落ち込んでたとかそんなんじゃないです。バイトと実家に帰ると、色々ありますね・・・まあ、落ち込んではいたんですけどね

ではごうござw

第十八話「英雄王VS最強のサーヴァント」

士郎と桜、それにセイバーが結ばれてから数日。衛宮家では平和な日常が続いていた。果たしてこのままでいいものだろうか？つい、そう考えてしまう。

「・・・そろそろ、イリヤに会いに行くか」

「イリヤ？あの子がどうかしたわけ？」

「そろそろアインツベルンとは決着を着けないとな・・・それに・・・」

そろそろ、紅が動き出すかもしれない。

「わかったわ、行きましょう」

こうして俺と凜とランサー、そしてキャスターとライダーが立ち上がる。

「では宗一郎様、行ってまいります」

「ああ、気をつけてな」

葛木には何かあるといけないので、桜の護衛を頼んだ。

「俺達も行くよ、遠坂」

「士郎？セイバー？」

「我々も、彼女と決着をつけなければ」

こうして、俺達はイリヤが住んでいるという城へ向かった。

タクシーから降り、森を見る。この先か・・・

「ねえ、これって結界じゃない？」

見ると、結界が張られている。そして尋常ではない魔力を感じ取った。

「これは・・・」

「あんまり良い予感がしないぜ」

「そうね・・・急ぐとしましょう」

「行きましょう、迅」

こうして、イリヤの城へと走る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした、凜？」

「なんでも、ないわ・・・」

少し顔色が悪い凜。少し顔色も悪い。おそらくこの前の紅のことを

気にしているのだろう。

「・・・大丈夫だ、凜」

「え？」

「お前は俺が守る」

「迅・・・」

「なんたって、俺はお前のサーヴァントだからな」

俺が言うと、凜がいつもの凜に戻った。

「・・・そうね、頼むわよ、迅！」

「ああ、マスター」

こうして、俺たちは城へ急いだ。

イリヤside

突然のことだった。私の前に、金髪の男が現れた。そして、私達は襲撃にあった。人間ではないそれは、バーサーカーを圧倒する。バーサーカーの12の命が次々と削られて行く。

「なんなのよ・・・なんなのよあなた！」

「我は王だ、雑種」

男は余裕の表情だった。

「さあ、聖杯の欠片よ・・・来るがいい」

「！」

「なんだ、まだ生きていたのか？雑種め」

バーサーカーが叫ぶ。既に狂った状態にあるバーサーカーはそれに襲いかかった。でも、バーサーカーの体に次々と剣が刺さる。

「バーサーカー！」

「！」

それでも、バーサーカーは戦うのをやめない。しかし、バーサーカーはその場に崩れ落ちてしまった。

「さて、今度こそ終わりだ」

「あ・・・あ・・・」

嫌・・・誰か、誰か助けて・・・士郎・・・お父さん・・・

「迅！」

「さあ来い人形よ」「うおらあ！」「何！？」

私を掴もうとしたそいつを、何かが蹴り飛ばした。そしてそれは階

段の上に着地し、蹴り飛ばした何かを見た。黒いジャケットに翡翠の剣、黒い髪がなびく。

「貴様、何者だ！」

「通りすがりのサーヴァントだ、覚えておけ！」

私の望む人が来てくれた。

迅side

「遅くなつたな、イリヤ」

「迅！」

「よしよし……ライダー、イリヤを凜達のとこへ」

「はい」

イリヤを安全なところに移動させる。

「キャスター、お前はバーサーカーの治療に当たってくれ」

「わかつたわ」

「そして俺とランサーは……あいつの相手だ」

「おっ」

俺とランサーが身構える。

「ほう、誰かと思えば裏切り者の雑種……それに」

セイバーを見るギルガメッシュは、手を広げて笑顔を作る。

「セイバーではないか！」

「馬鹿な……貴方が何故現界しているのです！アーチャー！」

「おいセイバー、アーチャーがいるのはおかしいことか？」

士郎が言う。確かに、クラスの中で今までいなかったのは『アーチャー』だ。しかしそのポジションを担っているのは俺なのだ。

「あり得ません……あれは前回の戦いのアーチャーなのですから」

「そうかセイバー！ようやく我のものになってくれるか！」

「黙りなさい、私は貴方のものにはなりません。私はもう、士郎のものです」

不可視の剣を構えて、言い放つセイバー

「そうかセイバー……愚かな雑種に騙されているのだな、今救うぞ、セイバー」

「……あいつ、なんだか頭が可哀想だな」

「我を愚弄するな！雑種めが！」

うおっ！？聞こえてたのかよ！ギルガメッシュの後ろにある剣が宙を舞い、こちらに降り注ぐ。

「つく！」

織天覆う七つの円環！
ロー・ファイアス

しかし、花弁はすぐに砕けて行く。駄目だ、一個一個が宝具じゃ防ぎきれない！

「ちいつ！防ぎ切れねえぞ！」

「このままではキリがありません！」

「さすがはセイバーだ。そして雑種どもも粘るものだな」

ひたすら、俺達は宝具を弾き続ける。つくそ！

「セイバー、ランサー！お前達は接近戦のエキスパートだ・・・俺がこれを引き受ける。お前らは一撃を決める！」

「しかしそれではジンが・・・」

「なめんな、この程度でくたばる俺じゃねえ」

「・・・わーった、信じるぜマスターさんよ」

「つく！30秒耐えてください、ジン！」

こうして一気に接近するセイバーとランサー

エクスカリバー
約束された勝利の剣！

ゲイ・ボルク
突き穿つ死翔の槍！

二人が宝具の真名を開放する。しかし・・・

エヌマ・エリシュ
天地乖離す開闢の星！

「ぐああっ！」

「うああっ！」

「セイバー！ランサー！」

天地乖離す開闢の星によって二人が吹き飛ばされる。つく！やはり俺が行くしかない・・・！

「彼方より此処へ、選別に選ばれし王と、魔槍を携えし勇者を我が下へ」

召喚魔法によって、セイバーとランサーを呼び戻す。

「お前らはキャスターと凜に手当てをしてもらえ」

「ほう雑種、我に挑むつもりか」

「そのまさかだよ、英雄王」

普通に挑むのは無理だな。

「ゼロ・・・！」

『セットアップ・スタンバイレディ』

右腕にゼロ、そして左手には盾となったフォルテが現れる。

「そのこの雑種同様、無様に散るがいい」

「行くぞっ！」

『ロードカートリッジ』

俺はゼロでチャージセイバーを叩きこむ。しかし、ギルガメッシュはそれを防ぐ。

「目障りだ、雑種」

俺の体に宝具が突き刺さる。

「ぐはっ！」

しかし、俺（分身）は煙を立てて消えた。

「何！？」

「おらああっ！」

今度は手に千鳥と螺旋丸を宿した二人の俺が突っ込む。

「馬鹿め！恰好の的だ！」

再び消される。そう、確かに的になる。だが……

「準備は整った……っ！」

せんたいらいがけっかい
千躰雷匣結界！

「な、なんだと！？」

「さらにつー！」

千磐破雷！

魔力を宿した千の分身と俺が突っ込む

「おおおおおおっ！」

「なめるなよ！この雑種があー！」

宝具が飛び交い、俺の分身が消えて行く。魔力消費は激しいが、これには二つの理由があった。回復中のセイバーとランサー、バーサーカー、そしてそれを治療する凜達の保護。そしてもう一つは時間稼ぎだ。

「……そして、本当の準備は整った」

「何！？」

本物の俺は、その離れた場所で詠唱を唱え続けていた。

千ミットムス空奈ネット キーリプル・アストラヘー
解放・固定！ 『千の雷』！

「おおおおっ！」

千の雷が俺の体に宿る。

プロ・アルマティオーネ ヘー・匠ヌ中夜操剣デユナメネー
術式兵装 『雷天大壮』！

「行くぞ、英雄王」

「フン、奇怪な魔術だ。来るがいいぞっ」「はあっ！」「がつ！？」

さあ、反撃開始だ。

凜side

私は今、キャスターとセイバー達の治療を行っていた。そして迅の体が光り、とんでもない速度である男を殴り飛ばした。ランサー曰く『英雄王 ギルガメッシュ』そのメソポタミアの王、人類最古の英雄王を、私のサーヴァントが殴り飛ばし、蹴り飛ばしている。

「ルビー、あれどういうこと？」

『・・・あれは、闇の魔法です』

「闇の・・・魔法？」

それって、ものすごく危険なんじゃ……？

『闇の魔法はとある世界に住む吸血鬼の真祖が開発した魔法です。砲撃のために作り出した魔法を放つのではなく、固定し、圧縮して体内に取り入れる。それによって肉体強化された『兵装』として活用できるのです。あの兵装は『雷天大壮』と呼ばれる兵装です。文字通り己を雷化させるその力。その初速は150km/sぶっちゃけ言って普通のサーヴァント、バーサーカーですら捉えることは不可能でしょう』

理論で説明されてわかつちやいるけど、そんなの普通じゃ出来ないわよ……

『迅様はその『普通』のカテゴリには存在しません。バーサーカーと同じ部類の『神に近い存在』いえ、『化け物』かもしれませぬ』

「……大丈夫よルビー」

『はい？』

「私は、あいつのことわかってるつもりだから」

そうよ……どんなに強くたって、化け物だったって、あいつはあいつ。ちよつとふざけてて、お人好しで、でも、本気で正面から敵にぶつかっていく。それが私のサーヴァント『神谷迅』なんだから……勝ちなさいよ、迅

迅side

「はあああつ！」

零距离、雷の暴風！

「ぐおおおおつ！調子に乗るなよ！雑種う！」

宝具が飛び交い、俺はそれを弾き飛ばしながらも、その攻撃を続ける。

「おらあああああつ！」

千髻破雷！

「がはあつ！」

「手加減なしだ！これで決める！」

つていうか、もうくたばれえ！

「うおりゃああああああつ！」

「ぐはあああつ！」

鉄壁であろうそのギルガメッシュの黄金の鎧が砕け散った。そしてギルガメッシュがその場に崩れ落ちる。

「ば、かな・・・雑種などに・・・」

「その雑種にやられるテーマは、雑種以下だろつよ」

倒れるギルガメツシュに、俺はそう言ってから雷天大壮を解除した。

「ふう……」

「迅！大丈夫なの！？」

「おう、なんとか……！！？」

殺気を感じた。その寒気がする恐ろしい殺気を。階段の上を見ると、そこには言峰綺麗がいた。

「ご苦労だったね、迅」

「……何？」

「ギルガメツシュを倒せるほど、私には体力がないものでね」

言いながら言峰がギルガメツシュの所に降りる。

「言峰……貴様何を言っている」

「言峰……残念ながらこの男はもう死んだ。この男の『皮』は、借りただけさ」

「お前まさか……紅！」

「その通り」

言峰の体が崩れ、紅が姿を現した。それは全盛期のものだった。

「馬鹿なっ……!!」

「真・アサシン、アサシン、そして魔術師の魂と魔力を糧に、ここまでの回復を遂げた」

「お前の狙いは……」

「君の予想通り、ギルガメッシュの……回収だっ!」

「ぐあああああああっ!」

黒くなった紅の腕が、ギルガメッシュに刺さる。

「あああああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!」

「さあよこせ、貴様の魂を!」

だんだんとギルガメッシュは消えて行つた。

「クツクツク……流石は英雄王、良い魂と力だ。さて……」

空中に宝具が浮かぶ。まさか、ギルガメッシュの力をコピーしたつてのか……

「目の前のゴミ処理をしよう」

「つく!」

雷天大壮を使ったからか、体が思うように動かない。

「立ちなさい迅！逃げるのよ！」

「つく、すまん！」

確かに、現状で戦うのは無理だ。撤退しかない・・・

「逃がさん！」

俺達に宝具が降り注ぐ。しかし、それは俺達には届かなかった。そこには大きな巨漢・・・バーサーカーがいたのだ。

「バーサーカー？」

「！」

バーサーカーが吼える。まるで、俺達に行けというように。

「！」

「良く吠えるな・・・流石は狂乱者と言ったところか。凄まじい気迫だ」

「バーサーカー！」

「つく、武運を！」

セイバーたちが走りだす。士郎もイリヤを抱きかかえるが、イリヤが叫ぶ。

「やだ！やだよっ！バーサーカー！バーサーカー！」

イリヤの悲痛の音が、響き渡っていた。

第十八話「英雄王VS最強のサーヴァント」(後書き)

秋風「つてことで、VSギルガメッシュでした」

迅「結構短くない?」

秋風「だね、まあ最初からこうなる運命なのは決めてたよ?」

迅「マジか」

秋風「これからもがんばりますので、よろしく願いします」

迅「次回、第十九話『転生者の真実』ではまた」

第十九話「転生者の真実」(前書き)

とういわけで、このシリーズの迅の真実です

第十九話「転生者の真実」

士郎の家に避難した俺達。イリアは泣きっぱなしだった。

「バーサーカー・・・消えちゃった」

「イリヤ・・・」

俺達の間にも、沈黙が生まれる。現存する勢力は『セイバー』『ライダー』『ランサー』『キャスター』『名無し』5人のサーヴァントだ。

「この勢力で、あの男・・・紅に挑まないといけないのね」

「もう聖杯戦争は関係ねえ・・・あれを倒さなきゃ世界が消える」

「恐らく、紅は既に『聖杯の欠片』を手に入れている」

「どっいひんと？」

あの黒くなった腕・・・

「イリヤ、その辺は詳しいな？」

「・・・うん」

「どっいひんと？」

「アマンニムス」

イリヤの言葉に、一同が首を傾げる。

「『この世のすべての悪』それが聖杯の中身」

「この世の全ての悪って……」

「前々回、第三次聖杯戦争において、アインツベルンが喚びだした、喚んではいけないサーヴァントのこと。ある村で人間全体の善性を証明するため一人の人間をこの世のすべての悪を体現する悪魔『アンリマユ』の名と役割を強制的に背負わせたの」

それが、全ての始まり……か

「アンリマユは最弱のサーヴァントで、すぐに敗北して聖杯の中に取り込まれた。けどアンリマユは周りから身勝手な人間の願いで一人の人間を消して模造された英霊という“願い”そのものだった。だからアンリマユを取り込んだ際、聖杯……つまり『願望機』はその願いを叶えることになり、聖杯はアンリマユに汚染された。だから……」

イリヤは一拍置いて、口を開く。

「もう聖杯は願いを叶える願望機じゃない。ただの人殺しの道具よ」

「……聖杯の中には恐らく『アサシン』『真・アサシン』『バーサーカー』『ギルガメッシュ』そして『言峰綺麗』の魂が取り込まれた。言峰は人間だが、その魔力は強力なものだ」

「聖杯の器はもうすぐ満ちる。だけどアンリマユを呼ぶには、まだ

時間がかかると思う。何しろ英霊じゃない人間の魂があるから」

・・・なるほどね

「なら一度休むべきですね、別荘を有効に活用しましょう」

「ああ、そうだな」

「でも、その前にやることがあるわ」

凜の言葉に一同が注目を集める。そしてその凜の視線は、俺に向いていた。

「・・・迅、いい加減話して頂戴。貴方が何者で、紅は何者なのか・

・・・そして、貴方の知る全てを」

・・・限界、だな

「わかった、全て話すよ」

こうして俺は話すこととなる。俺が転生者であること、この世界は俺の世界では『ゲーム』が発端で『アニメ・漫画』になっていること、別の世界から流れ着いたこと。神より力を授かったこと、そして、サーヴァントとして凜に召喚されこと。今までの世界での戦いのこと。そして紅の正体について・・・その全てを話した。全員が驚きを隠せなかった。ただ一人、凜はそのまま聞いただけだった。

「じゃ、じゃあ・・・迅は未来を知っていたのか!？」

「・・・そうだ、本来凜が召喚するのは『アーチャー』・・・そし

てその英霊の名は『エミヤ』のはずだった」

「どづいことですか!?!」

「ここから先の未来、正義の味方として動いた土郎の可能性として出来る英霊エミヤは、死後、過去をさかのぼってこの時代に来るはずだった。」

「パラレルワールド……」

「そうだ、限らない無現の可能性、そしてそれぞれの運命を、俺は全て知っていた」

遠くない未来、凜が結果的に土郎を殺すこと、イリヤが死ぬこと、桜が聖杯の欠片によって暴走すること、ライダーのそのままの消滅、ランサーの反逆と死、キャスターの死亡、そしてセイバーオルタの出現。その全てを俺は知っていた。

「だから迅は、今までの来るはずの未来を予測して……?」

「そうだ、アンリマユのことも知っていた。だからこそ俺は……」

「紅は迅とは逆ね、アンリマユを自分のものにして、迅を殺すつもりだわ」

「どづいことだ、遠坂」

「……見たのよ、迅の過去」

やっぱりな、キャスターとの戦いの時にでも見たのか。

「とりあえず、別荘で続きを話そう、今後の対策と・・・やるべきことを」

こうして、俺達は別荘に転移した。

Side Out

そこはイリヤがいた城。そこに紅はいた。

「あと少し・・・聖杯の覚醒まで」

紅の復讐は止まらない。世界の支配を出来ず、消えかけて・・・そして、この世界にたどり着いた。復讐の機会を、狙わないわけがない。

「・・・・・・・・・・あと5日か」

タイムリミットまで、あと5日

別荘についてから、イリヤが異様にはしゃいでいた。そういえば来てないのはイリヤだけだったな。

「さて・・・じゃあイリヤ、こっちかい」

「ぶえ？」

「・・・お前、ホムンクルスだったな」

俺の言葉に一同が驚く。イリヤは小さく頷いた。

「・・・・・・・・」

もういい加減イライラしてきたので、その辺に落ちていた石を拾い、壁にぶつけた。

「いい加減出てこいこのクソ女神！」

「いった〜！」

そこに転がってきたのは、女神『アテナ』だった。それを見てライダーが超驚いていた。それもそのはず、アテナが持つ防具の『アイギス』にはメデューサの首が使われているのだから、当然である。

「いつからだ？おい、いつからこの別荘でリゾート満喫してたテメエ」

「えーと、ライダー戦辺り？」

俺は無言でアイアンクロウを喰らわせた。

「痛い痛い痛い！悪かったわよ！」

こめかみを抑えて、涙目のアテナ。

「今までの話聞いてたならわかんだろ」

「えー……また始末書が……」

仕方ない、もう一度……

「わかった！わかったわよ！もう……」

何やら呪文を唱えるアテナ。すると、イリヤの体に光が走る。

「これでイリヤちゃんは“人間”になったわ」

「嘘……」

「ほんとよん　これでイリヤちゃんは普通の人間の長寿を全うできる。まあ、健康には気を使いなさいな」

これで第一の問題解決と

「おいアテナ、わかってんだろ？」

「……ええ、アンリマユと、紅が一つになるのは5日後。つまりこの別荘で言えば120日」

タイムリミットは、4カ月……

「見せてもらうわよ、貴方がこの世界に何をもたらすのか、そしてこの世界の終末をね」

こうしてアテナは消えて行った。

「ねえ、今のつて・・・」

「俺の世界の人間名簿汚して俺を殺したバカ女神『アテナ』だよ」

「ああ、なるほど・・・だからライダーが怯えてるのね」

ライダーが桜に抱きついてめっちゃ怯えていた。

「ライダー、もういないから大丈夫だよ」

「そ、そうですか・・・」

安心したようにため息を着くライダー

「後4カ月・・・時間がないな」

言いながら俺は『ALL RIDERS』のカードを見つめる。こいつらにもまた、力を貸してもらおうかもな。

ぐ、ぐう

「ん？」

セイバーがおなかを鳴らしている。とりあえず飯だな。

飯を食べ終えて、俺は夜の空を見上げる。あと4カ月・・・か

「迅」

「セイバー？」

食事を終えたセイバーがいた。

「どうしたセイバー」

「いえ・・・迅こそ、思いつめていたようなので」

「・・・ああ、あと4カ月。現実世界では後5日、それですべてに決着がつく」

「私の解釈なのですが、迅は知っているのですね？私が・・・何故聖杯を求めたのか」

ああ、選別の剣のことか？

「知ってるよ、アーサー王・・・選別の剣のことだろ？」

「はい・・・過去を戻り、私は選別をやり直そうとしました。私が王になったばかりに、国が滅びたのだから・・・」

やっぱり生で聞くと、印象つてのは違うもんだな。

「あのさ、セイバー」

「はい？」

「過去は、変えられるもんじゃねえぞ？」

「どういいう、ことですか？」

ほんと、漫画みたいな人生を送った俺だからかな、こんなこと言えんの

「俺は過去に、女神に殺された。そして今がある。じゃあその前、転生する前の過去・・・ひどいもんだぜ」

セイバーの過去とは比較できないであろう転生の前。俺は平凡だった。そう、本当に。日本で生まれ、父と母がいて、言われた通りに言われるがままに流れる人生。つまらなすぎる日常。強くも弱くもない、欲しいものは普通に求めても、嬉しいとも思わない。

無欲

それが俺には一番ふさわしい言葉だった。

「誰かのためでもない、俺はそのレールの上を歩き続けた。ただひたすら、何の感情も持たず」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だがお前はどうか？国のため、民のため、そのために剣を振るってきた。立派なもんじゃねえか・・・確かにお前は守れなかった。国も、民も・・・でも、今まで救ったものを忘れていいのか？」

「！..!」

過去を変えろということとは、その今までの事実を消すことになる。

「お前じゃなく、別の王が戦うとして・・・それによってお前が救

つてきた人が、村が消えるかもしれない。お前は立派だった。お前以上に『勝利すカリバーンべき黄金の剣』が似合う人間はいねーよ」

「迅……」

「でもまあ、オメーが決めることだ、聖杯を求めるのも、それで何をするのかも」

「……いいえ、貴方に言われてはつきりしました」

「え？」

「もう私に、聖杯は必要ない」

まっすぐな目で、セイバーが俺を見た。

「過去があるからこそ、今の私があり、士郎がいて、桜がいる……私は愚かだった」

「……ま、別に愚かかどうかは知らんが、その判断は間違っ
てないさ。なあ？士郎、桜？」

「っ！またこのパターンですか！」

そこには士郎と桜がいた。まあ、心配だったのだろう。

「いや、その……悪いセイバー……気になって」

「ごめんなさい、セイバー」

しかし、セイバーは何も言わず、二人を抱きしめる。

「別に構いません、私は貴方達と共にあるのだから」

・・・甘い空気ですねえ、退散しましょうか。こうして、俺は部屋に戻ることにした。

部屋に戻り、ベッドにねっ転がる俺は無気力に上を見る。

『マスター』

「ん？」

『貴方のことです、どうせこの世界の終末を考えたんでしょう？』

「お前エスパー？そんな能力あげてないだろ？」

『あなたと何年いると思ってるんです？』

そりゃごもつとも・・・

『私はレイジングハートのように主に忠実じゃないんで言わせてもらいます。許しませんよ？死のうなんて』

「だが俺が消えても、なのはたちに支障はないだろ」

『あるないの話じゃありません、IFだろうがなんだろうが、貴方は貴方なんですよ？』

本当のことを言うと、俺自身は可能性の俺であって、なのはの世界に戻るのとは別の俺だ。ときどき夢で見るから知っていた。『魔法先生ネギま!』の世界で俺が戦っている。それをみて悟った。俺はI F・・・可能性なのだ

どうやら、真実を知ったようじゃな

「・・・その声、ゼウスだな」

覚えておったか

そこに現れるごっつい筋肉の爺さん、神々の王、ゼウス

「アーチャーの召喚に割り込ませてこの世界に俺を送ったのも、お前だな」

その通り、少し前にアテナが言うておったんじゃ、この並行世界を救いたいと

「あいつが?」

確かにアニメ好きだけど・・・

神の力に魅せられた人間と、それに奔走される英雄たち・・・いくら並行世界とはいえ、ワシという存在が人を不幸にする。それが耐えられなかった。

「だから俺（IF）が作られた」

作ってはおらん、お前もお前じゃ

「は？」

どういうことだ？

並行世界を知っておる癖にそういうことを言うのか？簡単に説明しようかの。お主は確かにIFの可能性の神谷迅じゃ。そしてお主の言う本物も、確かに神谷迅じゃ・・・だが可能性であってお主が偽物と言う定義はない。

「だが・・・」

並行世界で確かにこの世界は『リリカルなのは』にはつながっておらん、だがお前は可能性じゃ・・・お前も戻る可能性を持つておる。それを知りながら戻らんのも理由があるじゃろうに

「それは・・・」

のう？お嬢さん？

「は！？」

ゆっくりとドアが開かれる。そこにいたのは凜だった

第十九話「転生者の真実」(後書き)

秋風「つてことで」

迅「超急展開だな」

秋風「まあね、一応タイトルにも『IF』と書いたから」

迅「まさか本編が食い込むとは思わなかったぞ」

秋風「本編の迅も登場するよ?」

迅「あ、そ」

秋風「あと、なのはたちを出すとか言ってたけど、多分でない」

迅「まじかよ」

秋風「しょうがないじゃん」

迅「次回、第二十話『少女の想い』ではまた」

第二十話「少女の想い」(前書き)

今回はめっちゃ短いです

第二十話「少女の想い」

「凜……いつから、ここに？」

「……………あなたが、死ぬ死なないの話をゼロが始めてから……………聞かれてたのか」

では年寄りも退散しようかの、ホッホッ

「おい！」

見せてもらうぞ？お前の決断と、世界の結末を

そう言っただけでゼウスが消えた。

「……………今のは？」

「神の王、ゼウスだよ。俺に『本来の命』を与えてくれた」

「あれが……………ううん、そんな話今はいいわ」

言いながら凜がベッドに座る。

「あなたが、死のうとしたって所からよ」

「……………」

沈黙、それが部屋を支配する。

「紅を倒すために、心中しようっての？」

「……お前らのためだ」

「っ……！何が私達のためよ！」

「聞け……『全ての世界の悪』アンリマユは本来の未来でも強大な威力を持っていた。それ以外に紅がそれを吸収したら？あるいは一体化、もしくは逆に紅が乗っ取られたら？それこそ、本当に手の打ちようがない」

「だからって、アンタが死ぬことないじゃない！」

凜が怒鳴る。確かに、それはそうかもしれない……でも

「この世界に、なのはたちはいない」

紅を倒したとき、なのはが、フェイトが、はやてが、アリシアが、シグナムが、ヴィータが、シャマルが、リンフォースが、エレナが、ザフィーラが、プレシアがいた。あいつとライダー達がいたからこそ、俺は戦えた。背中を預け、奴を倒した。

「だから、倒せないっていうの？」

「……」

「その人たちがいないから、私達じゃ不足だから、アンタが死ななきゃいけないわけ？」

「違う・・・俺は・・・」

俺は、凜達に平和に生きて欲しいだけ

「違わないわよ！アンタは何でもかんでも背負いこんで、周りを見ないで、それで何があたしたちを守るよ！」

凜が思いつきり俺に抱きつく

「凜・・・」

「アンタが・・・アンタが死んだら・・・誰が・・・誰が、あたしを守るのよ・・・」

「俺は・・・」

凜が泣いていた。俺は優しく凜を抱きとめる。

「あたしは・・・」

凜side

初めは生意気な奴だと思った。強いからってなんでもやって、戦って・・・でも、そんな光景が、いつの間にかっこよく思えた。

「アンタが・・・アンタが死んだら・・・誰が・・・誰が、あたしを守るのよ・・・」

私は強くない。強いように見せているだけ。いつの間にか支えられ

てで、そんなこいつがいつの間にか一緒にいて欲しいと思った。聖杯を手に入れても欲しい願いなんてそうそうなかった。『遠坂』の願いが『聖杯を手に入れること』だったから。でも、今は違う。聖杯なんか欲しくない・・・今欲しいのは・・・

「あたしは・・・」

この想いはきつと変わらない。だからこそ、私はその思いをぶつけた。

「あたしは・・・アンタが、好き」

迅side

「凜・・・」

凜が俺に、好きだと言った。俺は・・・

「なによ」

「どつして・・・」

自然に開いた口が言ったのはこれだった。我ながらひどいものだ。

「最初はね・・・あんたは変な奴だった。私に戦うなどか言ったり、敵のことネギでぶつたいたり・・・でも・・・」

凜が一層、俺の服を握る。

「私達を守ってくれて、桜を救ってくれて、イリヤを守って戦うあんたが・・・どうしようもなく、かっこよかった。だから・・・私は」

「凜」

俺はようやく気がついた。俺は・・・一人じゃない

「ありがとう・・・嬉しいよ、凜」

そう言っつて、俺は凜と唇を重ねた。

「ん・・・」

「ふっ・・・ん」

唇を離すと、今度は俺が抱きしめた。

「俺も、凜が大好きだ」

「迅・・・」

「俺のそばにいてくれ・・・」

俺が言っつと、凜が涙目で俺をベッドに押し倒す。

「やっと・・・聞けたわよ・・・その言葉」

「・・・悪い」

凜が俺の上に乗る、俺は優しく抱きしめる。

「約束する」

「え？」

「紅との戦い・・・俺は死なない」

俺なんかを想ってくれる人がいて、一緒に闘う仲間がいる。だからこそ、俺は死ねない・・・死などを選べない。

「その言葉、ちゃんと身に刻んでおきなさいよ」

「わかってる」

「ん・・・」

再びベッドの上で唇を重ねた。そして俺たちは互いの愛を確かめた。何をしたのは、ご想像にお任せしよう。

次の日

「ほら、朝よ」

「ん・・・」

外の世界で一時間が経過した。朝日を見る。

「ほら、さつさと着替えて外でないと。今日はフムっ!？」

俺は不意打ちで唇を奪う。

「ん……」

「ふっく……んん……! な、何するのよ!」

「ん? 嫌だったか?」

「馬鹿……」

『(……) ……これ、なのはさんたちが知ったらひどいでしょうねえ』

さて、今日も一日頑張るか!

「さて……と」

朝食を終えた俺はゼロを出す。

「ゼロ、リミッターを1から3まで解除だ」

『オーライ』

体から魔力が溢れる。

「はああああ……はっ!」

魔力が安定して、銀色の魔力が俺から溢れる。

「これを現状維持、ゼロ・・・サポートを」

『オーライ』

「つく！」

維持し、それを集中して右手へ

「・・・・・・・・・・はああああ」

『出力98%』

「せいっ！」

鋭利になったその魔力の刃を振り下ろすと、その衝撃で海が割れる。

「ふう・・・」

『やはり100%は難しいですね』

「ああ、100%で撃てれば申し分ないんだが・・・」

なんせとんでもない集中力があるからな

「迅！」

「凜・・・どうした？」

「どうしたって、海がいきなり割れたから」

そりゃおどろくか・・・

「いや、10あるリミッターのうち3つ外して撃ちだしてみた」

「3つでこれって・・・あんたホント規格外ね」

「まあな」

最近ではそうでもないけどな・・・

「英霊と戦って思ったよ。規格外で昔から“化け物”だ“兵器”だなんだ言われてたんだが・・・バーサーカーとかギルガメッシュと戦うと思う。ああ、俺はまだ“人間”なんだなって」

「ふふ、よかったじゃない・・・あ、そうだ。おひるが出来たから食べに行きましょう?」

「ああ、そうだな」

すると、凧が腕に絡みついてくる。

「どうした凧」

「べ、別にいいでしょ!こうしてたいんだから・・・!」

『・・・マスターは恋人を作ってもこうなんですか』

「・・・努力する」

こつして厚食を取りに上へ向かった。

第二十話「少女の想い」（後書き）

秋風「げふっ（吐糖）」

迅「冒頭で吐くな！」

秋風「い、今まで純愛なものなんてやったことなかったから」

迅「うっさいよ！」

秋風「そして今回短かったです」

迅「まっただ」

秋風「いや、タイトルがタイトルだからさ、余計な物を入れないほうがいいかなって」

迅「なるほどな」

秋風「あと少しでアンリマユと戦い、この世界も終止符がうたれるはず……」

迅「次回、第二十一話『決戦』ではまた」

第二十一話「決戦」(前書き)

今日はーから百までバトルです。ほのぼののほうが好きなのに(泣

第二十一話「決戦」

4カ月が経った。俺達は再びイリヤがいた城に向かうこととなる。葛木、桜、イリヤは衛宮邸に待機。俺、凜、ランサー、ライダー、キャスター、士郎、セイバーが出撃となる。転移魔法で城の前に来ると、禍々しいオーラが立ち上っている。

「行くぞ」

それぞれが武装を構えて中へ進む。入口にはすでに紅が立っていた。

「来たか・・・」

「あれは！」

そこには準備万端であろう紅がいた。全身が黒くまがまがしい鎧が纏う。そして黒い宝具が宙に舞っている。

「紅！決着を着けるぞ！」

「いいだろう・・・来るがいい、哀れな英霊ども・・・そして、哀れな転生者」

「行くぞっ！」

全員が武器を構えて紅に向かう。

「・・・・・・・・」
「あああっ！！」「」「」「」

「はあっ!」「」

俺を筆頭に、ランサー、セイバー、ライダー、士郎が斬り込み、凜とキャスターが魔法で攻撃する。

「フンッ!」

しかし、攻撃は弾き飛ばされる。

「うあっ!」

「ぐっ……」

「うわっ!」

「馬鹿な……!障壁!?!」

「違う……宝具をあっさり……」

着地して紅を見る。奴は一步も動いていないし、特に宝具や魔法を展開した感じもしない。

「なんだ、今のは……」

「宝具ごときで私へ攻撃が通るとでも思ったか?」

「何っ……!?!」

『マスター、魔力を使った形跡が見られません』

そんな馬鹿な・・・！あいつは仮にも闇の書の防衛プログラムのはずだ！なのに魔力を使わずに俺達の攻撃と俺達ごと吹き飛ばしただと！？

「つまらないぞ？今のはただ単に殺気を飛ばした“だけ”だということに」

『！？』

ただの殺気で、あれだけの・・・！？やはり、ただでは済まないか・・・

「・・・ゼロ」

『オーライ、リミッター解除します』

「舌から六までを一斉解放しろ」

『体がもちますか？』

「持たせる」

『オーライ、マスター認証確認・・・リミッター解除』

「みんな下がってる・・・切り札、その1」

シニスト亜一ミツ狭タグネットキーリブ扉ストラボクスト亜一ミツ狭タグネットウーラニア・フロゴースネアップレタスプシオー
左腕解放固定 『千の雷』 右腕解放固定 『燃える天空』 双腕掌握！

「はああああ！」

術式兵装 雷炎大壮！

「雷と炎の二重装填とはなかなか面白い……」

「いくぞっ！」

俺は縮地で背後に回り込んで拳を突き出す。

「ぬうつ！雷天大壮の負荷は使えるのか……！」

遅れて拳を防ぐ紅。しかしそれは『アンリマユ』の保護に守られる。

トレース・オン
「投影開始！」

ライトニング レイ・ボルク
雷撃・突き穿つ死翔の槍

「何!?!」

雷を付加した『レイ・ボルク突き穿つ死翔の槍』が紅に突き刺さる。

「障壁を抜けただと!?!」

「まだまだあ！」

フレイム エクスカリバー
炎撃・約束された勝利の剣

今度は炎を付加した『エクスカリバー約束された勝利の剣』がヒットする。

「なるほどな……騙されていた。貴様自身の身体強化や魔法強化ではない……貴様の本来のその目的は『宝具強化』……」

「そうだ・・・宝具に魔力付加をして追加機能を持たせる。それが俺の魔法『プラスマジック付加魔法』」

「まさか独自の魔法とはな・・・少し驚いたぞ」

転生者なら誰でも考えるもんだ。『自分自身のオリジナル魔法』くらいな

「確かに宝具に貴様の力が付加すれば私にも『傷ぐらい付いてしま』う』だが・・・」

すると、傷が入った部分が再生していく。鎧も欠片が集まる。

「再生など造作もない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やはりこの程度では効かないか・・・俺だけじゃあ攻撃が与えきれない・・・

「まあ、俺一人ならな」

エクスカリバー
約束された勝利の剣！

ゲイ・ボルク
突き穿つ死翔の槍！

ヘルレフオーン
騎英の手綱！

魔力全開砲撃！

宝石魔力収束砲！

セイバー、ランサー、ライダー、キャスター、凜による一斉射撃。さらに300のプロテクトで編んだバインド。そしてこの辺一帯に巻かれた魔力で起爆する『対魔龍用』の大型爆弾50個。そして俺の全力全開の砲撃

ティタノクトノン キーラズア由夜セカム
巨神ころし千雷招来！

「くらええええ！」

砲撃後に反射機能を持ったバリア“ギガ・ラ・セウシル”で俺達が攻撃した攻撃を全て中で跳ね返す。

「切り札その2・・・“一斉射撃”」

『オーバーキルな気がしますがね』

「馬鹿言っな・・・バーサーカーの宝具『十二の試練』ゴッ下ハンだっであるんだ。これ以上やったっていいくらいだ・・・」

流石にくたばったとは思えない。傷くらい与えていればいいんだが・

「・・・驚いたな」

煙が晴れ、紅が姿を現す。それは鎧が砕け、かたどっていた人間の姿が吹き飛び、融合したであろう『アンリマユ』が露出した紅。

ゲイ・ボルク
突き穿つ死翔の槍！

ベルレフォーン
騎英の手綱！

魔力全開砲撃！

宝石魔力収束砲！

キーリブ胸ストラペー
千の雷！

それぞれが再び魔力砲撃を出す、それは全て弾き飛ばされる。

「何！？」

霧は糸となり、繭を作る。それはいくら砲撃や斬撃で攻撃してもヒビ一つ入らない。

「つくそ、間に合わない！」

繭が音を立てて割れる。そこにいるのは『全ての悪』そして最弱であつたはずのサーヴァント『アンリマユ』

「お、おい！あれって本当に最弱のサーヴァントだったのか！？」

士郎が声を上げる。確かに、あんなおつかないサーヴァントが最弱とは思えない。バーサーカーの3倍はあるであろう体に、デーモンのような顔と角。そこまでならまだいいのだが、背中には6枚の羽根。おそらく防衛プログラムのなごりなのだろう。はやてと同じ黒い天使の翼。そしてポケモンのメタグロスの様な凶太い腕と、脚

『いつもの外の世界か・・・』

「喋った!？」

原作での声が誰だったか忘れたけど、声これ・・・若本ボイスか？
超貫禄あるんだけど・・・

『聖杯の力がみなぎる。我を取りこんだ男が言う・・・・・・・・貴様を、抹殺せよ』

そう言いながら俺を見る。そしてその射線上にはセイバーがいる

『消えるがいい・・・』

「よけるセイバー!」

俺達に黒い魔力の砲撃が放たれた。

士郎 side

みんなが頑張っている。なのに俺には何もできない。セイバーが危ない、セイバーに何もしてやれない・・・みんなの力になれない・・・

「そんなの、もうごめんだ!」

トレース・オン
投影開始

無我夢中で迅に教わったことをする。イメージするのは常に最強の自分、自分にとって戦う相手は地震のイメージに他ならない・・・そして、それだけではなく『全てを守りたい』という気持ちを、全力でぶつける。

アヴァロン
全て遠き理想郷！

俺は無我夢中で、セイバーの前でそれを展開した。

迅side

「士郎・・・あいつ」

「あれは・・・私の鞘？」

まさか、アヴァロンを・・・しかもこの土壇場で投影するなんてな・・・大した奴だ。

『・・・我が砲撃を防ぐとは』

「つく・・・！」

「よくやった士郎・・・さすがだ」

俺は立ち上がり、構えを取る。

「みんな、まだやれるか？」

「もちろんよ、まだ宝石のストックは十分あるわ」

凜が言いながら宝石を構える。

「私も、士郎と共に……」

セイバーも士郎と並ぶ

「家で桜が待つてます……ここで負けるわけにはいきません」

ライダーも目隠しを外している

「宗一郎様と未来を築く……そのためにも負けるつもりはないわ」

キャスターも魔法陣を展開する

「けっ……しゃあねえなあ」

気だるそうにランサーも立ち上がる。

「……行くぜ？凜、士郎、アルトリア、メデューサ、メディア、クーフリン、準備はいいな？」

本当の仲間に、クラスで呼ぶことなどもうない。最後の戦いなのだから。それを理解してくれたのか、驚いた顔をしていた全員が頷いた。

『もちろん（よ）（だ）（です）（）』

「なら、行くぞー！」

俺の合図で、全員が駆けだす。

ウーラニア・フロゴース
燃える天空！

エクスカリバー
約束された勝利の剣！

俺とアルトリアが攻撃をするが、それは障壁に阻まれる。

『この程度で……』

「どつでしようか？」

「そういうことは」

「これを喰らってから言いなさい！」

ベルレフオーン
騎英の手綱！

魔力全開砲撃！

宝石魔力収束砲！

メデューサ、メディア、凜が上から砲撃をする。

『ごさかしい……』

再び魔力砲が放たれるが、それは俺達には届かない。

「させるか！セイバー！」

「ええシロウ！」

アウアロン
全て遠き理想郷！

『猪口才な・・・』

「喰らいやがれ！」

ゲイ・ボルク
突き穿つ死翔の槍！

いつの間にか背後に回り込んだクーフリンが一撃を入れる。

『ぐっ・・・お？』

「よし、もう一度一斉攻撃だ！」

『聖杯の力得た、我を舐めるなあ！』

突然地震が起き、地割れが起きた。

「何!?!」

そしてそこからマグマが噴出し、俺達を襲つ。

「なっ!?!」

「アイツ、マグマも操れるっていうの!?!」

『消えろお!』

再び魔力の砲撃が放たれる。士郎はセイバーと一緒に吹き飛ばされて気絶している。俺にも投影している時間などない。

「ゼロ！魔法防衛用結界全力展開！」

『オーライ、マイマスター！』

魔力の壁が二重にも三重にも出来る。しかし、その三重の障壁に当たった瞬間、その砲撃は爆発を起こした。

『うあああああっ！』

俺達は吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

「がっは……」

「凜、しっかりしろ……」

「だい、じょうぶ……」

つくそ、ここまでとは………仕方ない

「ゼロ、やるぞ」

『………仕方ありませんね』

「じ、じ……ん？」

「魔力全力展開、リミッターを舌から拾まで全て解除」

『オーライ、マイマスター』

体から魔力が際限なく溢れてくる。そして体が悲鳴を上げる。そのSSSオーバーの計測不能になるほどの魔力EXともなればそうなるか……

「雷炎大壮解除……再度の魔力調整」

『オーライ』

シニストエーミツタゲネット 左腕解放固定 『アルテマ』 デクストエーミツタゲネット 右腕解放固定 『アルテマ』 ドゥブレタスフシオー 双腕掌握！

……切り札、その3だ。

「……術式兵装 ファイナルファンタジー 最終幻想」

これが、俺の最後の戦いだ。

第二十一話「決戦」（後書き）

秋風「はい、ということでも久しぶりの更新なわけですが」

迅「実際、4カ月の間には色々入れる予定だったんじゃないの？」

秋風「もうすぐ学校だからそうも言ってもらえない」

迅「あ、そ」

秋風「そして今回色々出て来たので解説を」

その1

術式兵装 雷炎大壮とは？

迅が作り出したオリジナル兵装第一弾。迅の体に存在する「壱」と表記されたりミッターから「六」と書かれたりミッターまでを外す必要がある。千の雷と燃える天空をそれぞれ解放固定し、掌握する融合魔法。元々相容れぬ雷と炎だが、それぞれを分けて付加させるもの。文章では双腕というが、同じ魔法ではなく最初に右腕、次に左腕と、時間をコンマ0.001秒置いて取りこんでいるので抵抗がない。それによって常時雷化はもとより、炎化もでき、無詠唱で魔法の射手クラスから契約呪文クラスを撃つことができる最強最大の術式兵装

その2

宝具強化とは？

迅が思いつきで作ったもの。それぞれ投影した宝具に魔力付加を与えて本来の威力の数倍にまで上げる。詳しくは付加魔法を参照

その3

付加魔法とは？

読みはプラスマジックと読む。迅が開発した唯一のオリジナル魔法。今まで全てアニメ、漫画、ゲームを参考に使ってきた技ではなく、迅が開発したもの。本来の武装、宝具などに魔力を流し込み、刃の拡張、宝具の効果向上などをする。これならば『NARUTO』のチャクラとはなんら変わりないが、迅のはただ魔力を流したパワーアップではなく、それぞれの武器に合った属性を見極めそれを『100%』まで引き出してから能力を上げる。例えば突き穿^{ケイボル}つ死翔の槍^クには雷の負荷をしたが、これを炎にした場合威力はさほど大きくない。解析上簡単に『貫通力』『殺傷力』を200%で発揮するために『雷』という魔力付加をしている。

その4

術式兵装 最終幻想とは？
ファイナルファンタジー

これも迅の編み出したオリジナル兵装第二弾。「壱」と表記されたリミッターから「十」と表記されたリミッターを解放することで使用できる『神様の力を得た少年』のシリーズで最強の兵装。ネギま！とFINAL FANTASYの融合をした転生者のみが作り出せると言っても過言ではない兵装で、兵装に使われるのはFINAL FANTASYの究極の無属性魔法「アルテマ」。そして身に纏う術式はネギま！の最強の兵装と言っても過言ではない「闇の魔法」。この二つを使用する迅こそ本物の化け物かもしれない。能力については次回明らかになるのでここでは秘密。ただ、想像できるかもしれないが『二つの究極』が迅の体内に宿ることを想像してもらえらるとどうなるか想像もつくと思う。

秋風「こんな感じ？」

迅「結構頑張つて考えたな？」

秋風「いや、けっこううかなー的な」

迅「まじか」

秋風「ちなみにもうすぐ話が終わるので、それにちなんで兵装の名前が『最終幻想』っていう意味もある」

迅「なるほどね」

秋風「では！」

迅「次回、第二十二話『終末』ではまたw」

第二十二話「終末」(前書き)

超久しぶりの投稿です。最近忙しくてすみません

文化祭終了まで待ってくださいね

第二十二話「終末」

術式兵装『ファイナルファンタジー最終幻想』

「……………行くぞ」

「それがお前の最終兵器か？」

最後の力……それは『アルテマ』を体内に取り込む最終奥義

「見せて見る、その力を」

「……………」

俺は飛ぶ。そして魔法を放つ

スターライトブレイカー
星砕く閃光

「!?!」

「……………まだまだ」

避けられたので縮地を使って背後に回り込む。

キーリブ形ストラペー
千の雷!

「馬鹿なつ……詠唱もなしに……!」

ウーラニア・フロゴース
燃える天空

— おわるせかい

両腕からそれを発射し、紅を吹き飛ばす。どやらアンリマユにもその紅の知識は残っているらしい。ここからが本番だ……！

凜side

「……すごい」

私達の前で、その戦いは続いている。さっきまで全く歯が立たなかったアンリマユに対して、迅が完璧に押ししていた。

「あれが、迅の最終兵器」

『術式兵装 ファイナルファンタジー 最終幻想ですね』

『ファイナルファンタジー
最終幻想?』

『迅様の体内にあるリミッターを全て取り払い、究極の無属性魔法『アルテマ』を取りこんだ術式兵装……それは全ての支配と全ての終焉……』

「アルテマって?」

聞いたことのない魔法ね……

『一応、無属性という究極魔法です。普通に射出してもこの辺一帯が消えます。そんな魔法を取りこんだのがあれですから』

やっぱり規格外ってことね・・・あれ？

「でも、どう違うの？」

『簡単に説明すると五代元素の魔法を全て使用できます。呪文詠唱は不要、しかも通常の5倍の威力。さらに並行世界の力を全て使用できます』

ミラーネ・デ・ボシ・ゴレ・ブローモ
?世のガントレット ビッグバンアクセル!

「ぐはっ!」

—タケノコ秋のキャッスルブレイド!

「ぐおおっ!」

「タケノコ!？」

—スペシウム光線!

「ぐがあああっ!」

圧倒的、あの『全ての悪』を押ししている。でも、迅の体がなんか変わった。体がだんだんと透けていく

「あれ、どういことなの・・・?」

「うおおおおおっ!」

— 月牙天衝！

「ぐお、なめるなあ！」

クラウンクラウン
神の道化

「……いく、ぞ……影分身の術」

迅が11人に分身する。そして迅は姿を、武器を変え、それを放つた。

「貴様ごときにい！」

— 飛天御剣流 天を駆ける龍の閃き！

— 大玉螺旋丸！

— ハイマツトフルバースト！

— “不知火型” 紅蓮鳳凰剣！

— チャージセイバー！

— シン・ベルワン・バオウ・ザゲルガ！

— 超究極武神霸斬！

— ダブルプリズムエクストリーム！

ミラーネ・ダイヤボンコレ・プリーモ
? 世のガントレット バーニングアクセル！

— デイバインバスター！

「うがあああああああああつ！？馬鹿な！我が！こんな奴に……！」

アンリマユが叫ぶ。その圧倒的な力の前に、あのアンリマユが押されてきた。そして最後に残っていた迅……つまりオリジナル迅が剣を持って立っていた。約束エクスカリバーされた勝利の剣とは似ているけど違う。黄金の光を放つその剣

「これで終わりだ……全て！」

カリバーン
勝利すべき黄金の剣！

迅side

体が焼けるように熱い……全身が引きちぎれそうになるほど痛い。これがアルテマを引き込んだ代償……でも、負けるわけにもいかない。

「……いく、ぞ……影分身の術」

10人の分身を作り出し、それぞれが姿や武器を変えて構えを取る。それまでに俺は剣を構えた。それは選別の剣……

『（マスター……）』

「……もう、決めたことだ」

『（・・・仕方ありませんね。貴方もなのはさんと同じように頑固ですから）』

「すまないな・・・相棒」

『（マスターとならばどこまでもお供しましょう）』

「・・・決断は決まった。この剣を振り下ろせば、俺は消える。強大なりミッター解放と究極魔法の吸収。それによって得られるのは通常の4倍ある魔力攻撃と、全ての並行世界の力。だがそれを代償に、俺は消えていく。」

「これで終わりだ・・・全て！」

勝利すべき黄金の剣！
カリバーン

俺は最後の力を使った。

凜side

最後の光に包まれ、『全ての悪』ユクムクムは消滅してしまった。私達の勝ち。それは揺るぎのないもの。でも・・・

「迅!?!」

迅の体が、だんだんと透けていた。

「・・・限界、だな」

「そんな・・・だって！」

「悪い、先にやることがある・・・ゼウス」

「・・・何じゃ？」

そこにこの前の神、ゼウスがいた。

「こいつらに・・・英霊たちに、新しい命を」

「・・・それが主の願いか？」

「ああ、そうだ。『聖杯に代わる願い』だ・・・」

迅がそうゼウスに言う。英霊たちって・・・

「世界との契約を絶ち切ろう」

セイバー、ライダー、ランサー、キャスターの体が光り始める。そして、何かが割れる音がした。

「これで、彼らは英霊ではなく“人間”になった。それではな・・・」

そう言ってゼウスが消えた。

「これでいい・・・」

「迅！どうしてよ！約束したじゃない！」

私は必死に迅に訴える。死なないと約束した。一緒に勝つって約束を……

「……すまない」

「なんで……！なんで！」

私は迅にしがみつき、必死に訴える。

「本当は……死ぬつもりはなかった。でも、できなかった」

悲しそうな顔で、迅は私の頭を撫でる。

「どんなに神の本棚を使っても、どんなに『答えを出す者』を使っても、答えは俺の死で決着がつく。これはお前のせいじゃない……俺の弱さだ」

言いながら、迅はセイバー達を見る。

「ランサー……短い期間の契約だったけど、楽しかったよ」

「……ああ、俺もだ」

静かにランサーが答える。

「ライダー……お前とは一番戦ったけど、仲間になってくれて嬉しかった」

「私も、シンジがマスターだったころより、貴方と契約できたほう

が嬉しかった」

ライダーもにっこりとほほ笑んでいた。

「キャスター……葛木と幸せにな、料理作れるようになれよ？」

「あ、貴方に、言われるまでもないわ……！」

キャスターは目を紅くしていた。

「士郎、もう大切な者を取りこぼすんじゃねーぞ」

「ああ、任せろ」

衛宮君は強く頷いた。そして、迅は最後にセイバーに向き直った。

「セイバー……お前とは一番付き合いが長かったな。セイバー……いや、選別の王『アーサー王』今度こそ、本当の幸せを掴んでくれ」

「……はい、ありがとうございます。貴方のことを、私は忘れません」

迅の体が、粒子になり始めようとしていた。

「凜」

「……」

私は答えない。答えたら、迅が消えてしまいそうで怖いから

「俺は・・・凜が大好きだ。だからどうか・・・忘れないでくれ。俺と戦った日々、俺と過ごした平和の日々を・・・」

迅の体を、触ることができなくなっていく。

「迅・・・やだ！消えないでよ！」

「ありがとう凜、この世界で俺が愛した、大切な人・・・」

「迅！だめ！消えないでっば！」

「じゃあ、な・・・」

私の腕に合った呪印は、静かに消えていった。

「嫌　　！」

この日、聖杯戦争という長き戦いは幕を閉じた。しかしそれを代償に、私は大切な人を失った。

迅side

・・・・・・・・・・・・これで、よかったんだよな

『・・・・・・・・マスター』

「ん？」

『前を』

目を開けると、そこは真っ白な空間。そしてそこにいるのは、紛れもない『俺自身』

「よお『ネギま!』の世界はどうだった？」

「……お前も『Fate』の世界はどうだった？」

「どうだろうな。大切なもんはできたけど……泣かせちゃった」

目の前の俺は真正正銘の俺だ。『可能性』の俺は影分身みたいなもんだな。

「俺は知っての通り、俺だ。でも、お前はもう俺じゃない」

「……」

「お前はもう『Fate/stay night』の神谷迅だ。俺じゃない」

「俺は……」

「紅と『全ての悪』^{ユズシノク}はゼウスが收拾したらしい。もうあの世界に悪は反映しないだろう。だがその紅の欠片の全てが消え去ったわけじゃない。お前がもう一度、行けばいい」

全ては平和な世界のために……か

「まあ、選ぶのはお前だ。そのまま望むなら消えればいいしな」

「・・・俺は」

戻って 衛宮家

凜 side

戦いは終わった。私達は衛宮君の家に帰ってきた。

「ただいま」

「シロウ！お帰り！」

「先輩！」

「キャスター、無事か」

イリヤ、桜、葛木が玄関で迎えてくれる。

「ただいま・・・決着はついたよ」

「そっか」

衛宮君の一言でイリヤと桜が喜ぶ。でも、私は喜ぶ気分にはならなかった。

「・・・あれ？迅は？」

「ほんとだ・・・迅さんはどうしたんですか？買い物に行ったとか

？」

私は答えられない。

「……迅は」

「……………」

『マイスターは自らを犠牲に、紅を倒しました』

「「「！！」」」

ルビーがただ一言、そう告げた。残酷なその一言を

「ルビー！」

『事実を申し上げただけです。はぐらかしても結果は変わりません』

「それは……」

確かにそうだ。ここでイリヤや桜を騙しても、それは私自身が自分の傷口を抉るだけ

『マイスターは最後までマイマスター凜を思い、戦いそして散りました。その事実によって貴方達は今ここにいます。それだけは、心の中にとどめてください』

私達の戦いは幕を閉じ、それぞれの場所へと帰っていった。

第二十二話「終末」(後書き)

秋風「ということだ。迅とFateの世界の迅でした」

迅「まぎらわしい」

秋風「そうか？」

迅「まあいい。次回で終わりか？」

秋風「んー、まあね」

迅「なんだよ」

秋風「一応、番外編もある」

迅「あそ」

秋風「ではw」

迅「次回、エピソード『愛する者と愛される者』ではw」

ちなみに解説

ファイナルファンタジー

術式兵装

マキア・エレベア 最終幻想

ネギま!の闇の魔法とFinal Fantasyの究極無属性魔法『アルテマ』を吸収した姿。人の100%の解放魔力を400%に引き上げる。さらに迅の神の本棚と併用することによってその並行世界全ての力を無制限に引き出すことができる。ただし時間がたつごとに劣化し、最後は迅を消滅させてしまうもろ刃の剣。

エピソード「これからの未来」(前書き)

今までありがとうございました！次回後書きです！

エピソード「これからの未来」

凜side

・・・戦いが終わってから早くも一年が過ぎた。迅は帰って来ない。今は3月。私は無事に高校を卒業した。このままロンドンにある『時計塔』という魔術の大学へと留学する。

「・・・馬鹿迅」

ほんとは、迅と一緒に留学したかったのに

『マイマスター、もうお休みになれては？』

「ええ、そうね」

私の手元に残ったのは結局迅の作ったルビーだけだった。他のメンバーはというと、衛宮君と桜とセイバーはもうすっかり夫婦だ。学生結婚したのではというくらいにラブラブで、正直あの空気には参った。ライダーはそれを影から見守っている。桜の幸せのために、彼女は那道を選んだ。そしてランサーは旅に出た。自分の戦った歴史、自分の歩んだ道を、死んだ戦友たちを弔いたいのだという。イリヤはアインツベルンに戻るかと思いきや、ランサーについていた。あの子は最後までよくわからない。でもわかったのは、あの子は実をいうと私達より全然年上だということだった。

『そういえばマスター、招待状の返信はしましたか？』

「・・・忘れてたわ」

キャスターと葛木は本当に夫婦になった。4月に結婚するらしい。しかももうおなかには子供がいるとかいないとか。いったいどんな子供ができることやら。

「私はもう寝るわ。お休み」

『イエス、マイマスター』

次の日

「じゃあ、お願いします」

「はい、お預かりします」

聖杯戦争は終わり、この街は私の管轄から一度離れる。今から数年間『時計塔』で魔術を学ぶためにロンドンへ行くからだ。

「この街とも、お別れね」

『マイマスター、飛行機の時間まで余裕はありますか？』

「・・・わかってるわよ」

一年前と少し前の月に、私は聖杯戦争に参加し、そして戦った。アイツと一緒に・・・でも、アイツはもういない。

凜

「迅の、馬鹿……」

私の目からボロボロと涙がこぼれる。私は……

『マイマスター……』

「……行きましょルビー。少し早いけど、空港に行くわ」

『オーライ』

そう言つて私は涙をぬぐつた。その誰もいない丘の公園で。でも、その時だった。不意に、背中に視線を感じた。後ろを振り返ると、そこにはフードを被つた男がいた。私はとっさにルビーを構える。男は一步、また一步と近づいてくる。

「……あなた、何者？」

「……この一年で、随分たくましくなったな」

「……え？」

突然だった。本当に。その声は、私が聞いたことがある。優しく、温かい声。そして男がフードを取った。

「凜」

「……嘘」

そこにいたのは、私が愛し、共に闘つた男、神谷迅がいた。

「悪かったな、凜。時の狭間の一時間はこの世界では一年らしい。帰るのが遅くなっちまった」

「……………じ、ん」

「もう、何の心配もない。これからはずっと、お前と一緒にいられる」

それを聞いた瞬間、私の中の何かが一気に弾け飛んだ。私は無我夢中で迅に抱きついた。

「うあああああああああああああああああああつ!!!!!!
馬鹿あああ！」

「うおあつ!?!り、凜!」

「うあああああああああああああ!!!」

「……………ごめんな、凜」

私は必死に涙を止め、迅を見てキスをした。迅もそれを受け入れ、目を閉じてくれた。

「謝ってんじゃないわよ、馬鹿……………でも……………」

私は一番言いたかったことを行つた。

「……………お帰りなさい」

これで本当に、聖杯戦争は結末を迎えた。でもこれから私達の物語は終わらない。友に道を歩き、そしてこれからもずっと、傍にいてよね……迅

F i n

エピソード「これからの未来」(後書き)

次回後書きです

後書き(前書き)

後書きです

後書き

とりあえずこれにて連載は終了です！約2カ月の連載でしたが、充実した連載だと思っております。とりあえず神様シリーズのIFつてことで、色々無茶もやりましたが楽しかったです。ぶつちやけFateのゲームやったことなかったなので、最初はどうなるかと思いましたが、無事に終わったのでよかったと思っております。

それと、今までの累計では普通に10万アクセス超えてました。ありがとうございます。ぶつちやけただけファンの人を敵に回すのかとびくびくしてました。でも面白いとか言ってくれるので、嬉しかったです。ありがとうございます！

あとは本編を近日中に書く予定なので、そちらもお楽しみに

さらに、個人的にまだ番外編を予定してるのでお楽しみに！でわw

後書き（後書き）

すぺしやる さんくす

原案 MY FRIEND

小説 秋風

原作内容情報 赤夜叉先生

AND YOU

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4106n/>

Fate/stay night 神様の力を得た少年IF

2010年12月7日10時57分発行